福岡市埋蔵文化財調査報告書第 354 集

能古島

NO KO

—能古島遺跡発掘事前総合調査報告書—

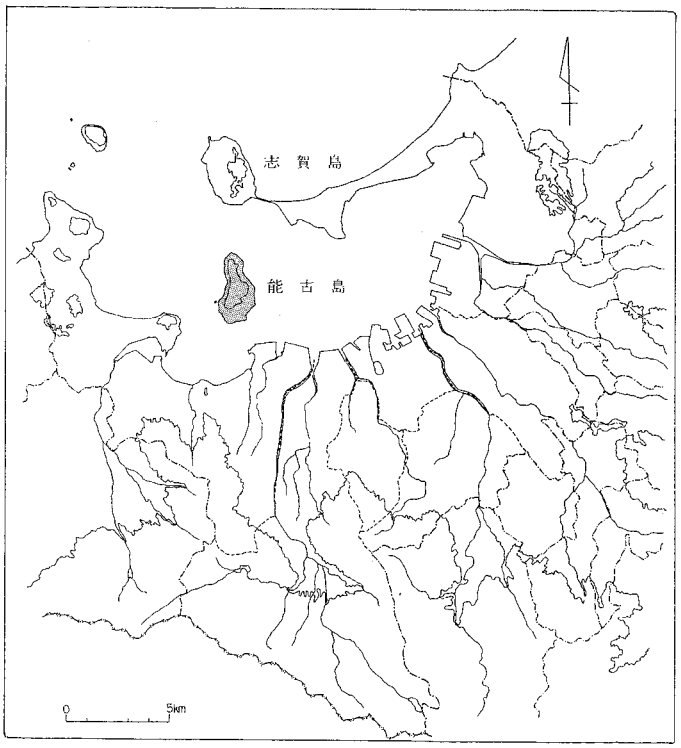
1993

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集

NO KO
能古島

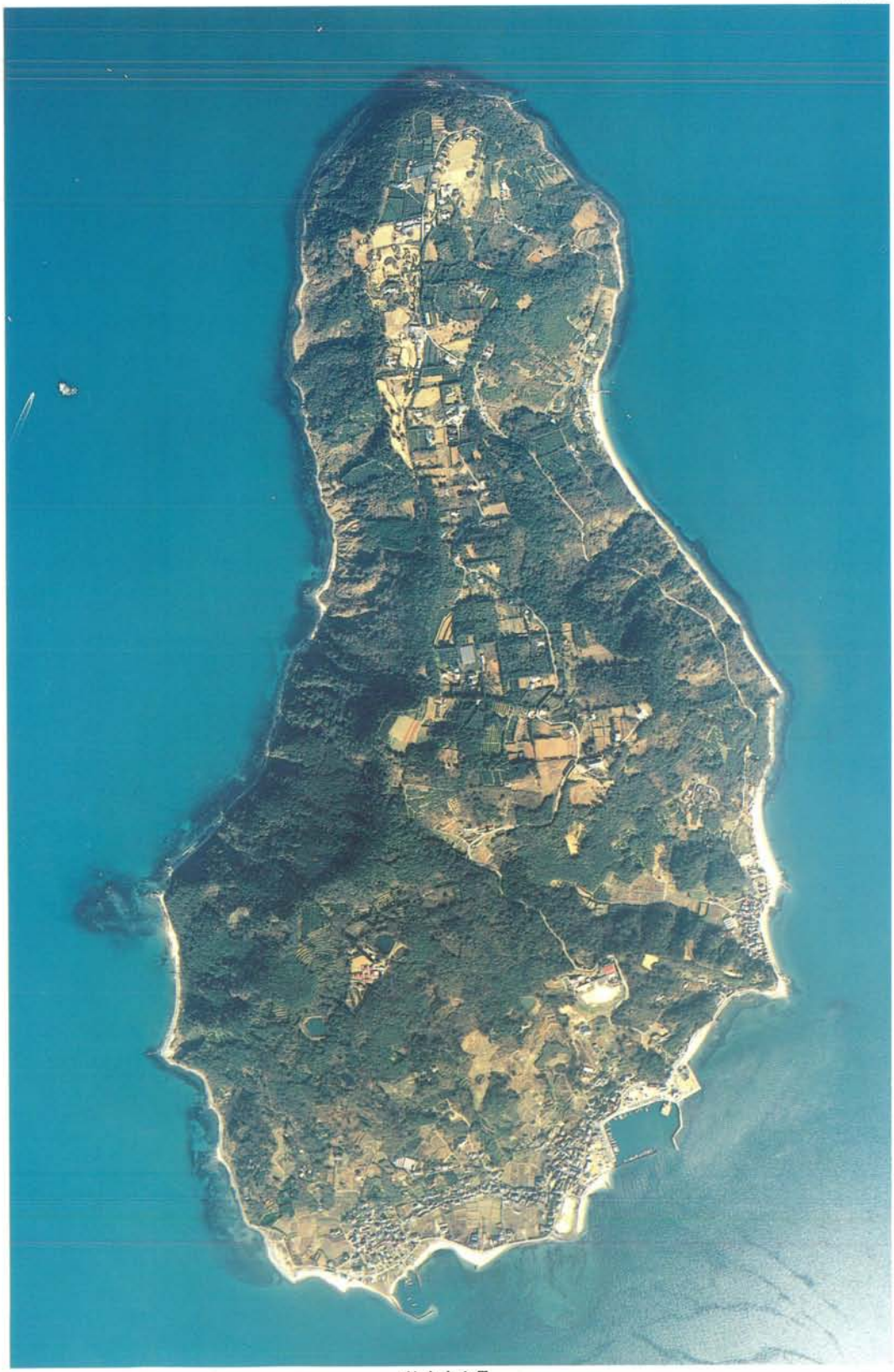
—能古島遺跡発掘事前総合調査報告書—



調査番号9219

1993

福岡市教育委員会



能古島全景

序

「海と歴史を抱いた文化の都市」を目指して都市づくりを進める福岡市は古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。その入口である博多湾には２つの島が浮かんでいます。１つは「漢委奴国王」の金印が見つかった志賀島で、もう一つは能古島です。能古島は全周８㎞足らずの小さな島ですが、その歴史は古く、万葉集にその地名は登場します。近年、急速な都市開発が進む福岡市にあって、能古島は自然と歴史が残っている数少ない場所であります。

福岡市教育委員会は平成４年度、国庫の補助を受けて能古島の遺跡発掘事前総合調査を行いました。この調査は将来の開発に備え、事前にその地域の遺跡の範囲や性格を把握することを目的としています。

本書は能古島遺跡発掘事前総合調査の報告書であります。本書によって市民の皆様が遺跡を身近に感じ、その大切さを知るきっかけになれば幸いです。

最後に調査に当たり、快くご協力をいただいた能古島の方々に心から感謝いたします。

平成５年１月

福岡市教育委員会
教育長　井口雄哉

例　　言

1．　本書は平成４年度、福岡市教育委員会が国庫補助を受け実施した、能古島遺跡発掘事前総合調査の報告書である。

2．　本書に使用した遺構の実測は菅波正人、林田憲三、梅崎元、島津明男、栗田正治、久家隆芳、境靖紀が、遺物の実測図は黒田和生、英豪之が行った。製図は林田、英が行った。

3．　本書に使用した遺構、遺物の写真は菅波が撮影した。

4．　本報告書の作成にあたっては高田豊、井出邦子、原典子、有島美江の協力を得た。

5．　本書に使用した方位は磁北である。

6．　本書の付図には能古島土地利用現況図(付図１、1/10000)、能古島表層地質図(付図２、1/10000)、能古島遺跡分布図（付図３、1/10000)、北浦城跡現況測量図（付図４、1/500)、古土手現況測量図１、２（付図５、６、1/500）がある。そのうち、付図１、２は福岡市整備局発行「福岡市土地利用細部調査報告書」1988年をもとに作成した。付図４～６は福岡市道路台帳をもとに作成した。付図３の遺跡名は福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図西部Ⅲ」1984年に使用されたものを踏襲した。

7．　本書の執筆、編集は菅波が行った。また、付編で、吉留秀敏氏（埋蔵文化財課）には、「能古島採集の神子柴型石斧について」、高田茂廣氏(福岡地方史研究会幹事)には「能古の歴史」、林田憲三氏（九州･沖縄水中考古学協会会長）には「博多湾海底出土遺物とその意義」の玉稿を頂いた。

8．　本報告書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化センターに収蔵、保管される予定である。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　１．調査の経緯……1
　２．調査の組織……2
第２章　能古島の位置と歴史的環境……3
　１．能古島の位置と周辺の遺跡……3
　２．これまでの調査成果……6
第３章　分布調査の記録……11
　１．調査の方法……11
　２．調査の概要……11
　３．小結……15
第４章　試掘調査の記録……35
　１．調査の概要……35
　２．Ｉ－４区（烽跡推定地）の調査……37
　３．Ｇ－８区（通称牛の水）の調査……41
　４．Ｋ－19区（通称古土手）の調査……47
　５．Ｒ－26区（北浦城跡）の調査……51
　６．Ｎ－29区（永福寺箱式石棺墓）の調査……57
　７．Ｌ－30区（古宮）の調査……61
　８．Ｈ－26区（早田古墳１号、２号墳）の調査……65
　９．Ｉ－25区（通称鹿垣）の調査……77
　10．Ｎ－23区（浦谷宝篋印塔）の調査……83
第５章　まとめ……87
付編１　能古島採集の神子柴型石斧について　吉留秀敏……88
付編２　能古の歴史　高田茂廣……91
付編３　博多湾海底出土遺物とその意義　林田憲三……104

挿　図　目　次

Fig. 1　能古島とその周辺（1/100000）……3
Fig. 2　能古島全景（南から）……4
Fig. 3　能古島全景（南西から）……4
Fig. 4　能古島也良岬（北から）……5
Fig. 5　能古島南部（東から）……5
Fig. 6　能古島遺跡分布図（1/25000）……7
Fig. 7　能古焼窯跡遠景（東から）……9
Fig. 8　能古焼窯跡（南から）……10
Fig. 9　能古島北部（南から）……12
Fig.10　能古島南部（南から）……14
Fig.11　能古焼窯周辺表採遺物実測図（1/3）…16
Fig.12　能古焼窯周辺表採遺物及び寄贈資料……17
Fig.13　能古島遺跡調査区割図（1/20000）……19
Fig.14　表採遺物出土位置図１（1/2500）……20
Fig.15　表採遺物出土位置図２（1/2500）……22
Fig.16　表採遺物出土位置図３（1/2500）……24
Fig.17　表採遺物出土位置図４（1/2500）……26
Fig.18　表採遺物出土位置図５（1/2500）……28
Fig.19　表採遺物出土位置図６（1/2500）……30
Fig.20　表採遺物出土位置図７（1/2500）……32
Fig.21　表採遺物出土位置図８（1/2500）……33
Fig.22　試掘調査地点位置図（1/20000）……36
Fig.23　Ｉ－４区調査地点位置図（1/1000）……37
Fig.24　Ｉ－４区調査トレンチ配置図（1/300）……38
Fig.25　Ｉ－４区出土石鏃実測図（1/1）……39
Fig.26　Ｉ－４区１トレンチ（南から）……39
Fig.27　也良岬から玄界島を望む（南から）……40
Fig.28　也良岬から志賀島を望む（南から）……40
Fig.29　也良岬から海の中道を望む（西から）…40
Fig.30　也良岬から博多を望む（西から）……40
Fig.31　Ｇ－８区調査地点位置図（1/1000）……41
Fig.32　Ｇ－８区周辺測量図（1/300）……42
Fig.33　土塁土層断面図（1/80）……43
Fig.34　牛の水縦断面図（1/300）……44
Fig.35　Ｇ－８区調査地点遠景（南から）……44
Fig.36　土塁（南から）……45
Fig.37　土塁断面（東から）……45
Fig.38　土塁土層断面（北から）……46
Fig.39　土塁Ａトレンチ土層断面（南から）……46
Fig.40　Ｋ－19区調査地点位置図（1/1000）……47
Fig.41　Ｋ－19区周辺測量図（1/300）……48
Fig.42　Ａトレンチ土層断面図（1/80）……49
Fig.43　Ａトレンチ出土遺物実測図（1/3）……49
Fig.44　Ｋ－19区古土手（南から）……49
Fig.45　Ｋ－19区古土手（西から）……50
Fig.46　Ａトレンチ土層断面（東から）……50
Fig.47　Ｒ－26区調査地点位置図（1/1000）……51
Fig.48　Ｒ－26区周辺測量図（1/300）……52
Fig.49　Ａトレンチ土層断面図（1/80）……53
Fig.50　出土遺物実測図（1/3）……53
Fig.51　作業風景（北から）……54
Fig.52　Ｒ－26区（北浦城跡）遠景（西から）…55
Fig.53　Ｒ－26区（北浦城跡）遠景（西から）…55
Fig.54　Ｒ－26区堀（南から）……56
Fig.55　Ａトレンチ土層断面（南から）……56
Fig.56　Ｎ－29区調査地点位置図（1/1000）……57
Fig.57　Ｎ－29区周辺測量図（1/400）……58
Fig.58　箱式石棺墓実測図（1/40）……58
Fig.59　作業風景（西から）……59
Fig.60　箱式石棺墓完掘（南から）……60

Fig.61　箱式石棺墓完掘（東から）……60
Fig.62　L－30区調査地点位置図（1/1000）……61
Fig.63　L－30区調査トレンチ配置図（1/300）……62
Fig.64　L－30区遠景（北から）……62
Fig.65　L－30区Bトレンチ遺構実測図（1/40）…63
Fig.66　L－30区Aトレンチ（西から）……64
Fig.67　L－30区Bトレンチ（西から）……64
Fig.68　H－26区調査地点位置図（1/1000）……65
Fig.69　H－26区周辺測量図（1/200）……66
Fig.70　早田古墳1号墳石室平面図（1/60）……67
Fig.71　早田古墳2号墳丘土層断面図（1/60）…68
Fig.72　早田古墳2号墳石室及び外護列石実測図
（1/60）……69
Fig.73　2号墳出土遺物実測図（1/3、1/1）、
及び遺物写真……71
Fig.74　1号墳現況（北から）……72
Fig.75　1号墳石室現況（南から）……72
Fig.76　2号墳現況（南から）……73
Fig.77　2号墳石室現況（南から）……73
Fig.78　2号墳羨道現況（南から）……74
Fig.79　2号墳羨道（北から）……74
Fig.80　2号墳石室（南から）……75
Fig.81　2号墳玄室（南から）……75
Fig.82　2号墳玄室隅（左壁、右壁）（南から）……76
Fig.83　2号墳梱石（北から）……76
Fig.84　I－25区調査地点位置図（1/1000）……77
Fig.85　鹿垣平面分布図（1/10000）……78
Fig.86　鹿垣土層断面図（1/80）……79
Fig.87　鹿垣（西から）……80
Fig.88　鹿垣（北から）……81
Fig.89　鹿垣（西から）……81
Fig.90　鹿垣（西から）……82
Fig.91　鹿垣（西から）……82
Fig.92　N－23区調査地点位置図（1/1000）……83
Fig.93　宝篋印塔実測図（1/4）……84
Fig.94　宝篋印塔（南から）……85
Fig.95　宝篋印塔（南から）……86
Fig.96　宝篋印塔（西から）……86

表　目　次

Tab. 1　表採遺物一覧表……18
Tab. 2　試掘調査地点一覧表……35

付　　図

付図 1　能古島土地利用現況図（1/10000）
付図 2　能古島表層地質図（1/10000）
付図 3　能古島遺跡分布図（1/10000）
付図 4　北浦城跡現況測量図（1/500）
付図 5　古土手現況測量図 1（1/500）
付図 6　古土手現況測量図 2（1/500）

第１章　はじめに

１．調査の経緯

福岡市には、日本の稲作の発祥地の板付遺跡、「漢委奴国王」の金印が発見された志賀島、古代の迎賓館の鴻臚館、中世の貿易都市の博多遺跡等、古代から対外交渉の拠点であったことを示す遺跡が多く残っている。

近年、福岡市は都市機能の充実のための公共交通網の整備、港湾整備、都市部の再開発事業、住宅建設等の開発が行われ、海にひらかれたアジアの拠点都市としてめざましい発展を見せている。しかし、その一方で、開発に係わる埋蔵文化財の調査も年々増加しており、福岡市教育委員会ではそれらの調査、記録保存に対応している。

平成４年度、福岡市教育委員会は国庫の補助をうけて、単年度事業で、「遺跡発掘事前総合調査」を実施した。この調査は近い将来の大規模な開発が予想される地域の遺跡の所在、範囲、性格を把握し、将来の開発に備えることを目的としている。今回の調査は「能古島」（のこのしま）を対象地とした。

能古島は博多湾に浮かぶ、南北3.5km、東西２kmの南北に長いナスビ形の島である。市営渡船で姪浜まで約10分で結ばれ、その距離は約2.4kmである。人口約1000人余りの半農、半漁の島であるが、都市近郊の行楽地で、春から秋にかけて釣りやハイキング、海水浴等に訪れる行楽客でにぎあう。近年、急速な都市化が進む福岡市にあって、豊かな自然が残る数少ない地域である。また、能古島の歴史は古く、万葉集を初めとして、多くの文献に登場する。そして、島にはそれらの文献に登場する遺跡、地名が数多く残っている。しかし、これまで考古学的調査はほとんど行われておらず、実体が不明確なものが多い。したがって、今回の調査は都市化の波が及びつつある能古島の遺跡の範囲、性格を明らかにし、将来の開発に備えての基礎資料作りを目的とした。

調査はまず、遺跡の範囲、性格等を把握するために分布調査を行った。その成果を基に試掘調査を行い、遺跡の性格、時期等の確認に努めた。調査の工程は以下の通りである。

(1)調査前の準備（４～５月）

・地元説明会－調査の意図、内容の説明

(2)分布調査（５月）

・分布地図にある遺跡を中心に全島を踏査、その成果を基に試掘地点を確定する

(3)試掘調査（６～12月）

・遺跡の範囲、性格の把握

2．調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。

調査指導　文化庁記念物課主任文化財調査官　河原純之
文化財調査官　井上和人
文化財調査官　松村恵司
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉
文化財部長　花田兎一
埋蔵文化財課長　折尾学
埋蔵文化財第二係長　塩屋勝利
調査庶務　埋蔵文化財第一係　中山昭則
調査担当　埋蔵文化財第二係　菅波正人
調査補助　林田憲三
調査作業　家村富基郎　梅崎元　太田孝房　河井健　久家隆芳　栗田正治　斎藤義弘　境靖紀　島津明男　杉本信也　坪内岩男　原田勝司　藤田圭三　松本浩二　山口和哉　吉岡清巳　石原道江　井手邦子　北野キミ子　高田豊　原典子　吉岡アヤ子　吉岡員代　吉岡竹子
整理補助　林田憲三　黒田和生　英豪之　村上かをり
整理作業　有島美江　大友和子　佐々木涼子　藤信子
地元協力者　高田茂廣　中村久作　久保田耕作　久保田晋平　関武雄　北野梅三郎　宇賀紀雄　東野重人　松尾稔　国田民旗　前田瀧郎　能古島の島民の皆様　能古島公民館　久保田観光株式会社（のこのしまアイランドパーク）
調査協力　小田富士雄（福岡大学人文学部教授）　武末純一（福岡大学人文学部助教授）　田崎博之（愛媛大学教養部助教授）　原俊一（宗像市教育委員会）　古川千賀子　山口亨　上島忠　岡田淑子　桐田八千柔　横尾守　伊藤靖江　菊地智恵　是田敦　境靖紀　高木素子　中野聡子　東哲志　藤本岳史　山本かおる（福岡大学人文学部考古学研究室）

調査にあたって、高田茂廣氏には調査の準備段階から多くの助言、指導をうけた。また、付編で能古島の歴史について玉稿をいただいた。調査中は試掘調査をさせていただいた地主の方々を初めとして、能古島の島民の皆様には数々のご指導、ご協力を賜った。記して、謝意を表したい。

第２章　能古島の位置と歴史的環境

１．能古島の位置と周辺の遺跡

能古島は博多湾に浮かぶ、東西約２km、南北約3.5kmの南北に長いナズビ形の島である。行政的には福岡市西区に属する。面積約3.96km²、最高点195mを測る。島から周辺までの距離は島の南端の浜崎から姪浜まで約2.4km、西端の白鳥崎から今津まで約2.0km、島の北端の也良岬から志賀島まで約2.4kmを測る。市営渡船で姪浜から約10分程で着く。

島の地形は南部は比較的緩やかな丘陵で田畑、果樹園、民家等が数多く見られる。また、海岸部には港が見られる。中央から北部にかけては最高点195mの起伏の少ない大地が続く。頂上部の中央には畑、果樹園、公園等があるが、縁辺部は山林である。島の北側から西側の海岸部は切り立った崖である。

地質構造は島の北部から中央にかけては北崎花崗閃緑岩、三郡変成岩、古第三紀層が基盤となり、その上を玄武岩が覆っている。島の南半は古第三紀層残島層が露出する。また、島の南

Fig. 1　能古島とその周辺（1/100000）

Fig. 2　能古島全景（南から）

Fig. 3　能古島全景（南西から）

Fig. 4　能古島也良岬（北から）

Fig. 5　能古島南部（東から）

半部の数カ所で、古第三紀層堆積後、玄武岩噴出前に堆積した能古島砂礫層と呼ばれる礫まじりの砂岩層が見られる。

周辺の遺跡を見ていくと、島の北側には「漢委奴国王」の金印が出土した志賀島がある。それに連なる砂州の中ほどには海の中道遺跡がある。これまでの調査で漁労具や製塩土器等の生産具の他、越州窯青磁、銅銭等一般の集落ではみられない遺物が多く出土しており、太宰府の津厨との関連が指摘されている。

一方、島の南側の博多湾沿岸には数多くの遺跡が分布する。博多湾に面して今津から香椎にかけては元寇防塁がある。この内、西新付近の防塁には能古島の玄武岩が用いられたと考えられている。能古島の玄武岩は福岡城の石垣にも使用されている。

沿岸部の砂丘上には東から堅粕遺跡、博多遺跡、西新遺跡、藤崎遺跡、今宿遺跡等の弥生時代に始まる遺跡が数多く分布する。今津湾に面した玄武岩地質の独立丘陵には弥生時代石器製作跡の今山遺跡がある。

このほか、博多湾内ではこれまでに数々の遺物が引き上げられている。これについては付編の林田氏の報告を見ていただきたい。

2．これまでの調査成果

能古島の歴史、遺跡については高田茂廣氏の「能古島物語」に通史的に詳細が述べられている。これまで能古島の考古学的調査はほとんど行われておらず、能古焼窯跡の発掘調査以外は福岡市教育委員会が行った分布調査と三野章氏、塩屋勝利氏による採取資料の紹介のみである。今回、付編に高田氏による能古島の歴史の概要があるので、ここではこれまでの考古学的調査と周知の遺跡について見ていく。

能古島の歴史は採取遺物から旧石器～縄文時代まで溯る。これまで、当該期の遺構は確認されていないが、島の北端の也良岬では今回付編で紹介した神子柴型の石斧が採取されている。また、島の南部の丘陵部の江の口、西では黒曜石剥片が数多く採取されている。

弥生時代では島の南西部の海岸部では弥生時代中期の土器が採取されている。この資料は三野氏によって紹介されているもので、島の南西部の海岸に面した磯部公園の裏の畑で出土したとある。現在もこの畑では弥生土器、黒曜石等を採取することができる。また、東側の海岸部にある北浦では弥生時代前期末に位置づけられる甕や貝殻施文を施した壺等を採取している。この資料は塩屋氏によって紹介されているもので、南に面した斜面を削った際に出土したとある。この他、先に述べた也良岬では太型蛤刃石斧、抉入片刃石斧等が採取されている。

古墳時代では３基の古墳が知られている。そのうちの１基の鬼塚古墳は島の中央の標高約110mの丘陵部に位置する古墳である。現在は完全に破壊され、残っていない。地元の人の話による

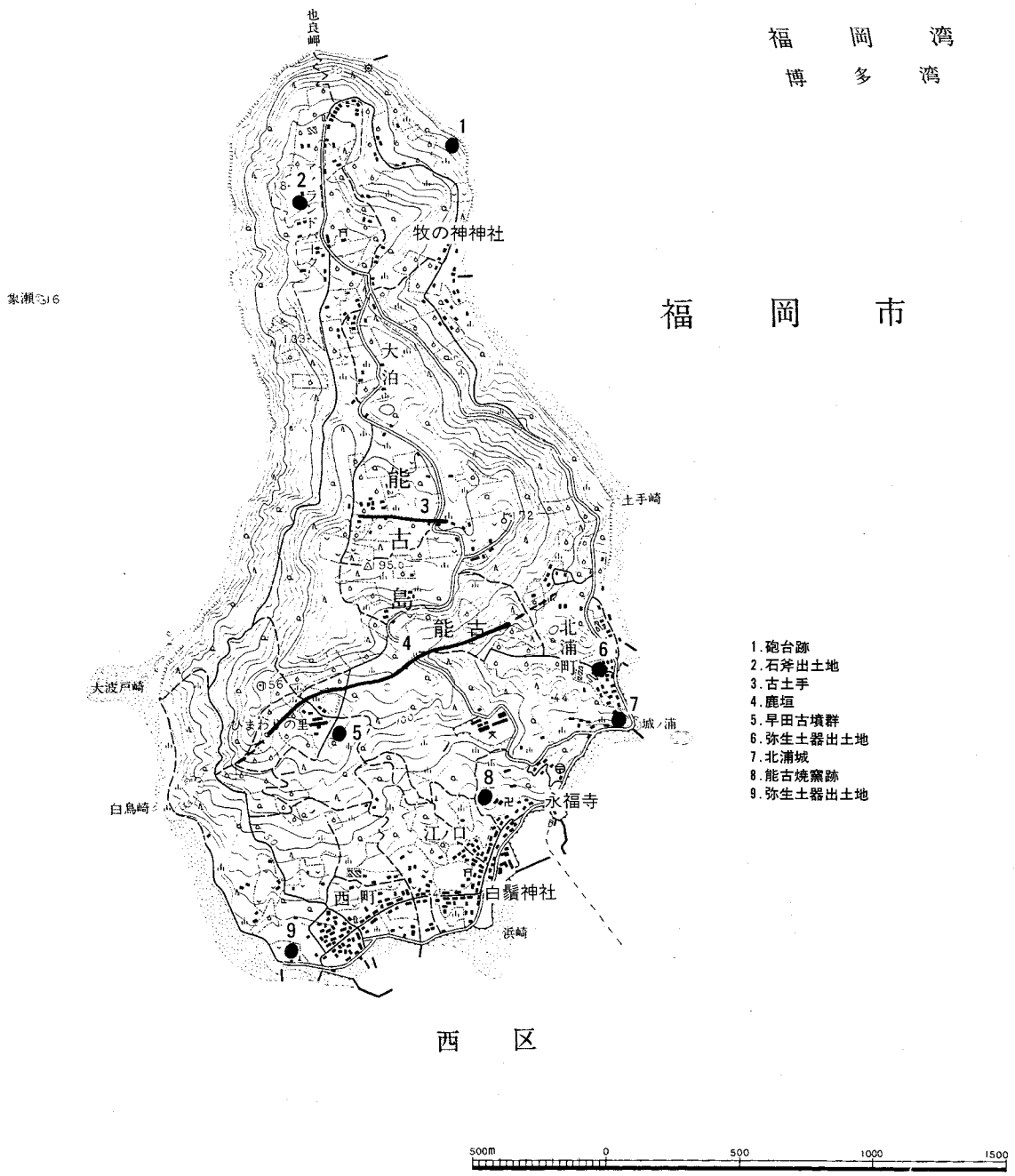


Fig. 6　能古島遺跡分布図（1/25000）

と、古墳は戦前まで残っていたが、畑を開墾するときに壊したという。石室はその時には開口していて中には4、5人が入ることができたそうである。この周辺には他に古墳は見られない。鬼塚古墳以外の古墳は島の中央部からやや南西に位置する早田古墳がある。現在、山林の中に2基の円墳が確認されている。1基は石室はかなり破壊されているが、もう1基は比較的良く残っている。石室の形態等から6世紀～7世紀と考えられている。これ以外に時期は確定できないが、島の南東部にある永福寺の裏手の丘陵の先端に箱式石棺墓が1基残っている。昭和50年頃、能古中学の学生によって発掘されたが、中からは何も出土しなかったという。現在は埋め戻され、蓋は近くにある慰霊碑の礎石の一部に使用されている。集落遺跡についてはこれまで発見例はない。

古代以降の遺跡では島の東側の海岸部に張り出した岬の上に山城が造られている。この城は城崎古城、北浦城跡と呼ばれ、現在は幅約4m程の堀が残っている。「早良郡誌」や「筑前国続風土記拾遺」等によると、山上億良あるいは藤原純友の家臣の伊賀寿太郎が造ったとあるが、いずれも定かではない。

島の北側の頂上部は比較的平坦で放牧に適しており、この地域は牧場に関連すると考えられる遺構が見られる。能古島には平安時代、筑前国の牛牧が置かれていたことが延喜式の記載から知られている。その後も資料的には見られないが、断続的に牧場経営は行われたと考えられる。江戸時代になると、馬牧が行われていたことを示す資料が見られる。現在、「牛の水」と呼ばれる池や「古土手」と呼ばれる土塁等が残っている。

江戸時代の遺構では島の南半部、北浦から白鳥崎までの東西約2㎞に渡って石垣が造られている。この石垣は「鹿垣」と呼ばれ、天保七年（1836）に完成したとある。能古島には江戸時代、黒田藩の狩猟場があり、この石垣は鹿や猪が島の南側に逃げだすことを防ぐために造られたものである。石垣の構造は土塁の北側だけに石を積んだもので、高さ約1.5～2.0mを測る。現在、道路や開墾のため寸断しているが、比較的良く残っている。

先に触れた島の南東部に位置する永福寺の裏手には能古焼窯跡がある。能古焼窯は文献等から明和～天明年間（1764～1787年）の短い期間に操業された窯で、現在1基が残っている。昭和63年10月～12月に田崎博之氏（現愛媛大学教養部助教授）により、発掘調査が行われ、市の史跡に指定されている。調査の報告書は未刊であるが、窯跡の概要は紹介されている。ここでも簡単に能古焼窯跡について触れておく。

窯本体は焚口部、焼成室7室を含む8室構造の連房式登窯である。窯跡の前面はほぼ平坦に削られ、窯尻の後方には馬蹄形の溝が巡る。また、窯跡の東半部の両側で溝状遺構が検出されている。窯本体の全長約22m、窯尻後方のは馬蹄形の溝を含めると26.5m、比高差5.2mを測る。主軸方位はN－72°50′-Wである。ただし、窯全体が3室を境として南にやや屈曲しているため、主軸がずれている。焼成室も第1室から第7室に向けて次第に大きくなり、第1室では1.32×2.68mに対して第7室は3.16×5.28mを測り、約2倍になっている。焼成室はいずれも南

Fig. 7　能古焼窯跡遠景（東から）

側に出入り口を設けている。床面は西（焚口部）に向かって若干傾斜する。奥壁は第１～第４室が石積みで、第５～７室は磚積みで構成されている。壁体は高さ約0.7～1.6m程遺存していた。壁体の厚さは基底で65～90cmで、第６室を除く全室の側壁の南側に色見穴がある。壁体内部には磚や窯道具が塗りこめられ、壁体の修復が繰り返されたことが窺える。

遺物は焼成室や周辺の溝状遺構から陶磁器、窯道具が出土している。出土遺物の内、窯道具が大半を占める。陶磁器は有田焼系の染付の碗、皿、蓋、高取焼系の碗などが出土している。資料分析を行った二宮忠司氏によると、出土量の多い染付の皿類の特徴として、見込みに昆虫文様を手描きし、蛇の目高台に一重もしくは二重の方形の枠内に「渦福」と記するということが上げられる。

この他、指定文化財に能古白鬚神社おくんち行事、石橋家廻船資料がある。

参考文献

福岡市都市整備局編「福岡市土地分類細部調査報告書」　1988年
高田茂廣「能古島物語」能古歴史研究会　1971年
伊藤尾四郎「残島村史」
福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図　西部Ⅲ」　1984年
三野章「福岡市能古島の須玖式土器」九州考古学１　1957年
塩屋勝利「福岡市能古島の考古資料」福岡市歴史資料館報告書第８集　1984年
二宮忠司編「太田遺跡（Ⅲ）－市道野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査報告書－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第304集　1992年

Fig. 8　能古焼窯跡（南から）

第３章　分布調査の記録

１．調査の方法

能古島は東西２㎞、南北約3.5㎞、面積約４㎢を測る。地形も島の南側は緩やかな丘陵であるが、北半分は切り立った崖である。頂上部は比較的平坦な台地で最高位の標高195mを測る。現況は山林が大半を占め、田畑、果樹園、住宅地、公園と多様である。

分布調査に先立って、2500分の１の都市計画図を用意し、調査のための地区割りを行った。島の現況は山林が多く、地割りも小さく複雑であることから、地区割りは都市計画図の座標系に従って、島全域に100m四方の座標を設定した。そして、東西方向は西からＡ、Ｂ、Ｃ、…Ｒ、Ｓまでの19のアルファベットと南北方向は北から１、２、３、…35、36までの数字を付けて、個々の座標を表す記号とした(例、Ｈ－25、Ｊ－32、Ｌ－18等)。そして、個々の地区内での細分は地目ごとで枝番号を付けて表した(例、Ｈ－25－１、Ｈ－25－２等)。次にこの地区割りを基に、遺物の採取場所を記すための地図を作成した。地図は2500分の１の都市計画図に地区割りを重ねたものを、持ち運び易いように切り分けて、Ｂ４サイズのカードにした。１枚のカードに東西800m、南北600m分(48区画)が示される。このカードに遺物の採取場所や残存している遺構、聞き取りの内容等を記した。

分布調査は田、畑、果樹園を中心に５月上旬から行った。

２．調査の概要

分布調査では各地区で縄文時代～江戸時代にわたる様々な遺物を採取した。今回の分布調査の採取地点、遺物の種類等はTab.１に示した。ここではそれらの概要を述べていく。

Ｄ－１区～Ｋ－６区（Fig.14）

島の北端にあたる北側に傾斜する緩斜面である。沿岸部は切り立った崖に立っている。緩斜面には公園、果樹園などがあり、開墾がかなり行われている。万葉集に登場する也良岬はこの地点である。今回の調査では遺物は採取できなかったが、Ｉ－４区で10年以上前に炭が多量に出土する所が確認されており、この場所に防人とともに設置された烽があったのではないかと推測されている。

Ｄ－７区～Ｋ－12区（Fig.15）

島の北側にあたる。中央は標高100～120m程の起伏のある台地である。両側は海岸に向かって

Fig. 9　能古島北部（南から）

急傾斜する斜面である。台地部分は公園、果樹園となっていて、開墾がかなり行われている。G－7、G－8区ではこれまでに玄武岩製太形蛤刀石斧、抉入片石斧等が採取され、塩屋勝利氏により資料紹介がなされている。G－7区には「牛の水」と呼ばれる池がある。江戸時代の文献にも登場する。台地部で数少ない水源である。I－8、I－9、H－10区では土師器、黒曜石剝片等を採取した。I－10区では畑の斜面に弁当貝塚と呼ばれている貝層が見られる。遺物は見られない。I－11区では聞き取り調査によると、昭和初期の開墾の際に礎石らしきものが並んでいるのが発見された。また、その際に甕も出土したという。現在は約2mの削平により、そのことを伺うことはできない。周辺では近世陶磁器を採取した。東側のJ－11区には石組の井戸がある。上部の石は昭和初期の開墾時に積み直したものであるが、それ以前からあったとされる。

この地点は中央に比較的平坦な台地で、谷部に水源もある。遺物は縄文時代、弥生時代に溯るものも採取されており、当該期の遺構の存在が予想される。また、幾つかの地点で土師器等が採取されており、防人、延喜式にある牛牧に関連する遺構も考えなければならない。

D－19区～K－24区（Fig.16）

島の中央西側にあたる。島の頂上部付近で、西側は切り立った崖である。頂上部付近は果樹園、畑がある。I－19、J－19、K－19では古土手と呼ばれる土塁が残っている。幅約3～5m、高さ約1～1.5mを測る。また、土塁の周辺で近世陶磁器を採取した。K－19には昭和初期まで古墳（鬼塚古墳）が存在したが、現在は開墾され果樹園になっている。地元の人の話によると、石室の中に4～5人が入れることができたという。周辺には他に古墳は見られない。

L－19区～S－24区（Fig.17）

島の中央東側の斜面にあたる。地形は南東に傾斜していく。ほとんどが山林である。頂上部には果樹園、畑がある。L－19、M－19では先述の古土手が見られる。全長約350mが残存する。L－20、L－21区では黒曜石剝片を採取した。頂上付近は比較的平坦な地形を呈している。この地点は古代～中世はほとんど空白地だったのか、当該期の遺物は採取できなかった。しかし、縄文時代以前の遺構の存在は考えられる。

斜面のN－23区では山中に宝篋印塔が残っている。Q－24区では工事中に弥生時代前期の弥生土器等が出土している。

D－25区～K－30区（Fig.18）

島の中央南側にあたる。地形は南側に傾斜していく斜面でほとんどが山林で、果樹園、畑が僅かに見られる。また、溜池が幾つか見られる。H－26区には古墳が2基残っている。G－26区では黒曜石剝片を採取した。この地点は平坦面が少なく、生活遺構の存在の可能性は少ない。ただ、H－25、26ではこれまでに鉄滓が採取されており、また、「多々羅」という字名もあることから製鉄関連の遺構は存在は考えなければならない。

Fig.10　能古島南部（南から）

L－25区～S－30区（Fig.19）

島の南東の海岸部にあたる。地形は南向きの緩斜面である。斜面には果樹園、畑の他、住宅、学校などが見られる。R－26区～S－26区には山城がある。現在、堀が残っている。周辺では中国製白磁、青磁など中世の遺物を採取した。N－29区では箱式石棺墓が残っている。また、能古焼の窯が1基残っている。周辺で能古焼染付碗、窯道具等を採取した。L－29、L－30、M－30区では縄文時代～近世にわたる時期の遺物を採取した。この地区は海に面した丘陵先端で、当該期の生活遺構の存在の可能性は高い。

D－31区～K－36区（Fig.20）

島の南西の海岸部にあたる。地形は南向きの緩斜面である。斜面には果樹園、畑の他、住宅が多く見られる。海岸部の住宅は近世期の海岸線に沿って建てられている。I－31区～K－36区では縄文時代～近世にわたる時期の遺物を採取した。この地区は海に面した丘陵先端で、当該期の生活遺構の存在の可能性は高い。F－34、F－35区では海岸に面した低地で弥生土器、黒曜石等を採取した。

L－31区～O－36区（Fig.21）

島の南側の海岸部にあたる。地形は海岸に面した低地である。ここには住宅が多く見られる。丘陵の先端のL－31、L－32、M－31では縄文時代～近世にわたる時期の遺物を採取した。この地区は海に面した丘陵先端で、当該期の生活遺構の存在の可能性は高い。

3．小結

分布調査の成果を総括すると、以下のようになる。

・島の北半部では頂上部分で縄文時代～古代の遺物が採取できた。遺物は万遍なく採取できるわけではなく、遺物が採取できる場所は点在している。北端の也良岬周辺はその場所が比較的見られる。中世以降の遺物はほとんど採取できなかった。頂上部には縄文時代～古代を中心とした遺跡が予想される。

・島の中央から南側にかけては遺物の採取は少ない。生活関連遺構の存在の可能性は少ない。しかし、古墳や製鉄関連遺構等は考慮に入れる必要がある。

・島の南部の海岸に面した丘陵先端は縄文時代～近世の遺物が多く採取できた。この場所は現在でも集落の中心があり、生活には適していたと考えられる。丘陵先端を中心に当該期の生活遺構、墓、生産遺構の存在が予想される。

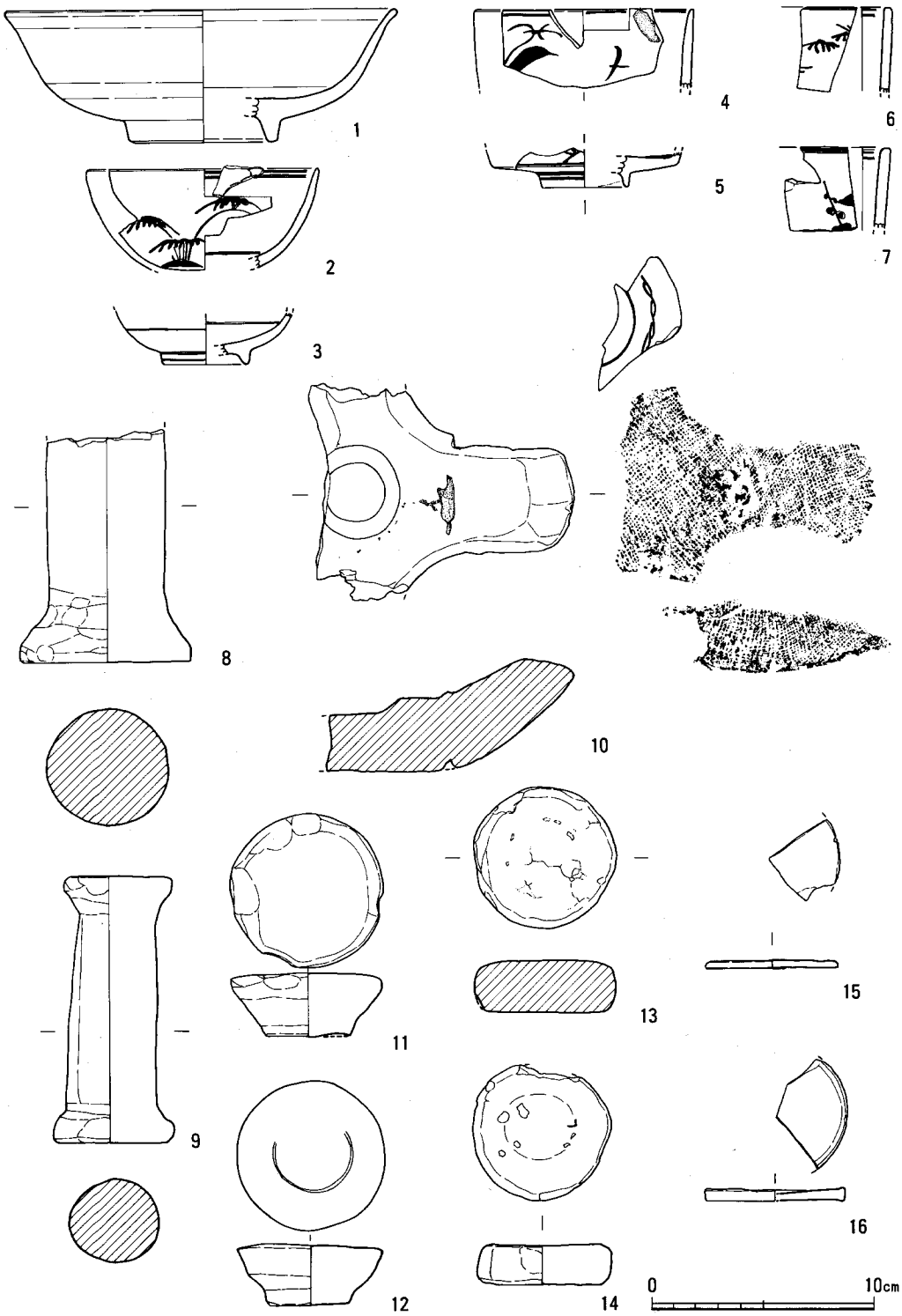
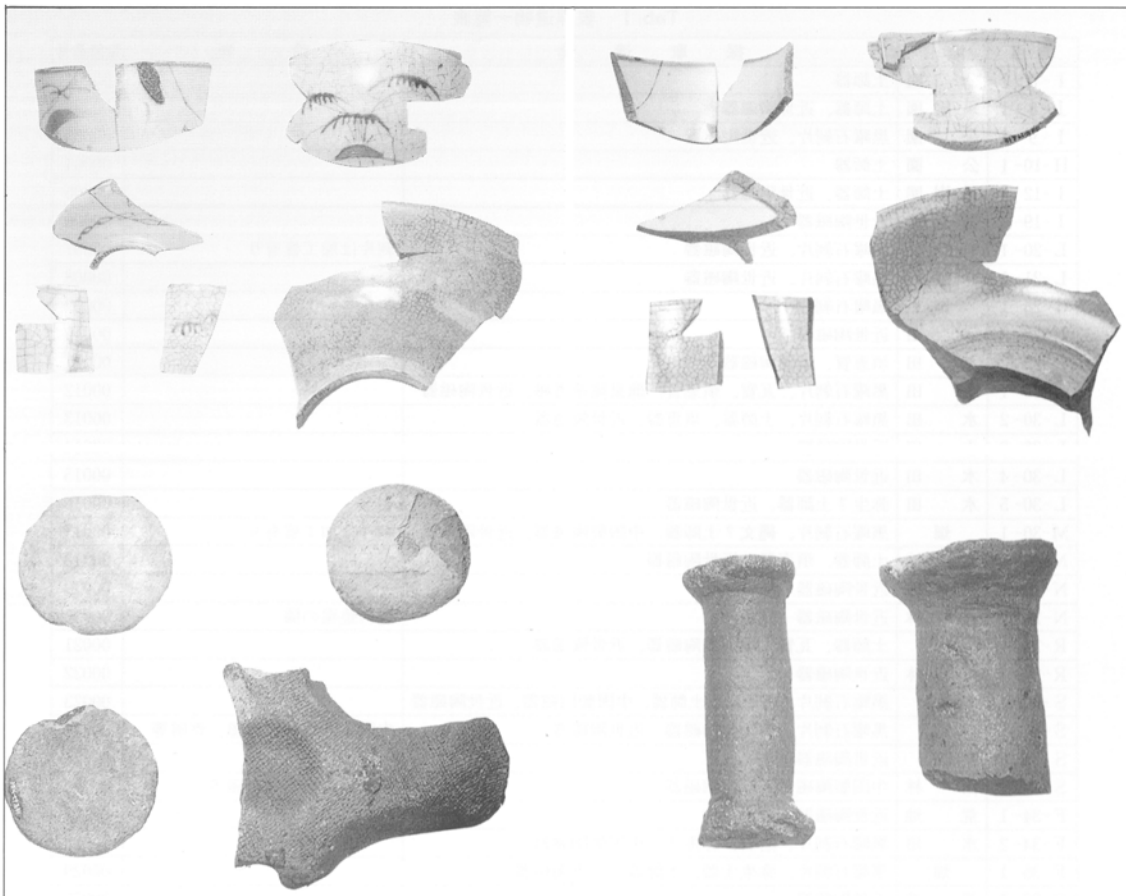


Fig.11　能古焼窯周辺表採遺物実測図（1/3）



表採資料には有田焼系の染付小碗（2、3）、湯呑碗（4～7）、青磁皿（1）、高取焼系の碗等がある。これらの遺物はいずれも溶着が見られる。染付は胎土は白色を呈する。小碗には貫入がある。湯呑碗と小碗の文様に類似が見られる。このほか、窯道具も採集した。窯道具にはトチン（8、9）、タコハマ（10）、逆台形サヤ（11、12）、サヤ（13、14）、ハマ（15、16）がある。

石斧は調査中に永福寺住職　宇賀紀雄氏に寄贈いただいたものである。玄武岩製の石斧で、刃部は欠損している。島の南部の江の口で採集したそうである。

Fig.12　能古焼窯周辺表採遺物及び寄贈資料

Tab. 1　表採遺物一覧表

地点	地目	採取遺物	備考	登録番号
I-8-1	公園	土師器		00001
J-8-1	果樹園	土師器、近世陶磁器		00002
I-9-1	公園	黒曜石剥片、近世陶磁器		00003
H-10-1	公園	土師器		00004
I-12-1	果樹園	土師器、近世陶磁器		00005
I-19-1	果樹園	近世陶磁器		00006
L-20-1	畑	黒曜石剥片、近世陶磁器	剥片は加工痕有り	00007
L-21-1	畑	黒曜石剥片、近世陶磁器		00008
G-26-1	畑	黒曜石剥片		00009
L-29-2	水田	近世陶磁器		00010
L-29-2	水田	須恵質、近世陶磁器		00011
L-30-1	水田	黒曜石剥片、瓦質、須恵質、龍泉窯系青磁、近世陶磁器		00012
L-30-2	水田	黒曜石剥片、土師器、須恵器、近世陶磁器		00013
L-30-3	水田	近世陶磁器		00014
L-30-4	水田	近世陶磁器		00015
L-30-5	水田	弥生？土師器、近世陶磁器		00016
M-30-1	畑	黒曜石剥片、縄文？土師器、中国製陶磁器、近世陶磁器	剥片は加工痕有り	00017
N-28-1	山林	土師器、須恵器、近世陶磁器		00018
N-29-1	荒地	近世陶磁器		00019
N-29-2	山林	近世陶磁器（能古焼）	能古焼窯の隣	00020
R-26-1	畑	土師器、瓦質、中国製陶磁器、近世陶磁器		00021
R-26-2	山林	近世陶磁器		00022
S-26-1	畑	黒曜石剥片、須恵器、土師器、中国製陶磁器、近世陶磁器		00023
S-26-1	畑	黒曜石剥片、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は白磁、青磁等	00024
S-26-2	畑	近世陶磁器		00025
S-26-3	山林	中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は青磁等	00026
F-34-1	荒地	近世陶磁器、銅製指輪		00027
F-34-2	水田	黒曜石剥片、磨石、弥生？、中国製陶磁器		00028
F-35-1	畑	黒曜石剥片、弥生土器、土師器、近世陶磁器		00029
G-33-1	荒地	近世陶磁器		00030
G-34-1	水田	近世陶磁器		00031
H-31-1	荒地	土師器、近世陶磁器		00032
H-32-1	水田	近世陶磁器		00033
I-31-1	水田	須恵質すり鉢		00034
I-32-1	畑	土師器、須恵器、同安窯系青磁、近世陶磁器		00035
J-32-1	畑	黒曜石剥片、土師器、瓦器、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は龍泉窯系青磁等	00036
J-32-2	畑	黒曜石剥片、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は白磁、青磁等	00037
J-32-3	畑	黒曜石剥片、土師器、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は白磁、青磁等	00038
J-32-4	畑	黒曜石剥片、須恵器、土師器、近世陶磁器		00039
J-32-5	畑	土師器、近世陶磁器		00040
J-32-6	畑	近世陶磁器		00041
K-31-1	畑	中国製陶磁器		00042
K-32-1	畑	黒曜石剥片、土師器、中国製陶磁器、近世陶磁器		00043
K-32-2	畑	弥生、土師器、近世陶磁器		00044
L-31-1	畑	黒曜石剥片、土師器、瓦器、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は龍泉窯系青磁等	00045
L-31-2	畑	黒曜石剥片、土師器、瓦器、中国製陶磁器、近世陶磁器	中国製陶磁器は龍泉窯系青磁等	00046
L-32-1	畑	黒曜石剥片、縄文？弥生、土師器、中国製陶磁器、近世	中国製陶磁器は龍泉窯系青磁等	00047
M-31-1	畑	黒曜石剥片、土師器、須恵、中国製白磁、瓦器、近世陶磁器	出土量は多い	00048
M-31-2	畑	黒曜石剥片、縄文、弥生、土師器、近世陶磁器、土錘	縄文、弥生土器は細片	00049

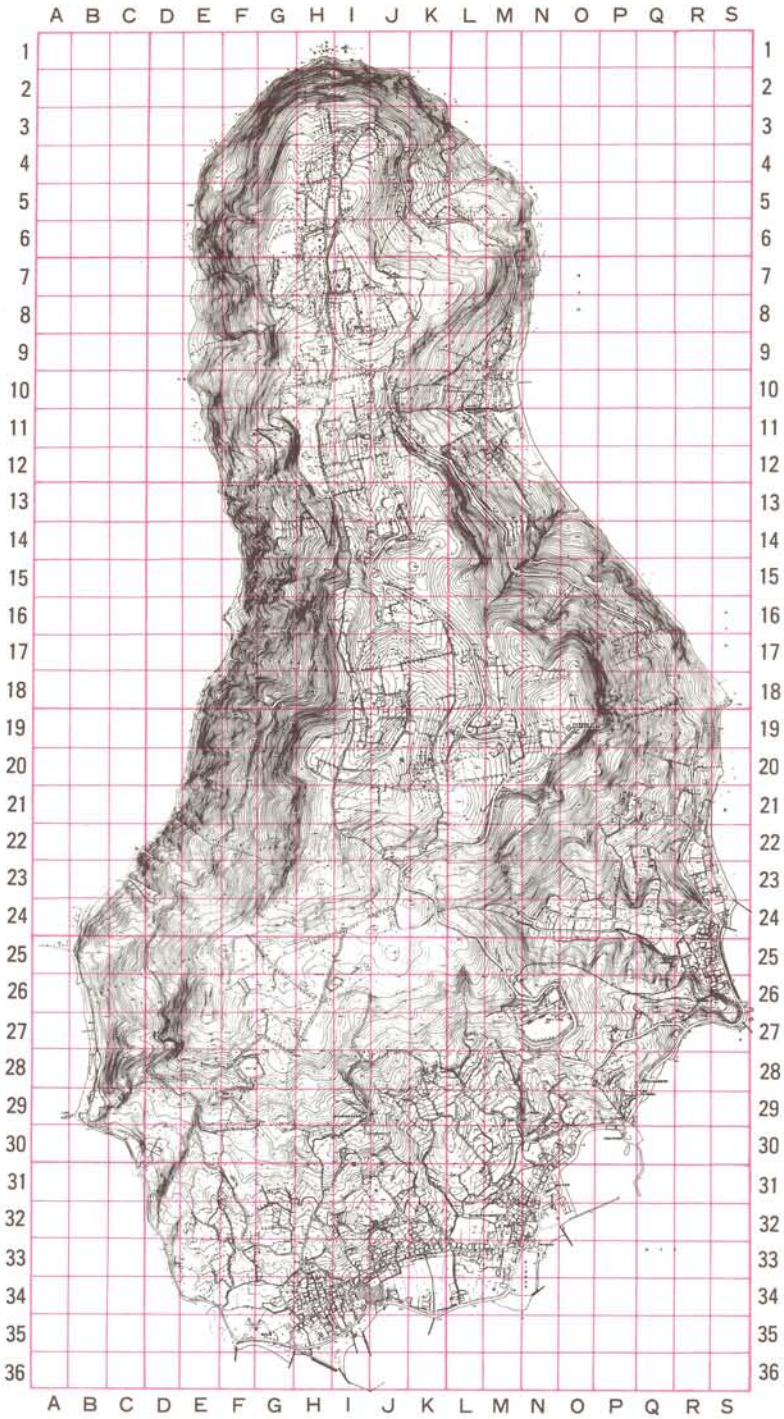


Fig.13　能古島遺跡調査区割図（1/20000）

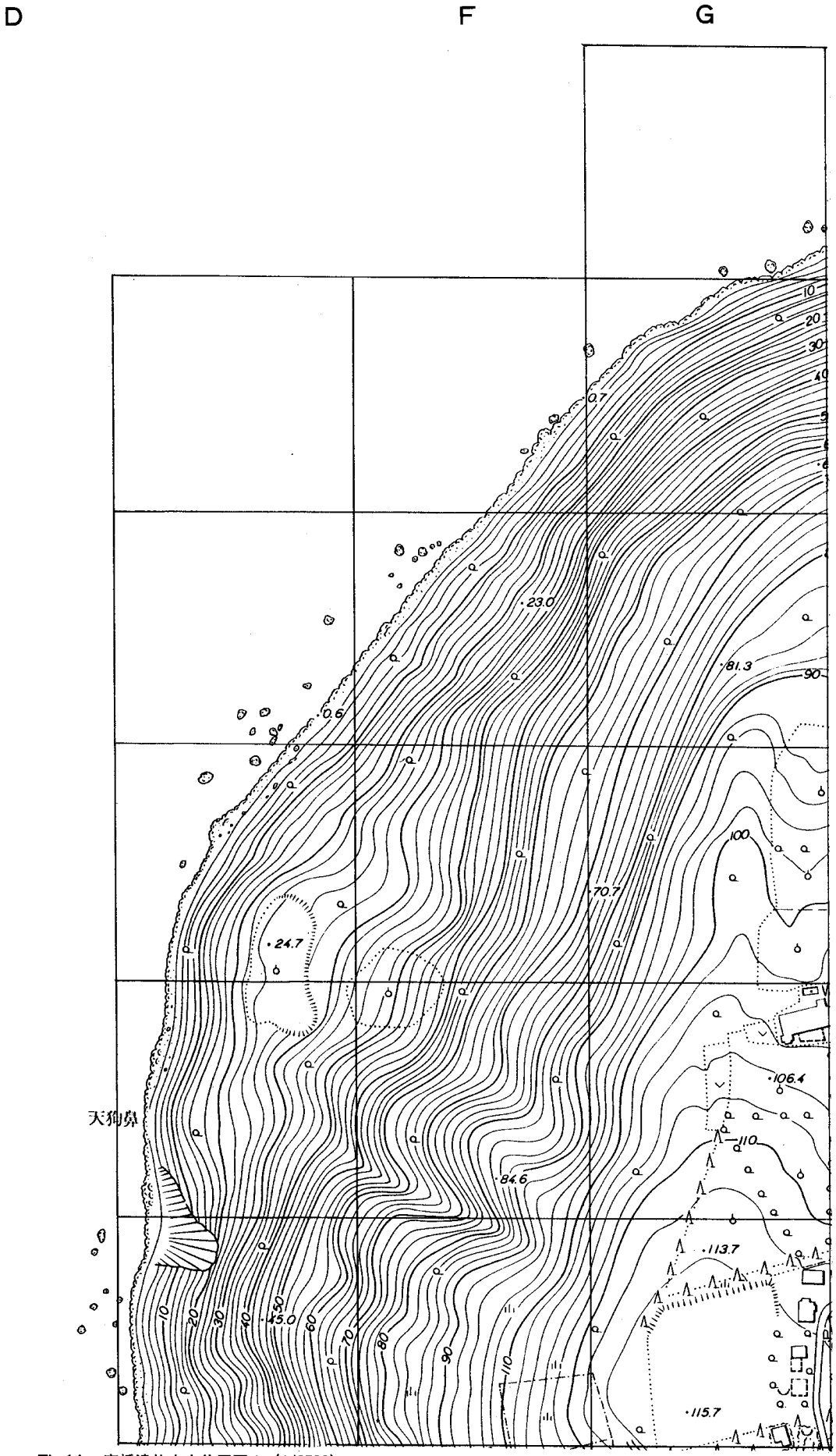
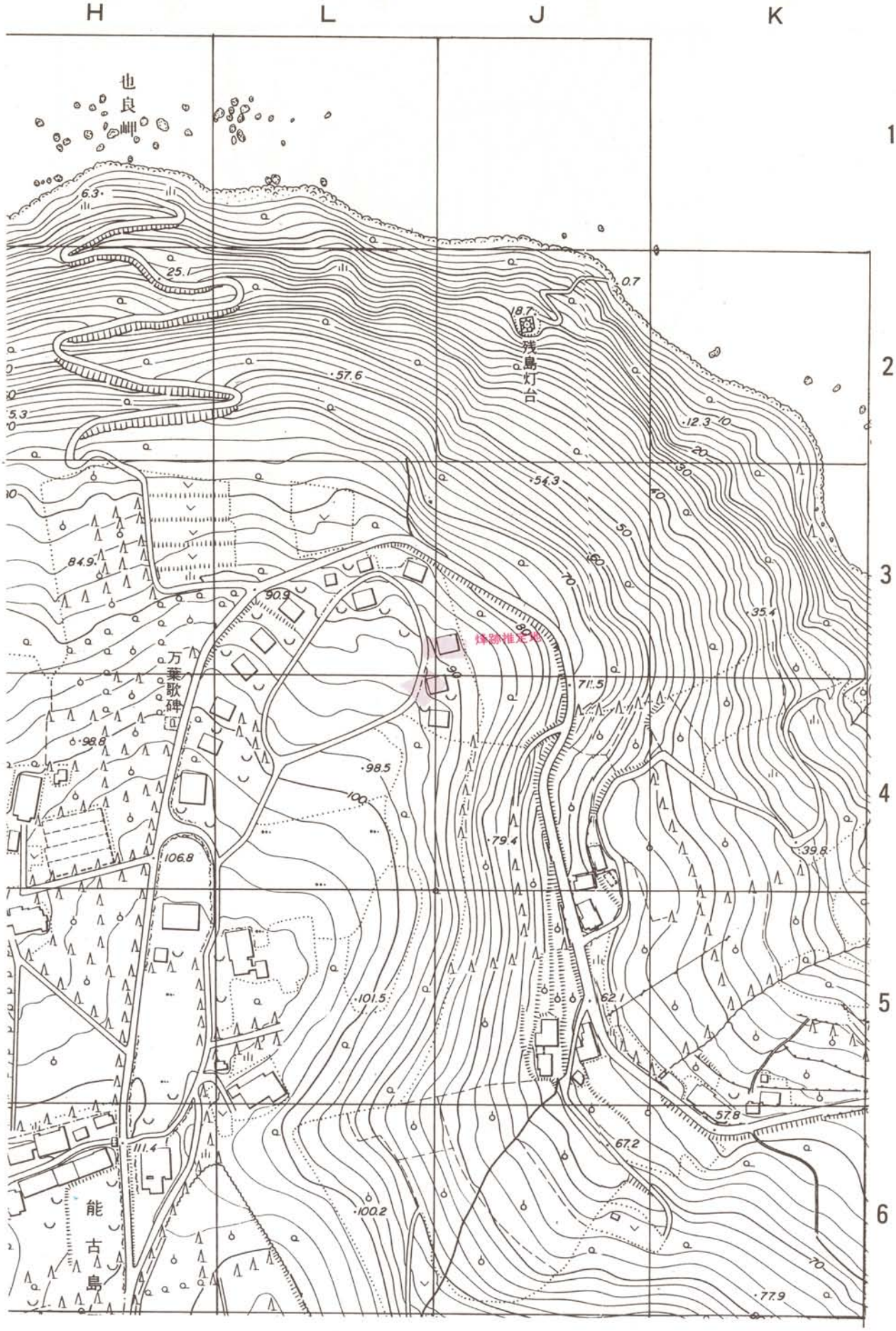


Fig.14　表採遺物出土位置図１（1/2500）


H
L
J
K
1
2
3
4
5
6
也良岬
残島灯台
万葉歌碑
烽跡推定地
能古島
6.3
25.1
0.7
18.7
57.6
12.3
54.3
84.9
90.9
35.4
71.5
98.8
98.5
79.4
39.8
106.8
101.5
62.1
57.8
111.4
67.2
100.2
77.9

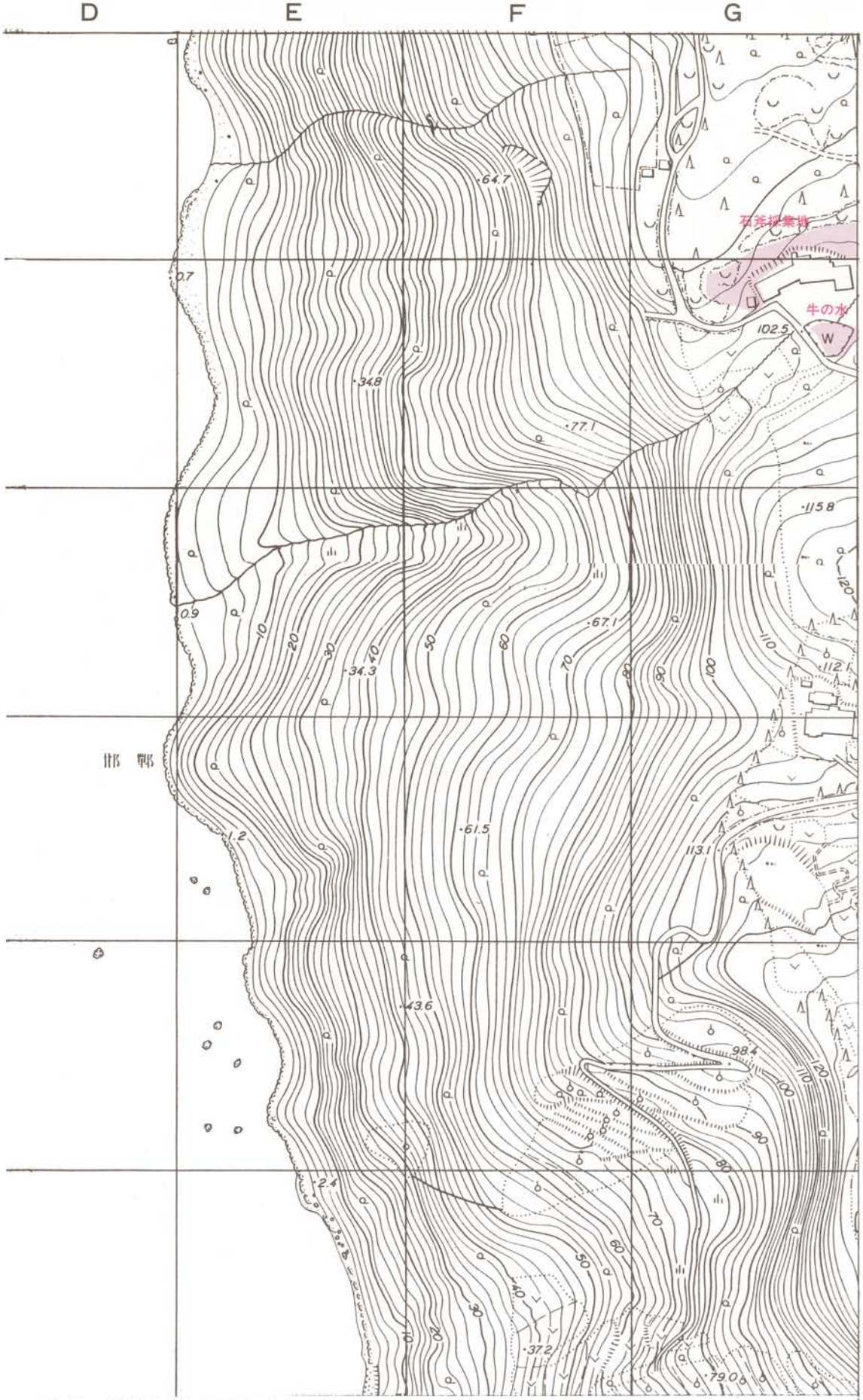
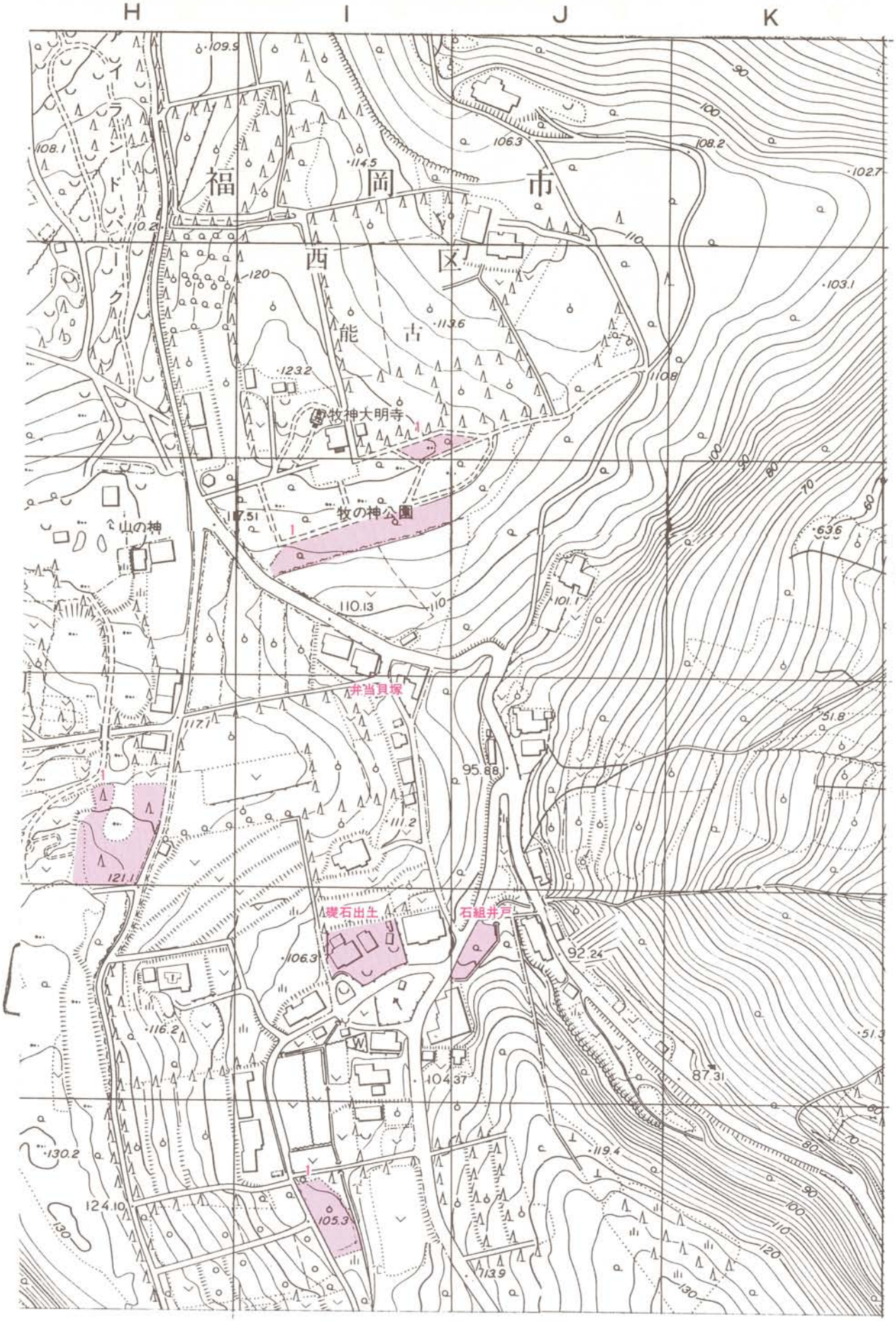


Fig.15　表採遺物出土位置図２（1/2500）


H
I
J
K
7
8
9
10
11
12
福岡市
西区
古能
牧神大明寺
牧の神公園
山の神
弁当貝塚
石組井戸
109.9
108.1
114.5
106.3
108.2
102.7
103.1
113.6
123.2
110.8
117.51
110.13
101.1
63.6
51.8
117.7
95.88
111.2
121.1
106.3
92.24
116.2
104.37
87.3
130.2
124.10
105.3
119.4
113.9

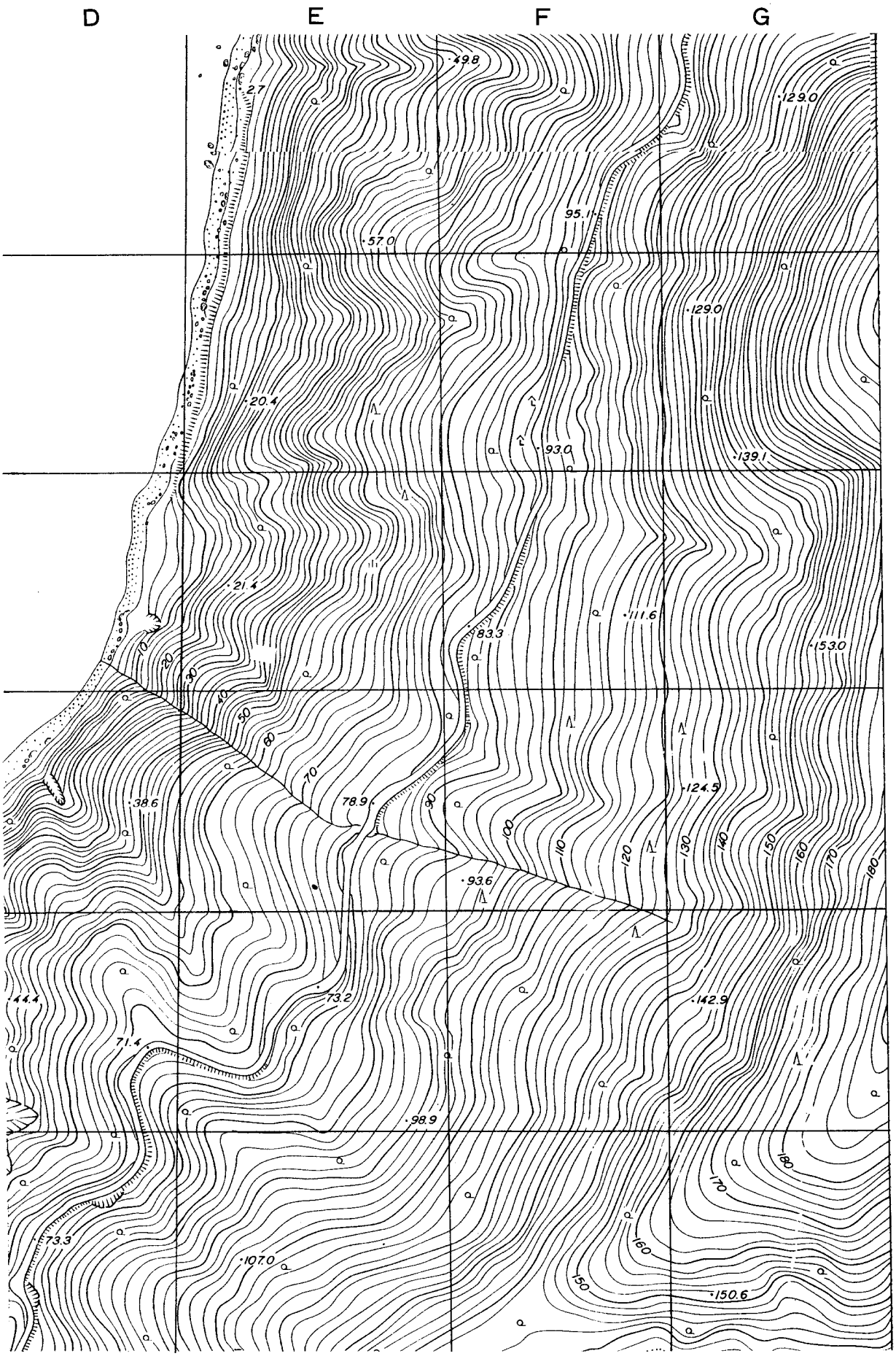
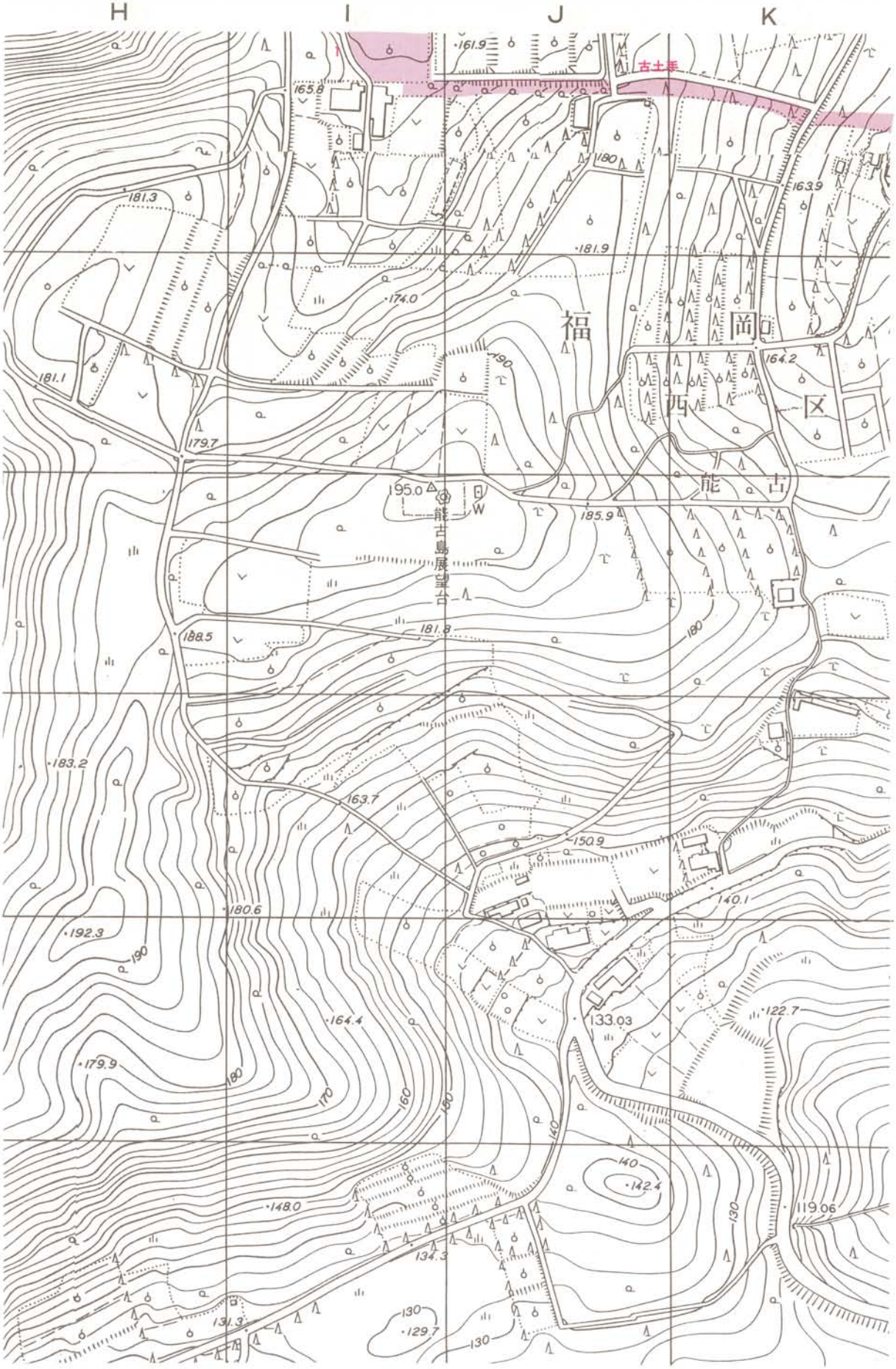


Fig.16　表採遺物出土位置図３（1/2500）


H
I
J
K
19
20
21
22
23
24
古土手
福
尚
西
区
能
古
能古島展望台
W
161.9
165.8
180
163.9
181.3
181.9
174.0
190
164.2
181.1
179.7
195.0
185.9
181.8
188.5
183.2
163.7
150.9
140.1
180.6
192.3
190
164.4
133.03
122.7
179.9
180
170
160
140
142.4
148.0
134.3
130
119.06
131.3
129.7

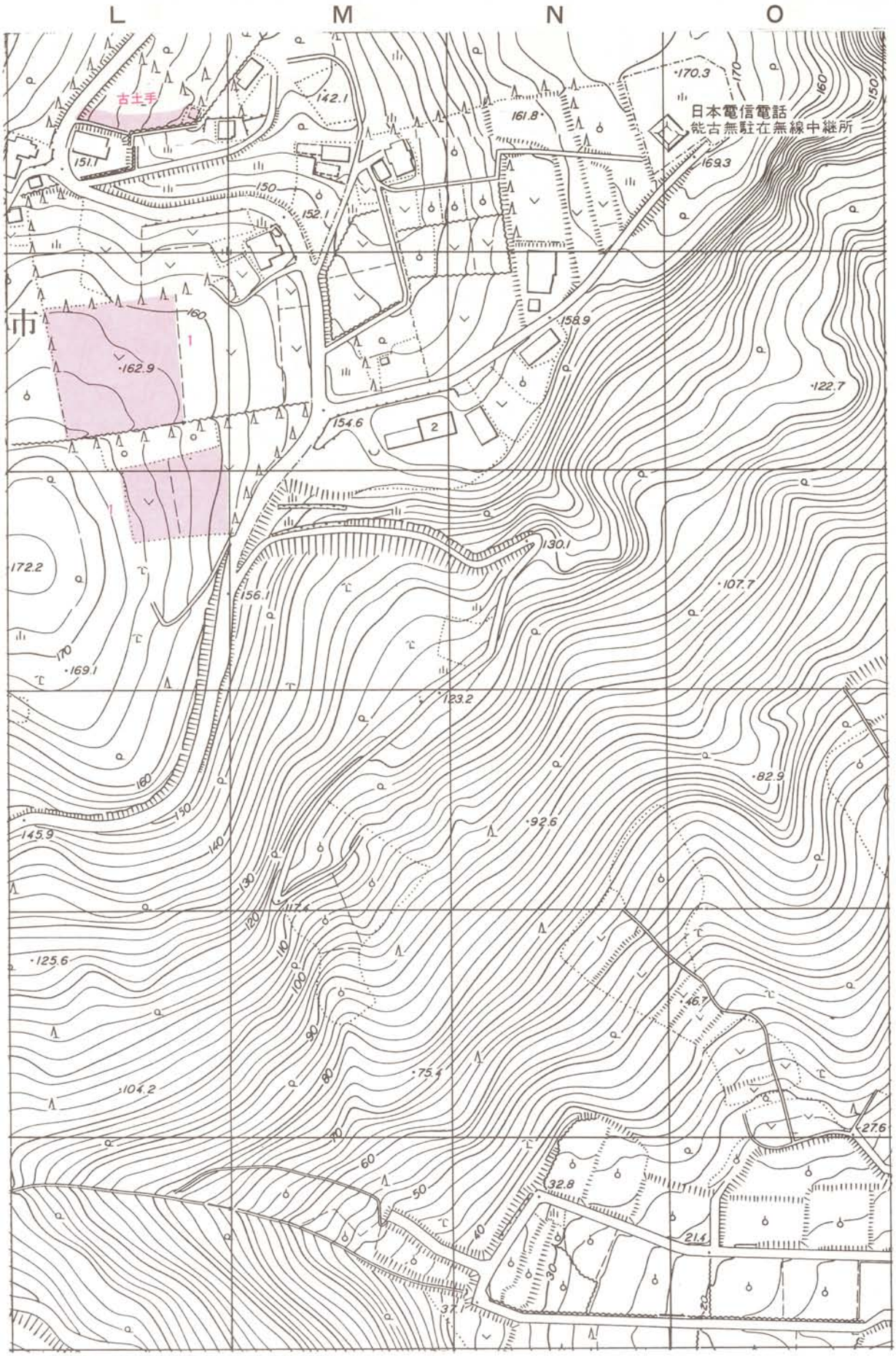


Fig.17　表採遺物出土位置図 4 (1/2500)

P
Q
R
S
19
20
21
22
23
24
31.20
0.9
55.4
127.3
83.5
56.3
25.38
86.6
19.89
33.6
63.1
2.7
39.5
69.3
13.47
2.2
40.8
15.4
2
2.2
50.8
2.5
5.00
35.1
10.6
弥生土器出土地
12.7
7.7
3.5
2.70

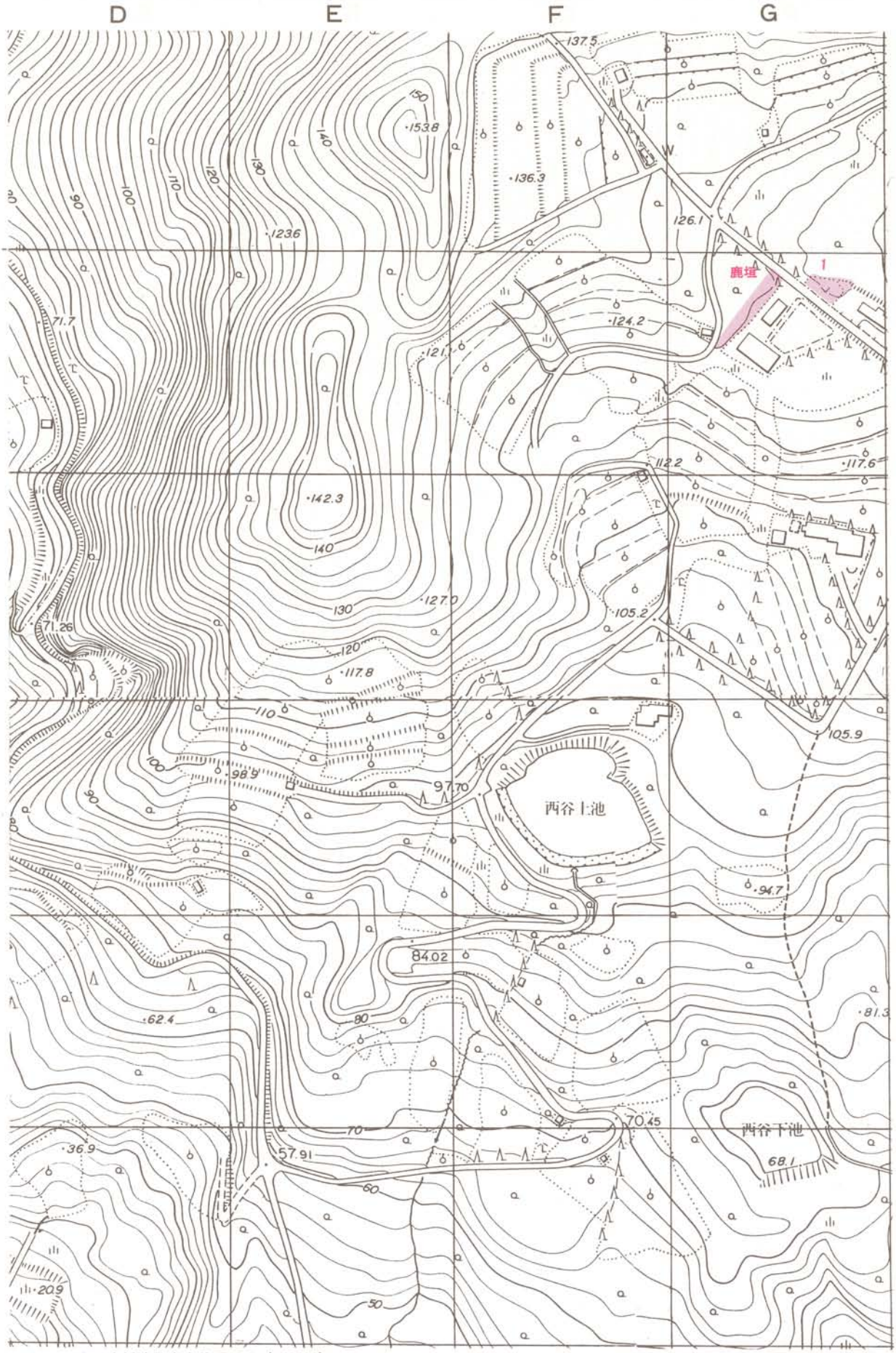
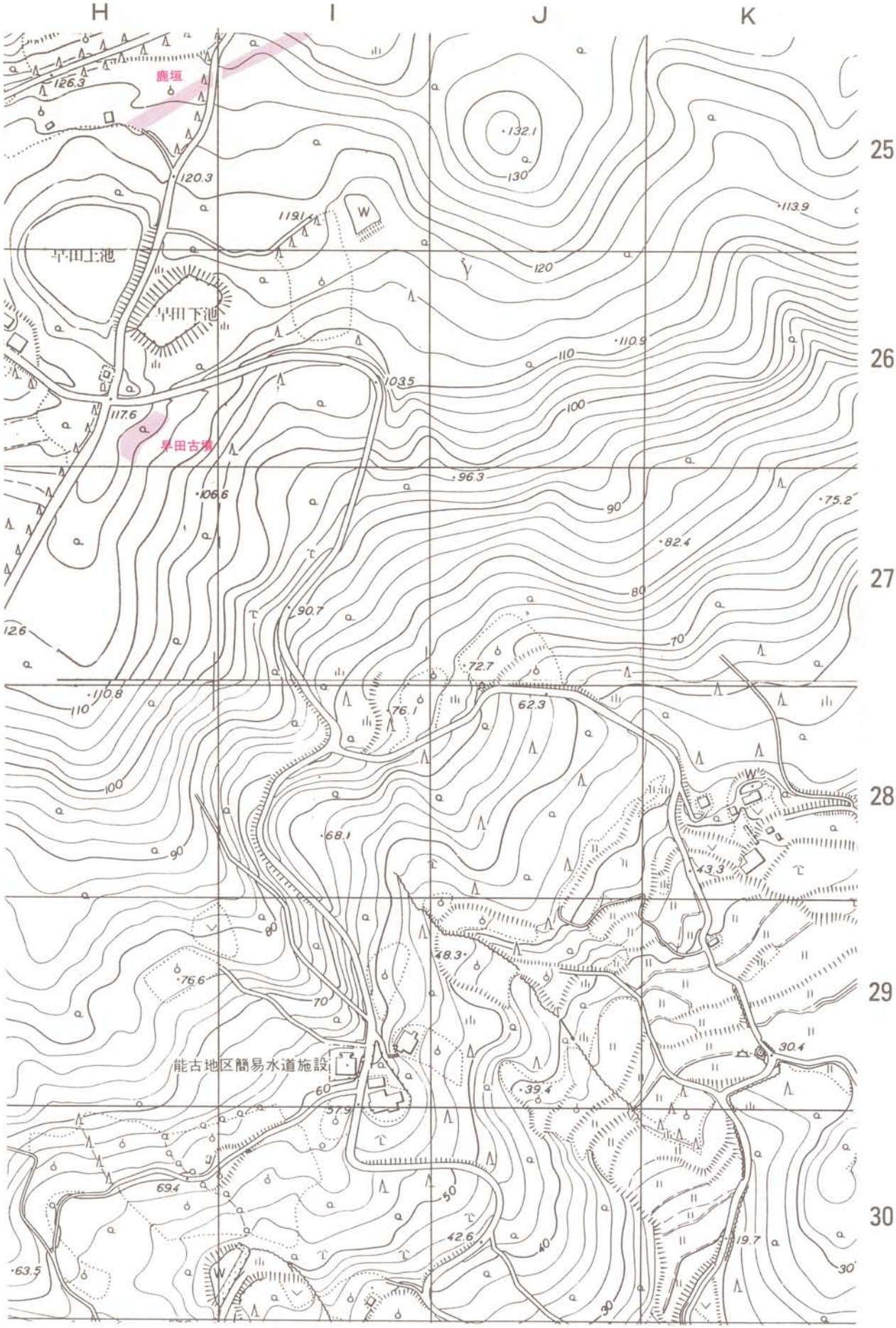


Fig.18　表採遺物出土位置図５（1/2500）


H
I
J
K
25
26
27
28
29
30
鹿垣
早田上池
早田下池
早田古墳
能古地区簡易水道施設
126.3
120.3
119.1
132.1
130
120
113.9
110.9
110
103.5
100
117.6
96.3
90
106.6
75.2
82.4
80
90.7
70
72.7
62.3
76.1
110.8
110
100
90
68.1
43.3
80
48.3
76.6
70
30.4
60
39.4
57.9
69.4
50
42.6
40
19.7
30
63.5
30

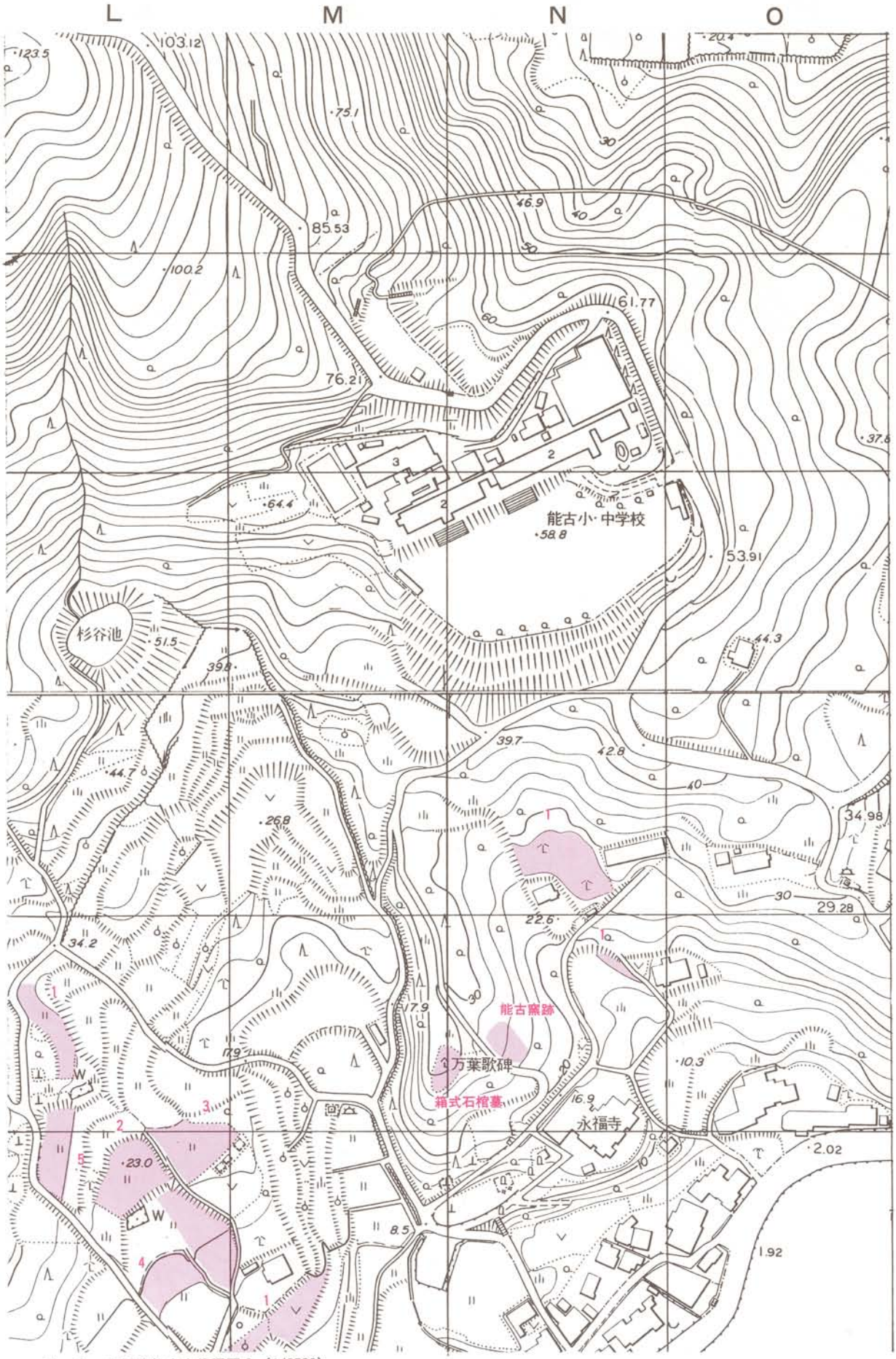
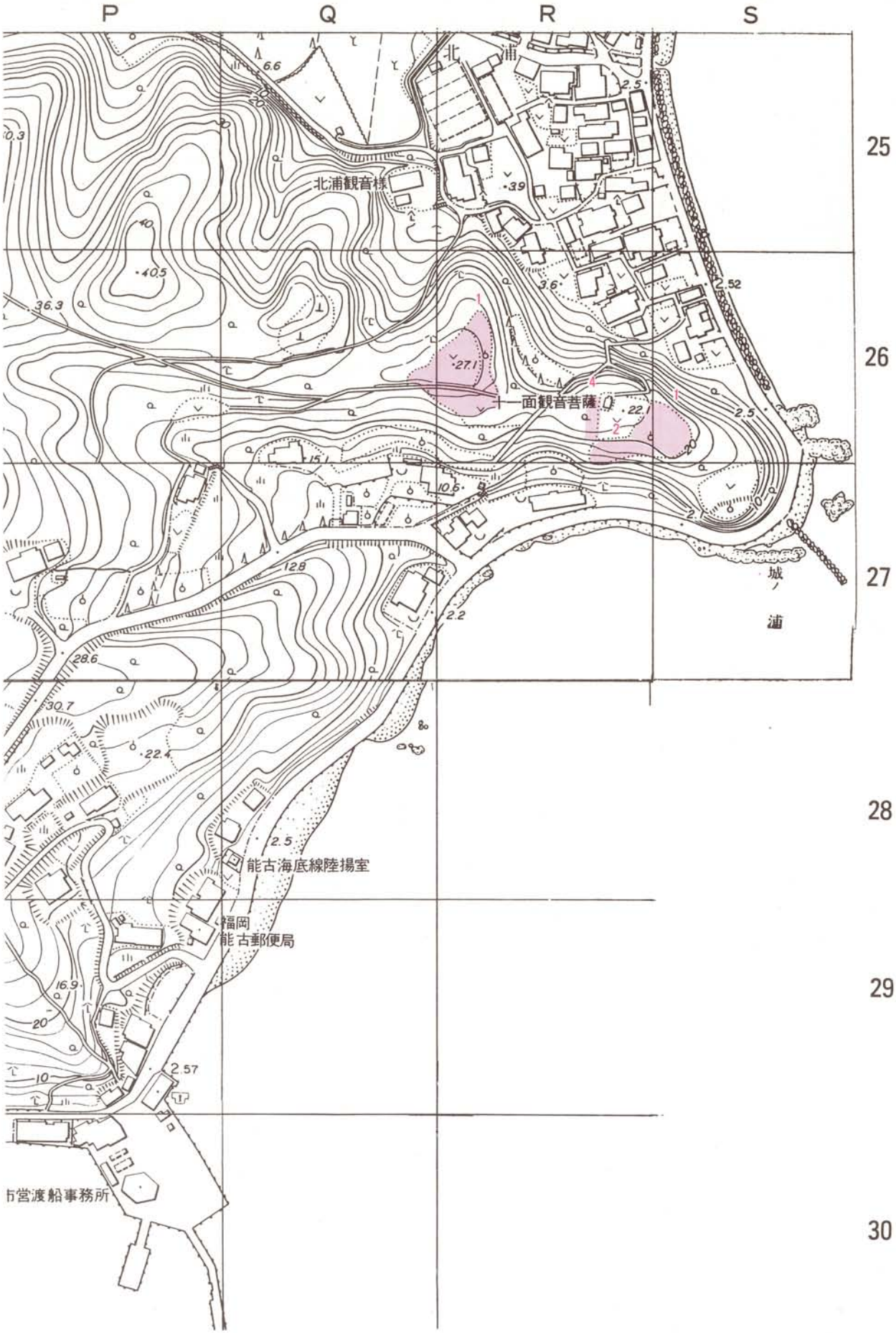


Fig.19　表採遺物出土位置図 6 (1/2500)


P
Q
R
S
25
26
27
28
29
30
北浦
北浦観音様
面観音菩薩
城ノ浦
能古海底線陸揚室
福岡
能古郵便局
市営渡船事務所

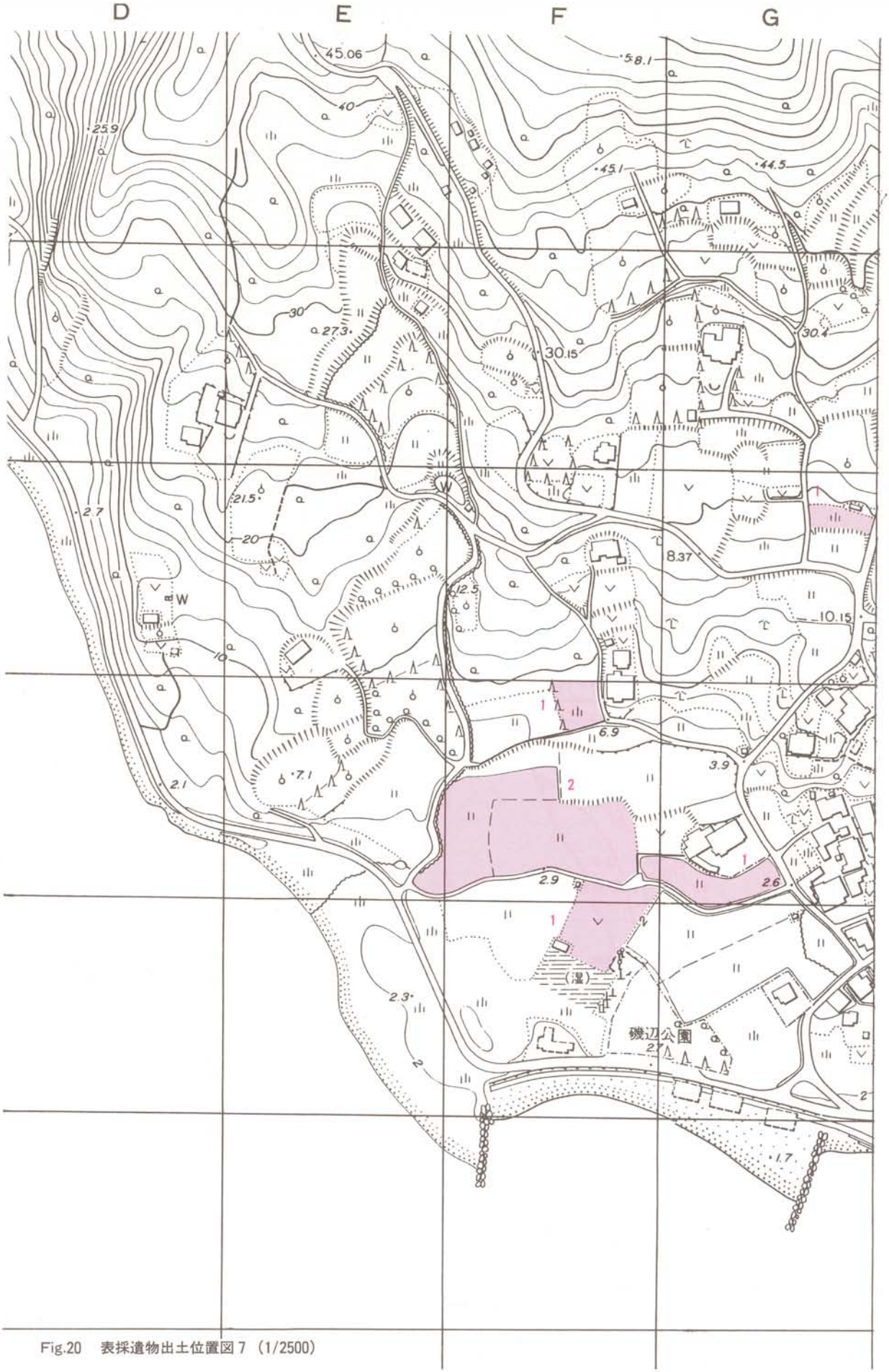


Fig.20　表採遺物出土位置図７（1/2500）

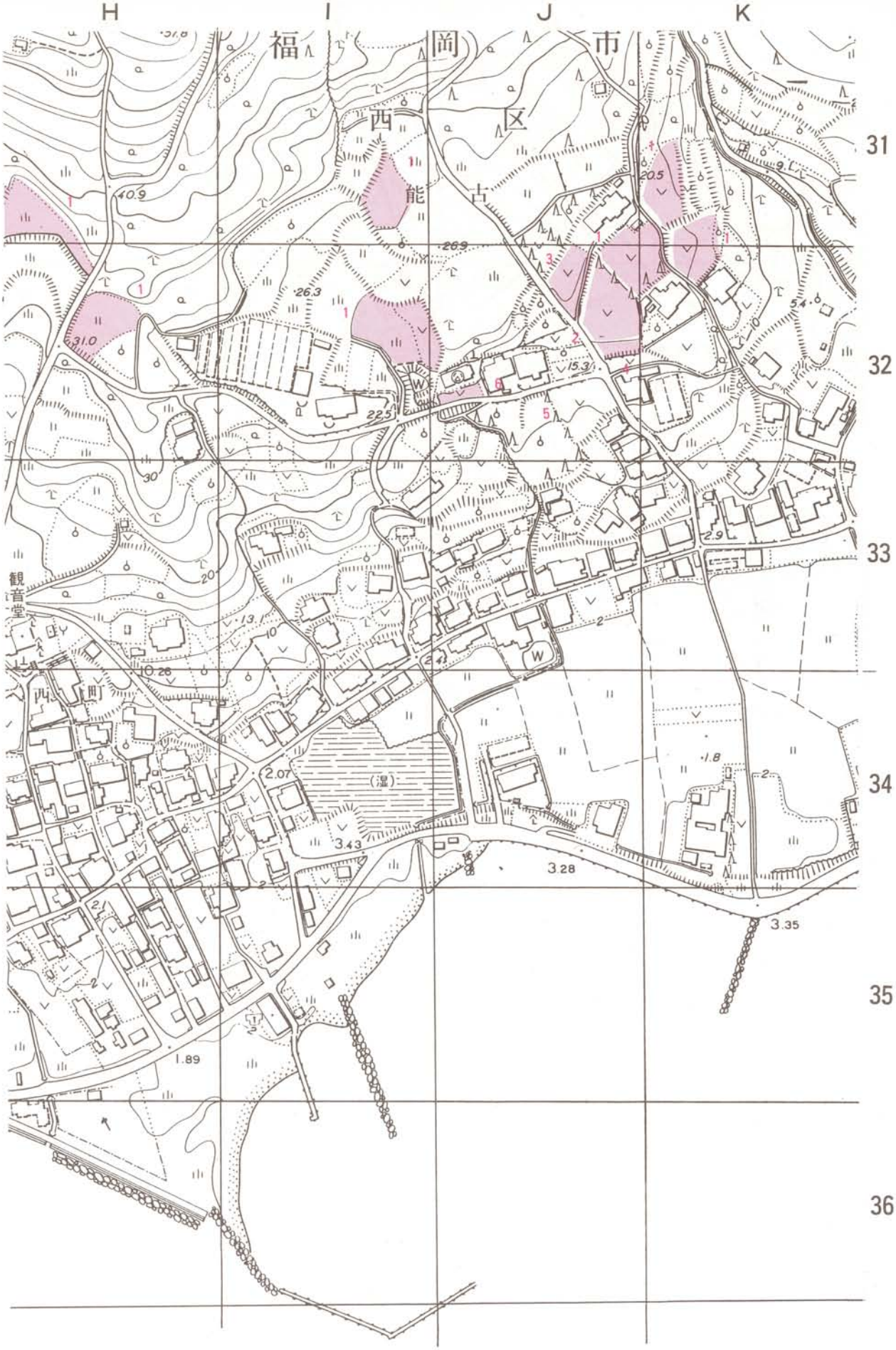

H
I
J
K
31
32
33
34
35
36
福岡市
西区
能古
観音堂
西町
(湿)
40.9
26.9
26.3
31.0
22.5
15.3
20.5
5.4
2.9
13.1
10.26
2.07
3.43
3.28
3.35
1.8
1.89

Fig.21　表採遺物出土位置図８（1/2500）

第４章　試掘調査の記録

１．調査の概要

今回、前回の分布調査、聞き取り調査を総合して、遺跡の状況が端的に表れているまたは予想される地点、遺物が集中して採取できる地点を選んで試掘調査を実施した。調査は試掘であるため、遺構を検出した場合も完掘するのを避けた。また、古墳や土塁等の遺構は状況を把握するための最小限のトレンチに留め、調査後は現状に復旧するように努めた。調査地点は福岡市道路台帳平面図に記入した。

試掘は６月11日のＩ－４区の調査を始めとして、以下の９地点について実施した。各調査地点の概要は次項から順次述べていく。

Ｉ－４区（烽跡推定地）－古代の烽跡が予想される地点
Ｇ－８区（通称牛の水）－延喜式にある筑前国の牛牧に関連が予想される池
Ｋ－19区（通称古土手）－前述の牛牧、もしくは近世の牧との関連が予想される土塁
Ｒ－26区（北浦城跡）－島の東側の海岸に面した山城
Ｎ－29区（永福寺箱式石棺墓）－島の南東部の丘陵にある箱式石棺墓
Ｌ－30区（古宮）－島の南側斜面にある分布調査で遺物が多数採取された地点の１つ、中世期の白鬚神社の故地
Ｈ－26区（早田古墳１、２号墳）－島の南西部にある古墳
Ｉ－25区（通称鹿垣）－狩猟場の鹿の被害から作物を護るために築かれた石垣、江戸時代末に黒田藩の命により造られたもの
Ｎ－23区（浦谷宝篋印塔）－島の東側の北浦の集落の背後の丘陵に残る宝篋印塔

Tab. 2　試掘調査地点一覧表

地点	地番	調査期間	遺跡の範囲
Ｉ－４	西区能古1624他	６～７月	能古Ａ遺跡群
Ｇ－８	西区能古1624他	７月	能古Ａ遺跡群
Ｋ－19	西区能古1605－７他	７～８月	古土手、大泊遺跡
Ｒ－26	西区能古410	８月	北浦城跡
Ｎ－29	西区能古506－２	７～９月	東の城遺跡群
Ｌ－30	西区能古632－１	９月	能古遺跡群
Ｈ－26	西区能古1069他	10月	早田古墳群
Ｉ－25	西区能古1081他	11月	鹿垣
Ｎ－23	西区能古浦谷	11月	浦谷宝篋印塔

Fig.22　試掘調査地点位置図（1/20000）

２．Ⅰ－４区（烽跡推定地）の調査

１）位置と現況

本調査地点は島の北側頂上部に広がる自然公園『アイランドパーク』内に位置する。調査地点は公園内北端の也良岬にあたり、標高95～100mの緩斜面である。調査地点にあたる也良岬は『万葉集・巻十六』の志賀の白水郎の歌に登場し、

沖つ鳥鴨とふ船の環り来ば也良の崎守早く告げこそ

とあるように、筑紫に配属された崎守（防人）の所在を唯一推測できる場所である。これまでの分布調査や踏査で青磁等の遺物のほか、多量の炭が出土する場所が確認されている。今回の調査は炭が多量に出土する場所が防人と共に配置された烽と関連するかを確認する目的で行った。

調査地点の現況は花畑で、春から秋にかけて菜の花、けしの花、コスモスが咲き誇り、行楽客で賑わう場所でもある。そのため、調査は初夏の花の植え替え時期に行った。

２）調査の概要

調査トレンチは多量の炭が出土したという場所を中心に、・カ所設定した。

１トレンチは調査地点東側の、多量の炭が出土したという場所である。厚さ20cmの耕作土を除去すると地山の玄武岩含みの赤褐色粘質土となる。トレンチ東側の地山直上で約２～３mの範

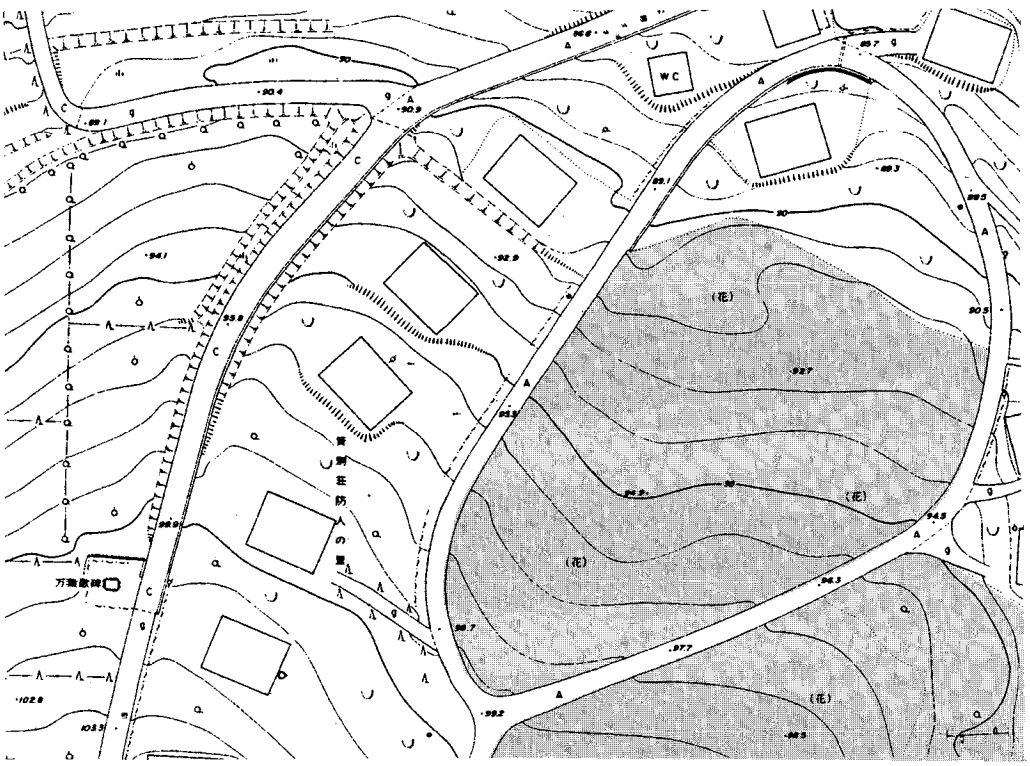


Fig.23　Ⅰ－４区調査地点位置図（1/1000）

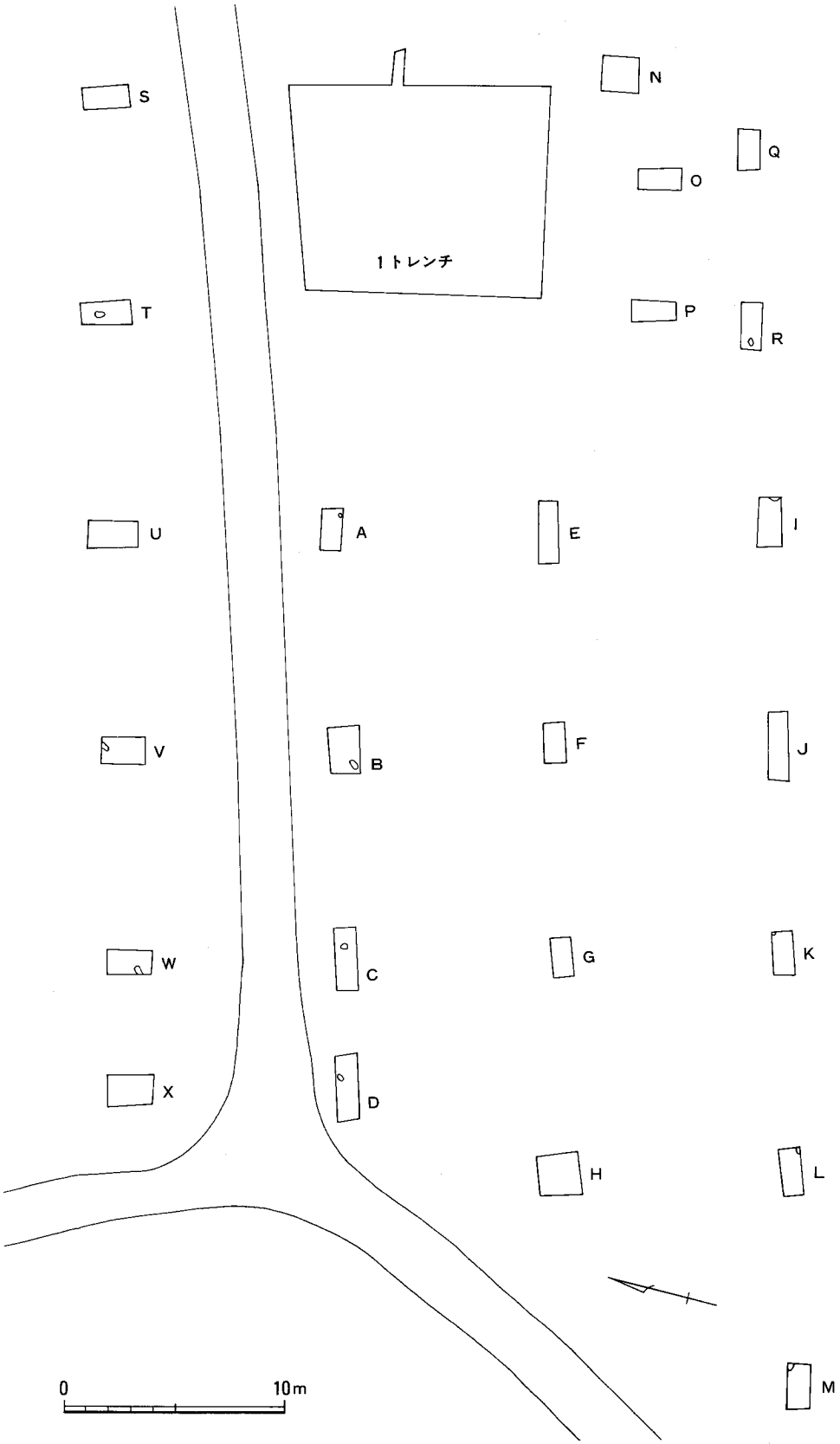


Fig.24　Ⅰ－4区調査トレンチ配置図（1/300）

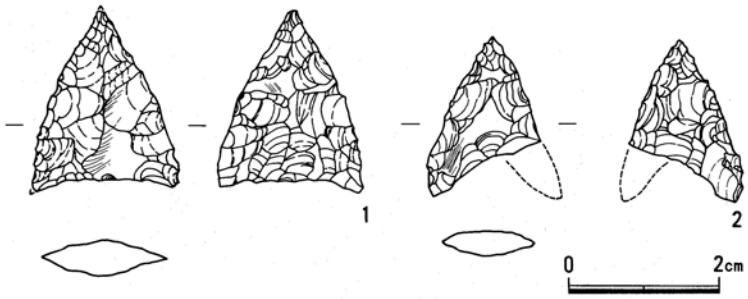


Fig.25　Ⅰ－4区出土石鏃実測図（1/1）

囲で炭、灰の堆積を検出した。この堆積は露出している玄武岩に囲まれるように厚さ5㎝程度残存する。遺物はなく、時期は不明であるが、出土状況から烽とは関連しないものと考える。このトレンチからはこの他に黒曜石製の石鏃が2点出土した。1は平基無茎式の石鏃である。平面形は二等辺三角形を呈する。長さ2.3㎝、幅2.0㎝、厚さ0.5㎝を測る。2は凹基無茎式の石鏃で、抉りは深い。脚部の一方を欠いているが、平面形は二等辺三角形を呈する。長さ2.2㎝、幅1.4㎝、厚さ0.4㎝を測る。

他のトレンチは30～60㎝程で地山の赤褐色粘質土となる。地山は開墾の際の撹乱を受けていて、遺構、遺物は検出できなかった。

3）小結

今回の調査では烽跡を確定することはできなかった。調査地点は玄界灘、博多湾が一望できる場所にあるが、気候条件や飲み水等の問題で居住には適さない。今後の調査で烽跡の検出と共に居住場所等の確認が待たれる。

Fig.26　Ⅰ－4区1トレンチ（南から）

Fig.27　也良岬から玄界島を望む（南から）

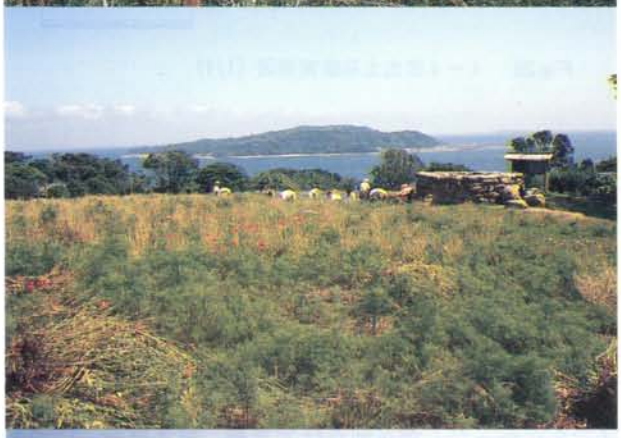


Fig.28　也良岬から志賀島を望む（南から）

Fig.29　也良岬から海の中道を望む（西から）

Fig.30　也良岬から博多を望む（西から）

3．G－8区（通称牛の水）の調査

1）位置と現況

本調査地点は島の北側頂上部に広がる自然公園『アイランドパーク』内に位置する。調査地点は「牛の水」と呼ばれる池で、公園内西側の谷部にあり、標高約102mを測る。能古島には平安時代に筑前国の牛牧が存在していたということが『延喜式巻二十八』兵部省諸国馬牛牧の項の記載から知られている。また、江戸時代にも断続的に牧場が営まれており、調査地点の「牛の水」の名称は『筑前国続風土記拾遺』にある。

又近年馬牧を起されしかど、幾程もなく其事やみぬ。其跡土手をめぐらして甚広し。東西十三町二十二間、南北十五町二十八間島の半より北なり。牧跡の内に小池三所有。牛の水という。牧牛の為に掘し池という。

池は地元の久保田耕作氏の話によると、戦前、氏が子供の頃までは水を満々と湛えていたという。その後、池の堰を切ったために、現在は水は溜まっていない。また、池の北側も埋められたとのことである。しかし、池の東側にある井戸は現在も涸れること無く使用されている。今回の調査は池の西側に残る土塁の構造と池の造られた時期の確定を目的とした。

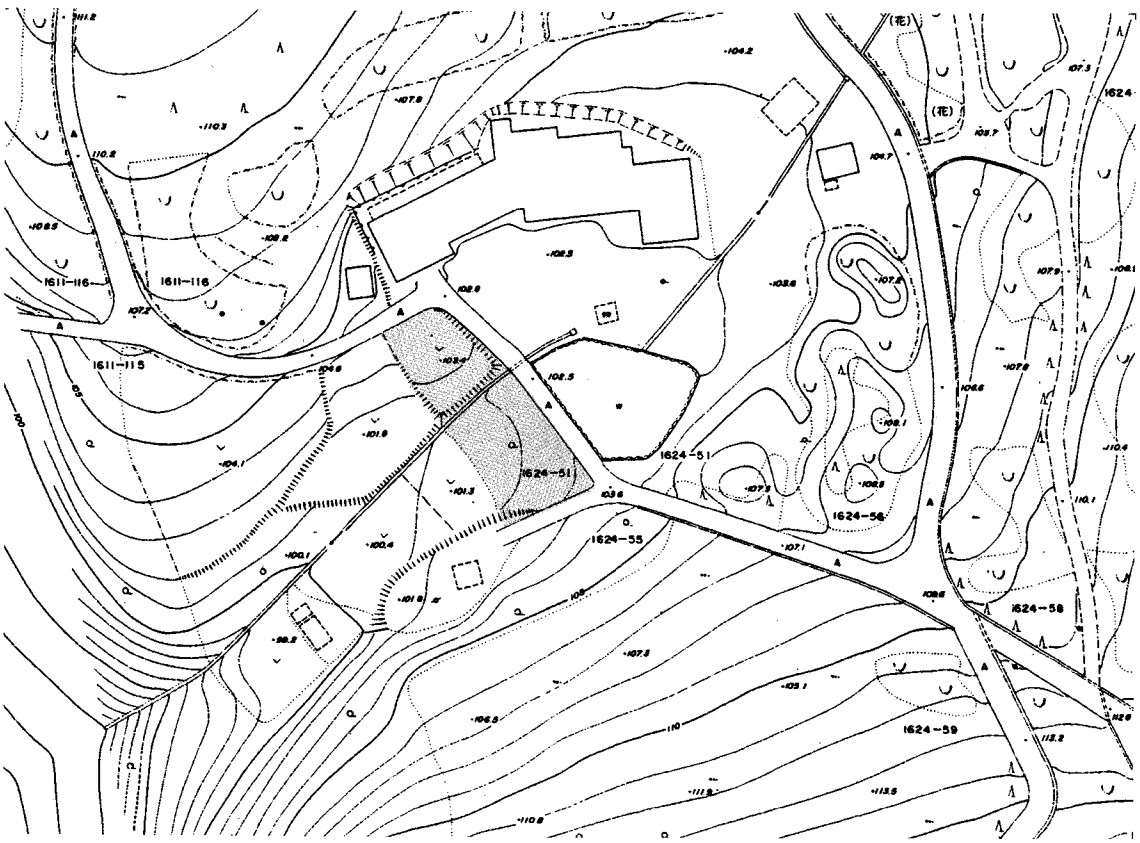


Fig.31　G－8区調査地点位置図（1/1000）

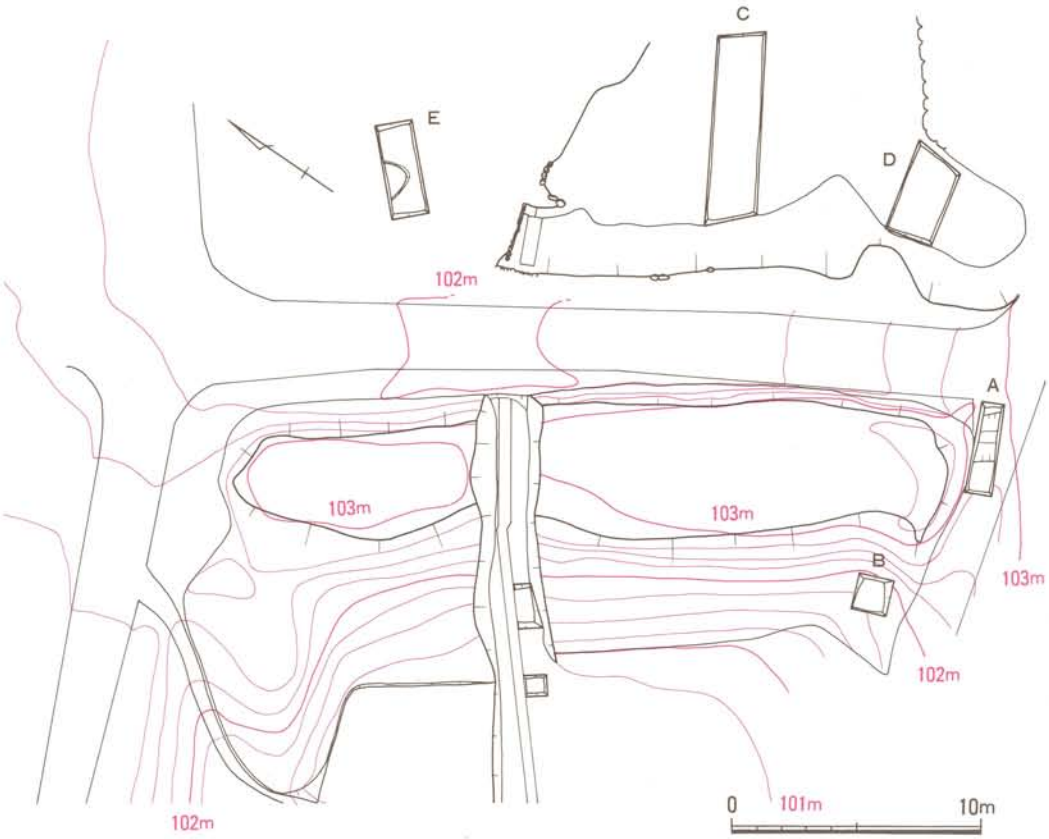


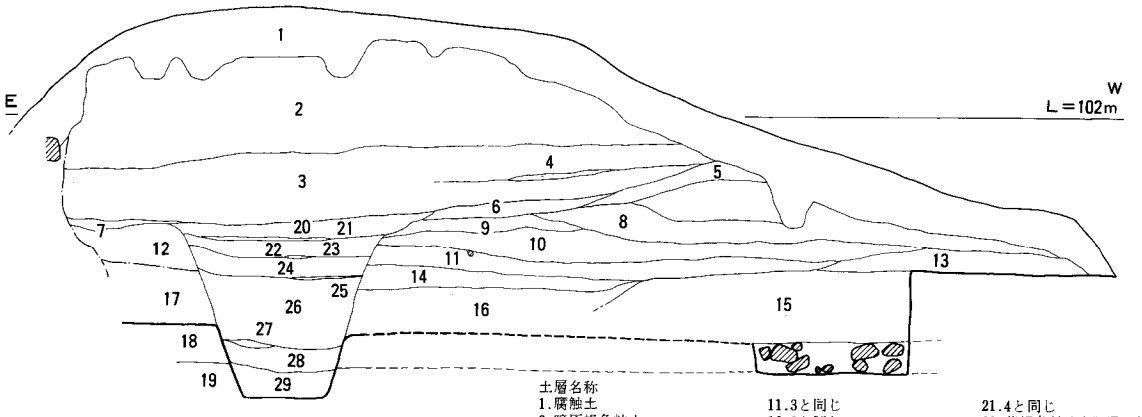
Fig.32　G－8区周辺測量図（1/300）

2）調査の概要

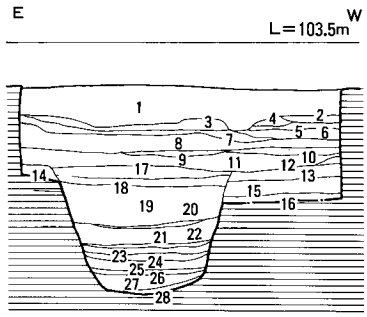
調査は土塁の構造と池の中の状況を把握するためのトレンチ設定を行った。

土塁は公園西側の狭い谷を横切るようにある。現在、土塁の南北、東側は道路によって削られて平坦になっており、道路面との比高差は0.8～1.2mを測る。西側は畑で開墾されていて、裾は明確ではない。現存長約30m、幅約10mを測る。

池の水を抜くために切られた土塁の断面観察から土塁は玄武岩まじりの黒褐色粘質土の地山から約3.4m盛られていることが分かる。盛土は暗褐色～暗灰色の粘質土が使用されるが、盛土作業が幾つかの工程に分かれる。第１工程は地山から約1.2～２m程盛られた部分（６～16層）で、若干池の内側に傾斜するように盛られている。盛土は暗褐色粘質土が主に使用される。第２工程は第１工程での盛土を逆台形に地山まで掘りこんで、黄褐色粘質土（24～29層）を版築状に入れ込む。この掘りこみは土塁のほぼ中央に位置し、掘りこみの上面幅約2.6m、下面幅約0.9m、深さ約２m、地山への掘りこみは約0.6mを測る。第３工程は第１、第２工程の盛土の上に約1.4mの高さで盛られる。盛土はほぼ水平に盛られ、あまり締まりがない。遺物は第１工程

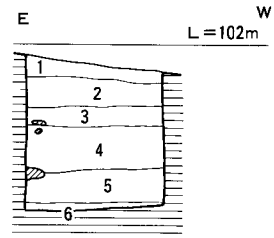


土層名称
1.腐蝕土
2.暗灰褐色粘土
3.暗褐色粘土
4.黒色粘土
5.暗黄褐色粘土
6.黄褐色粘土(礫 多量に限る)
7.6と同じ
8.暗茶褐色粘土
9.灰褐色粘土
10.2と同じ
11.3と同じ
12.3と同じ
13.やや暗い褐色粘土
14.やや暗い灰褐色粘土
15.2と同じ
16.黄褐色粘土＋暗褐色粘土
17.16と同じ
18.黒褐色粘土(礫 混る)
19.赤褐色砂礫(鉄分沈着)
20.黄褐色粘土
21.4と同じ
22.黄褐色粘土(礫 混る)
23.4と同じ
24.20と同じ
25.4と同じ
26.20と同じ
27.4と同じ
28.20と同じ
29.淡黄褐色粘土



土層名称
1.灰褐色粘土
(褐色粘土 斑に入る)
2.茶褐色粘土
(しまりがある)
3.茶褐色粘土
(灰褐色粘土 少し混る)
4.暗茶褐色粘土
5.灰褐色粘土
6.茶褐色粘土
(灰褐色粘土 ブロック状に混る)
7.茶褐色粘土
8.灰褐色粘土
(しまりがある)
9.茶褐色粘土
10.やや暗い茶褐色粘土
11.3と同じ
12.4と同じ
13.7と同じ
14.7と同じ
15.3と同じ
16.5と同じ
17.黄色粘土
18.茶褐色粘土
19.17と同じ
20.18と同じ
21.17と同じ
22.18と同じ
23.17と同じ
24.18と同じ
25.17と同じ
26.18と同じ
27.17と同じ
28.18と同じ

土層名称
1.表土
2.茶褐色粘土(岩、小礫少し混る)
3.暗褐色粘土(土師器出土)
4.茶褐色粘土(しまりがある)
5.やや暗い茶褐色粘土
6.やや赤みを帯びる茶褐色粘土
(人頭大の礫 多数)



0　4m

Fig.33　土墨土層断面図（1/80）

の盛土から須恵器片が出土した。

Aトレンチは土墨の南側の平坦面に設定したトレンチである。盛土の上面は既に削平されていたが、盛土の下部は残存していた。Aトレンチでも先述の第2工程の逆台形の掘りこみを検出した。上面幅約2.0m、下面幅約1.0m、深さ1.4m、地山への掘りこみは約60cmを測る。掘りこみの下面レベルは中央と比べると約1.2m高くなる。遺物は黒曜石剝片が出土した。

Bトレンチは土墨南側の裾に設定したトレンチである。ここでは約60cmの第1工程の盛土を検出した。地山は中央と比べると約1.0～1.2m高い。遺物は土師器片が出土した。

池の中にC、D、トレンチ、池の埋め立て部分にEトレンチを設定した。C、Dトレンチでは10～20cmの埋土を除去すると地山となる。Eトレンチでは約1.4mの客土を除去すると地山となる。遺物は黒曜石剝片が出土した。池の中はこれまで幾度か浚渫が行われており、底には重

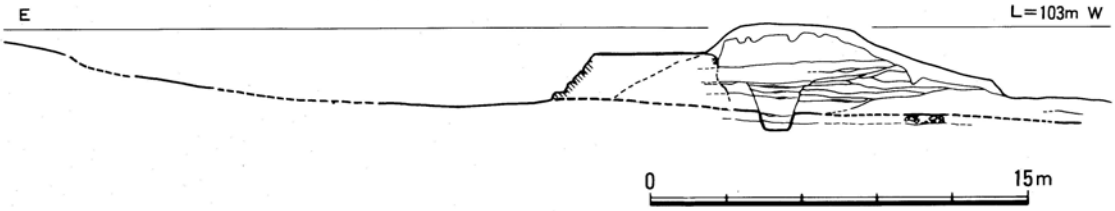


Fig.34　牛の水縦断面図（1/300）

機の削り跡が残っていた。池の浬土はその際に除去されたものと考えられる。また、ここでは土塁の内側は検出できなかった。

3）小結

今回の調査では土塁の構造を明らかにすることができた。土塁は谷を堰き止め、水を溜るために造られたもので、下面幅約16～18m、高さ約３～４m程あったものと考える。土塁の構築は３段階の工程に分けられる。第２工程で見られた基盤の盛土への掘りこみはおそらく土塁の南北にわたって行われているものと考えられる。このような作業工程の類例は知りえないが、池の水が土塁の底から抜け出て、それによって土塁が崩壊することを防ぐためではないかと考える。類例等があれば御教示願いたい。土塁の時期は今回の調査では出土遺物が少ないため、確定できないが、土塁からは中世～近世の遺物は出土しておらず、須恵器、土師器のみで古代まで溯る可能性がある。

能古島の頂上部は平坦な台地で放牧には適している。しかし、頂上部には川はなく、飲み水は湧き水に頼らざるを得ない。そのためにも溜池は必要なものと考えられる。「牛の水」が平安時代の牛牧に関連するものかは今後調査を続けなければならないが、牧の役人の居住地や繋飼場等、牧に伴う施設の確認も重要な課題と言えよう。

Fig.35　Ｇ－８区調査地点遠景（南から）

Fig.36　土塁（南から）

Fig.37　土塁断面（東から）

Fig.38　土塁土層断面（北から）

Fig.39　土塁Aトレンチ土層断面（南から）

4．K－19区（通称古土手）の調査

1）位置と現況

調査地点は島の中央頂上部に位置する。調査を行った「古土手」は島の中央頂上部の果樹園、畑の中を東西に延びる土塁で、現在、道路等で寸断されているが、全長約350m、幅約３～５m、高さ１～1.5mを測る。標高は土塁の最高部で約170mを測る。土塁は農道による削平や樹木の繁殖のため、遺存状況は悪い。この土塁は前述の『筑前国続風土記拾遺』に記されていた土手のことである。古土手の名称は後述する「鹿垣」と比較した島の人達の呼び方からきている。調査はこの土塁の構築時期と構造の把握を目的とした。

2）調査の概要

調査は遺存状況の比較的良好な部分にトレンチを設定し、土層断面の観察を行った。

Ａトレンチは調査区東側に設定したトレンチである。盛土は玄武岩まじりの黄褐色粘質土の地山に行われる。土塁の盛土には褐色系の粘質土が使用される。地山は北から南に傾斜しているが、北側には溝状の掘りこみがある。盛土は南側に傾斜するように行われている。盛土には締まりがない。断面を見ると、北側は急で、南側は緩やかな傾斜となる。したがって、盛土は北側を溝状に掘りこみ、その土を南側に積み上げていくという方法で行われる。その際、多少

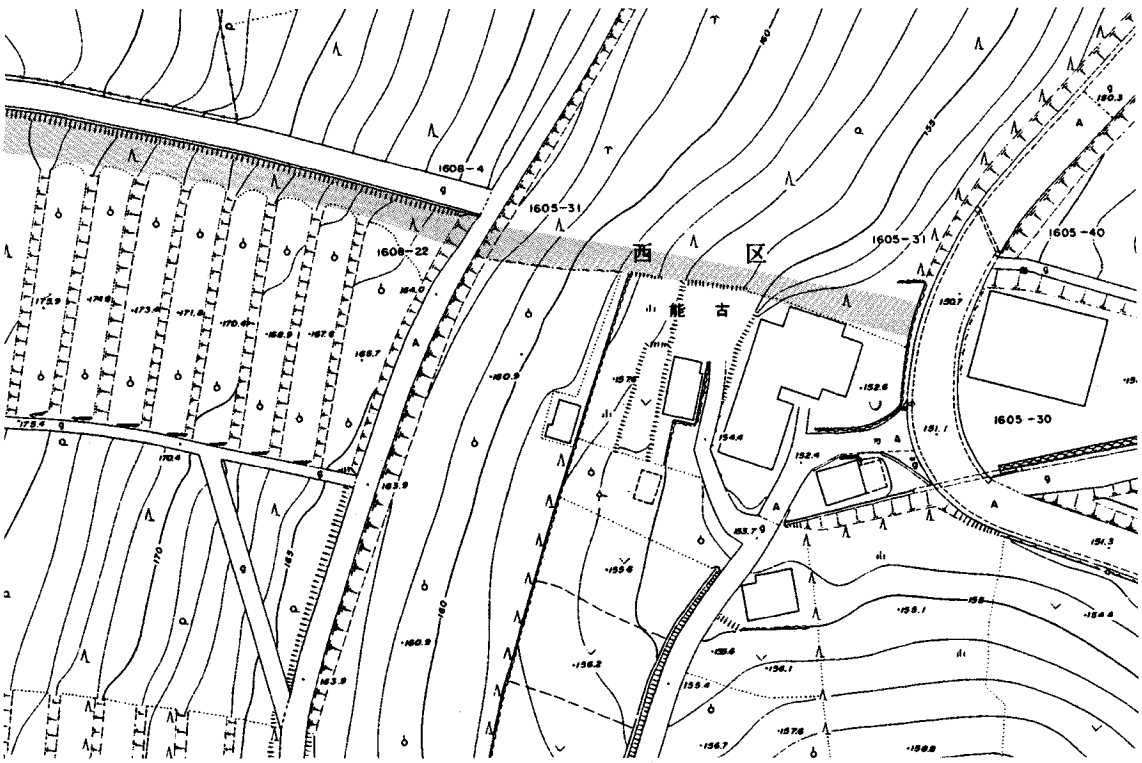


Fig.40　K－19区調査地点位置図（1/1000）

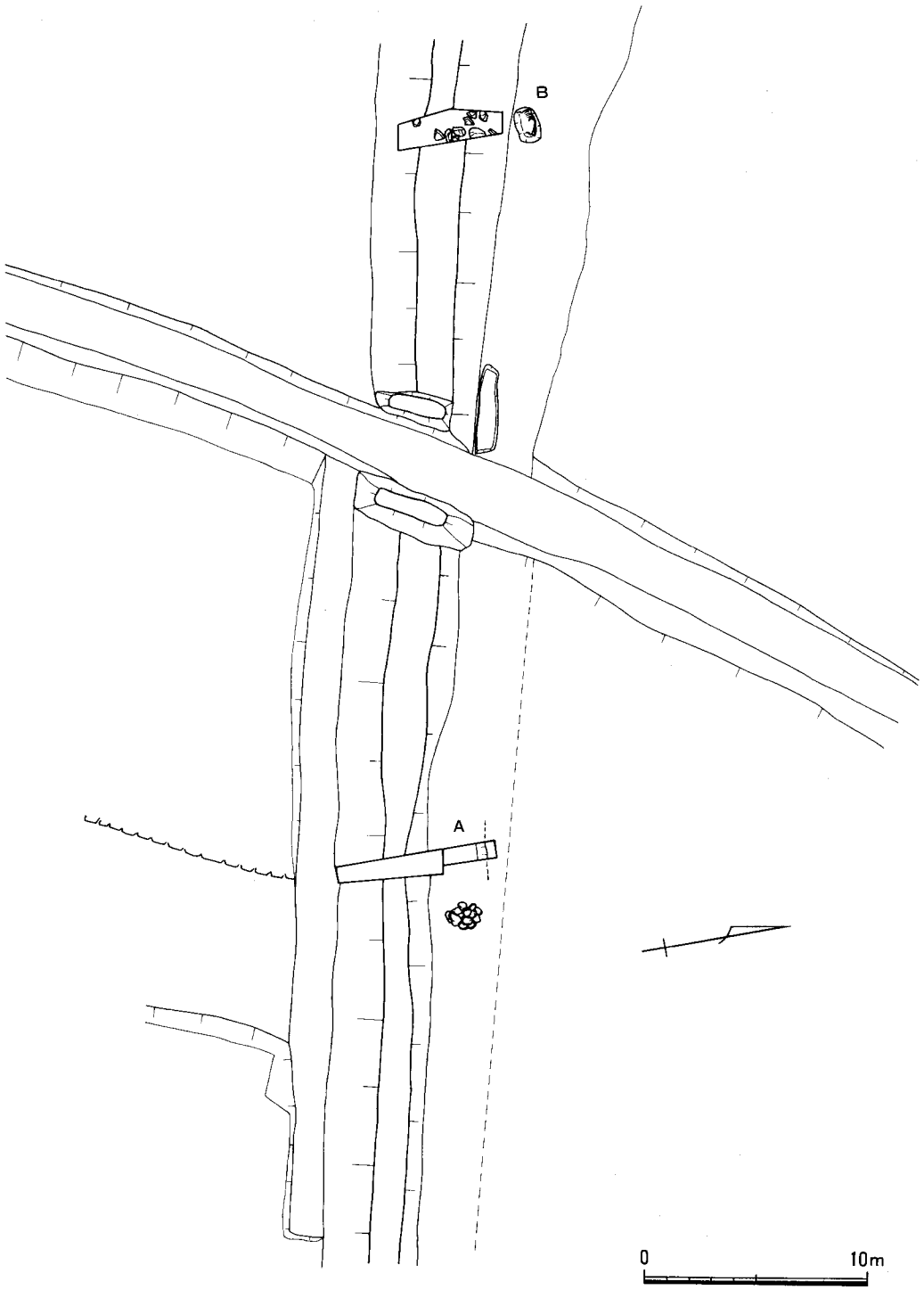


Fig.41　K－19区周辺測量図（1/300）

の土の突き固めが行われたであろうが、非常に簡単なものと考えられる。基底部の幅約4m、溝まで含めると約7.0m、高さ1.4mを測る。遺物は盛土中から肥前系磁器が出土した。1、2は染付の碗である。1は外面に唐草の文様を、2は笹の葉の文様を施す。

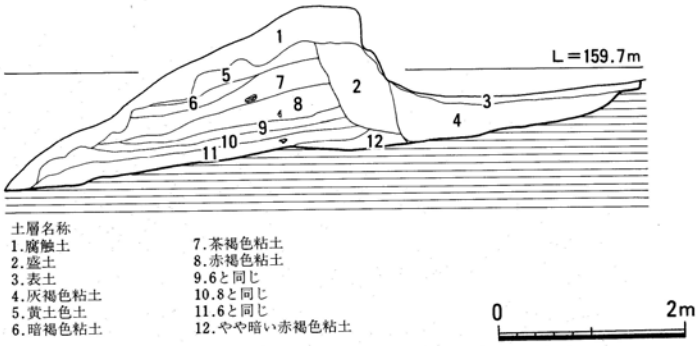


Fig.42　Aトレンチ土層断面図（1/80）

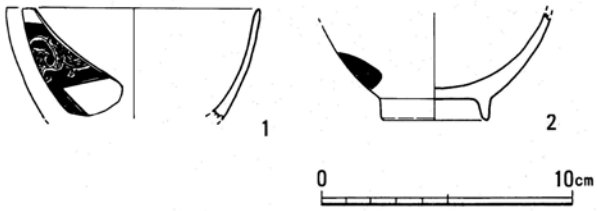


Fig.43　Aトレンチ出土遺物実測図（1/3）

3）小結

今回の土塁の構造を明らかにすることができた。土塁は溝状の掘った土を盛り上げた簡単なもので、北側は急で、南側は緩やかな傾斜をもつ。時期は出土遺物が少ないため、確定できないが、18～19世紀代に位置づけられるものと考える。能古島では近世期にも牧場を営んでいることからもそれに伴って造られたものと考える。『筑前国続風土記拾遺』には島の半から北に牧場が営なまれたとあり、この土塁は牧場の区画のものと考えられる。

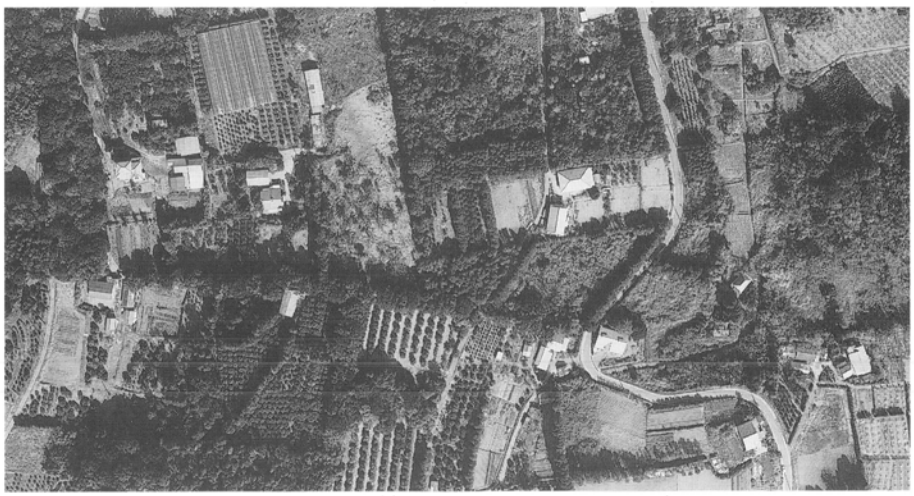


Fig.44　K－19区古土手（南から）

Fig.45　K－19区古土手（西から）

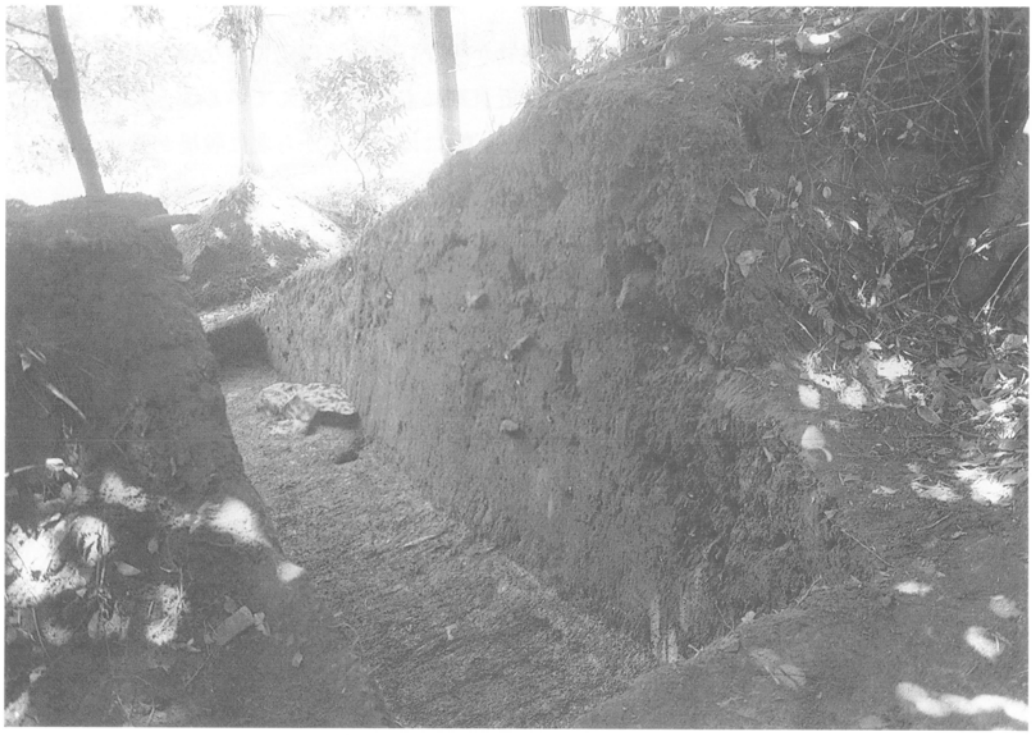


Fig.46　Aトレンチ土層断面（東から）

5．R－26区（北浦城跡）の調査

1）位置と現況

調査地点は島の東側の海岸に面して突出する丘陵の先端に位置する。丘陵は西から延びてくる狭いものである。周囲は切り立った崖であるが、頂上部は平坦で、標高約22mを測る。現在は果樹園、畑となっており、その中に十一面観音菩薩を安置したお堂がある。北浦城跡は『筑前国続風土記拾遺』には「城崎古城」と言う名称で登場し、藤原純友の家臣の伊賀寿太郎という人物が築造したとある。また、『早良郡誌』には山上億良による築造の話があるが、いずれも定かではない。城の施設としては南北に丘陵を切る堀が見られる。調査は堀と頂上部にトレンチを設定し、堀の時期、規模の把握と他の遺構の有無を確認した。

2）調査の概要

調査は堀に２ヶ所、頂上部に３ヶ所トレンチを設定した。

堀は丘陵を分断するように南北に掘られているが、北側は陸橋状に幅１m程掘り残されている。南側は削平されて堀の肩は残っていない。土地の持ち主の話によると、堀の東側の肩は開墾の際に削ったとのことで、既に礫岩の岩盤が露出している。現在約22～23mが残存する。堀は

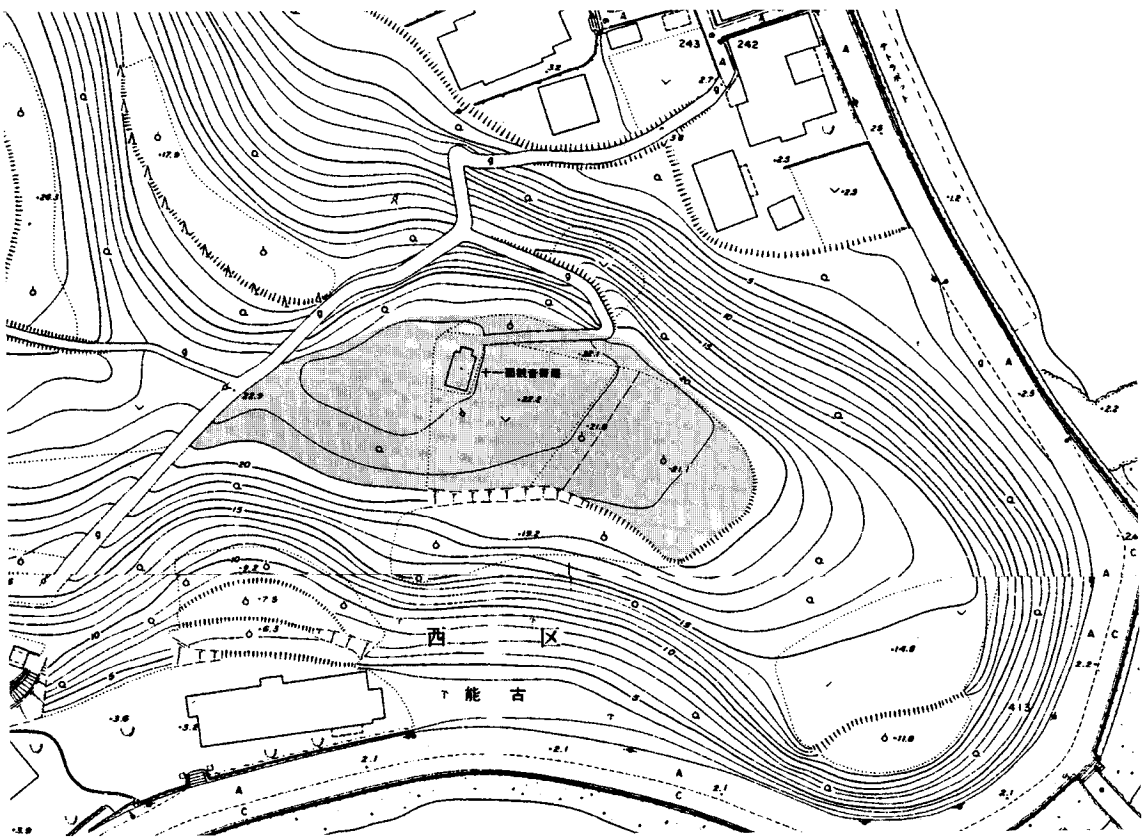


Fig.47　R－26区調査地点位置図（1/1000）

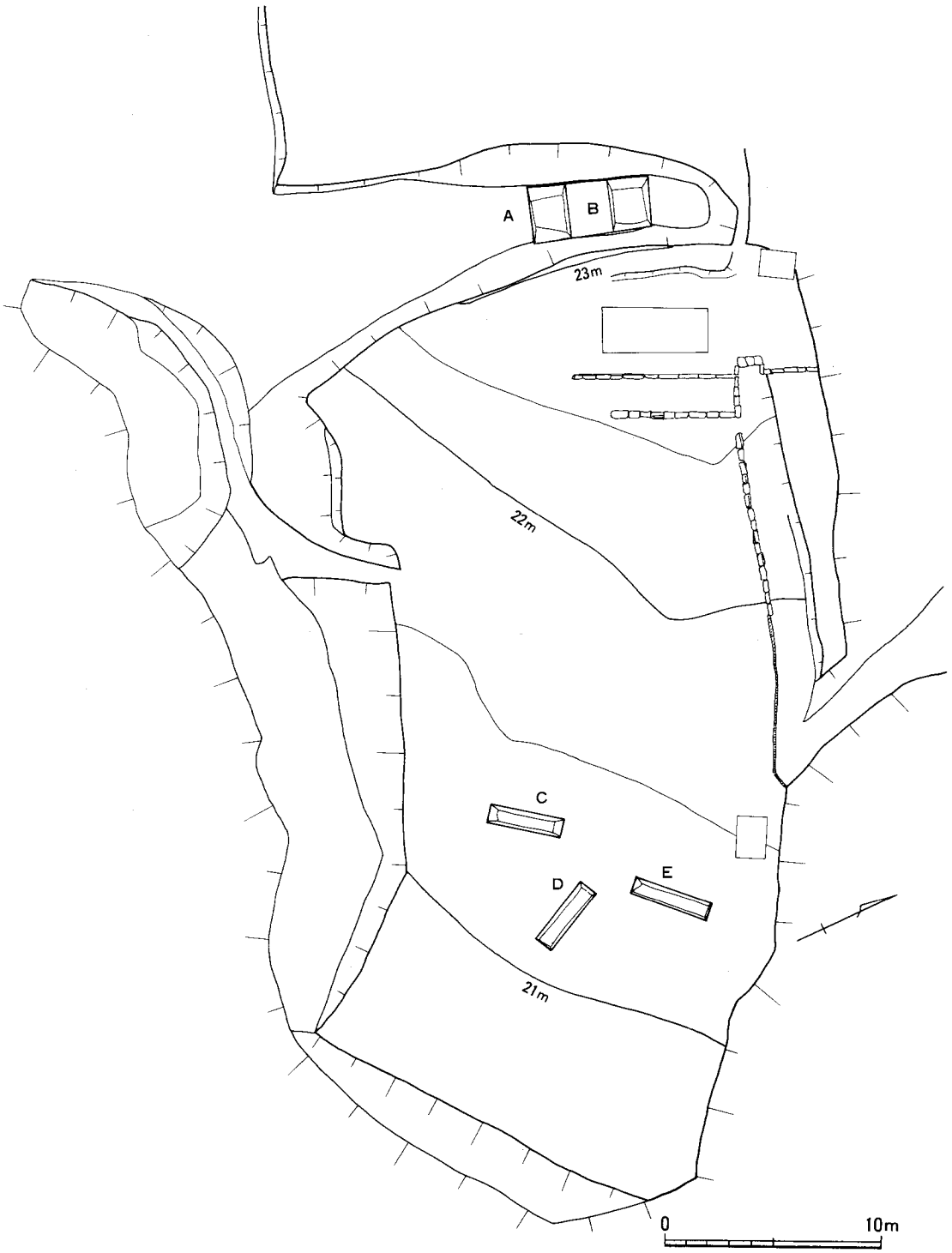


Fig.48　R－26区周辺測量図（1/300）

礫岩の岩盤に掘られ、深さは東肩からで約4.5mを測る。西肩は東肩より約1mほど低い。断面形は逆台形を呈し、上面幅約4.8m、下面幅約1.6mを測る。堀には厚さ約1.2～1.4m程の流れ込みによる埋土が堆積する。堀の底は北から南へ傾斜している。遺物は上層の1、2層からは肥前系陶磁器、寛永通寶等が出土した。下層の3、4層からは明染付、備前焼、中国製白磁等が出土した。1は白磁碗のV類である。口径19.0cmを測る。2は明染付の皿である。3は備前焼V期のすり鉢である。

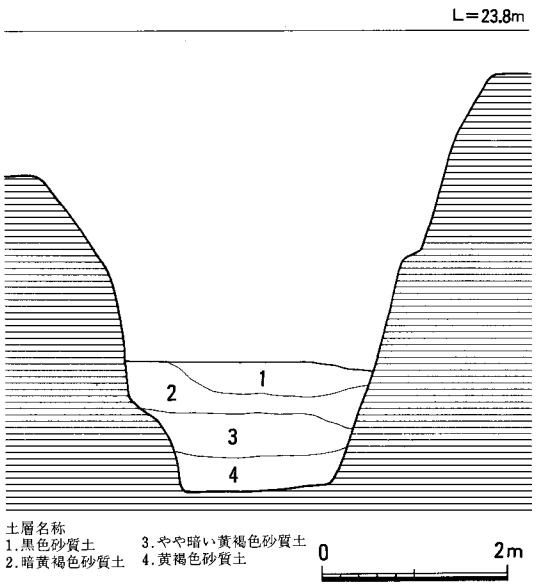


Fig.49　Aトレンチ土層断面図（1/80）

頂上部は堀東肩を最頂部として東側に向かって緩やかに傾斜している。最頂部付近は既に地山が露出している。頂上部東側では厚さ20～30cmの耕作土を除去すると、地山となる。今回の調査では遺構は検出できなかった。遺物は中国製白磁、青磁、土師器、須恵器等が出土した。

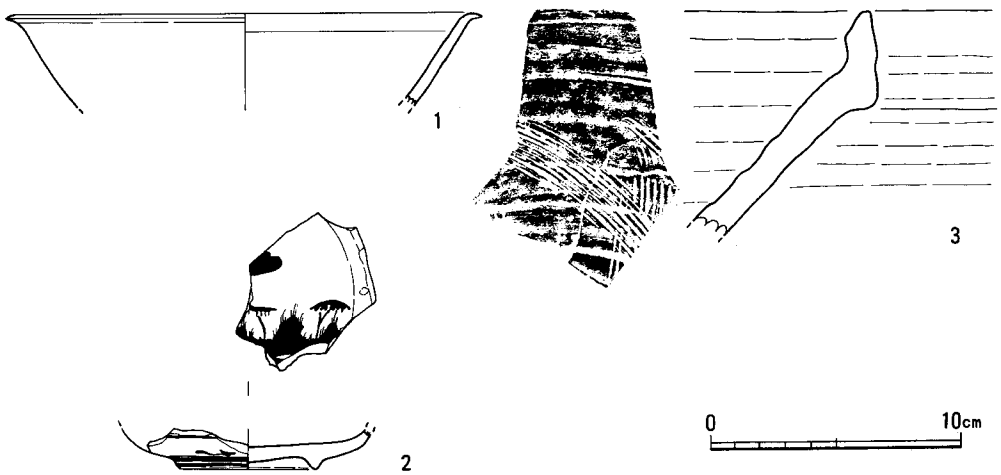


Fig.50　出土遺物実測図（1/3）

3）小結

調査では堀の規模、形態を把握することができた。城の位置する丘陵は博多湾の内側を見わたせる自然の要害で、堀は丘陵から分断するように掘られる。現在長さ約22～23m、幅約4.8m、深さ約4.5mが残存する。調査中、土地の持ち主からは頂上部東側で開墾中に多量の炭が出土したという話を伺った。しかし、堀以外の城に関係する遺構は今回の調査では検出できなかった。規模としては堀を挟んで東西に広がるものと考えられるが、あまり広いものではない。中心になるのは堀の東側で、主要な役割は湾内の行き来を見張る砦であったと推測する。城の築造時期については土師器、須恵器、中国製白磁、同安窯系青磁等が出土しており、平安時代まで溯る可能性はあるが、城はそれ以後も中世～近世を通じて、砦としての役割をはたしていたと考えられる。

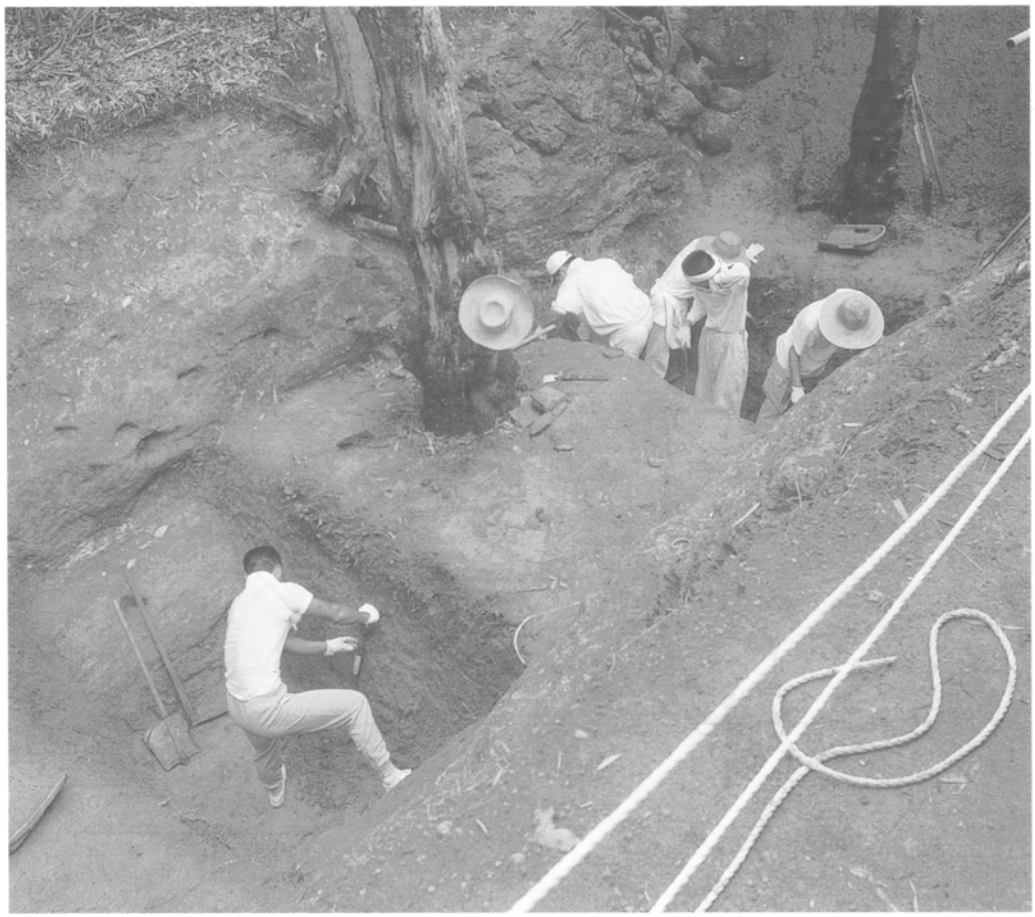


Fig.51　作業風景（北から）

Fig.52　R－26区（北浦城跡）遠景（西から）

Fig.53　R－26区（北浦城跡）遠景（西から）

Fig.54　R－26区堀（南から）

Fig.55　Aトレンチ土層断面（南から）

6．N－29区（永福寺箱式石棺墓）の調査

1）位置と現況

調査地点は島の東南部、永福寺裏手の丘陵上にあたる。丘陵は北から南に延びてくる狭いもので、箱式石棺墓は丘陵の先端に位置する。標高約31mを測る。現在周囲には万葉歌碑、戦没者慰霊塔が立っている。調査地点に近接して、市史跡能古焼窯がある。昭和63年、福岡市教育委員会によって発掘調査が行われ、現在、能古博物館の敷地中で保存、展示されている。周辺では能古焼、窯道具等が散布する。

箱式石棺墓は昭和50年頃、能古中学校の生徒たちによって発掘され、その時は棺内からは何も出土しなかったという。発掘後は埋め戻されて、現在に至っている。今回の調査ではこの箱式石棺墓の実測、写真等の記録化を目的とした。また、それに併せて周辺の遺構の確認を行った。

2）調査の概要

調査は石棺墓の掘り下げと周辺の遺構の確認のためのトレンチを設定した。

石棺墓は長さ2.0m、幅0.7mの長方形の掘り方をもち、掘り方の内側に偏平の割石を立てる。小口石は各1枚、北側壁は5枚、南側壁は4枚を使用する。小口は側壁に挟み込まれる。側壁はすこしづつ重ね合わせる。掘り方との間には長さ10cm～20cm程の偏平の割石が詰められる。壙

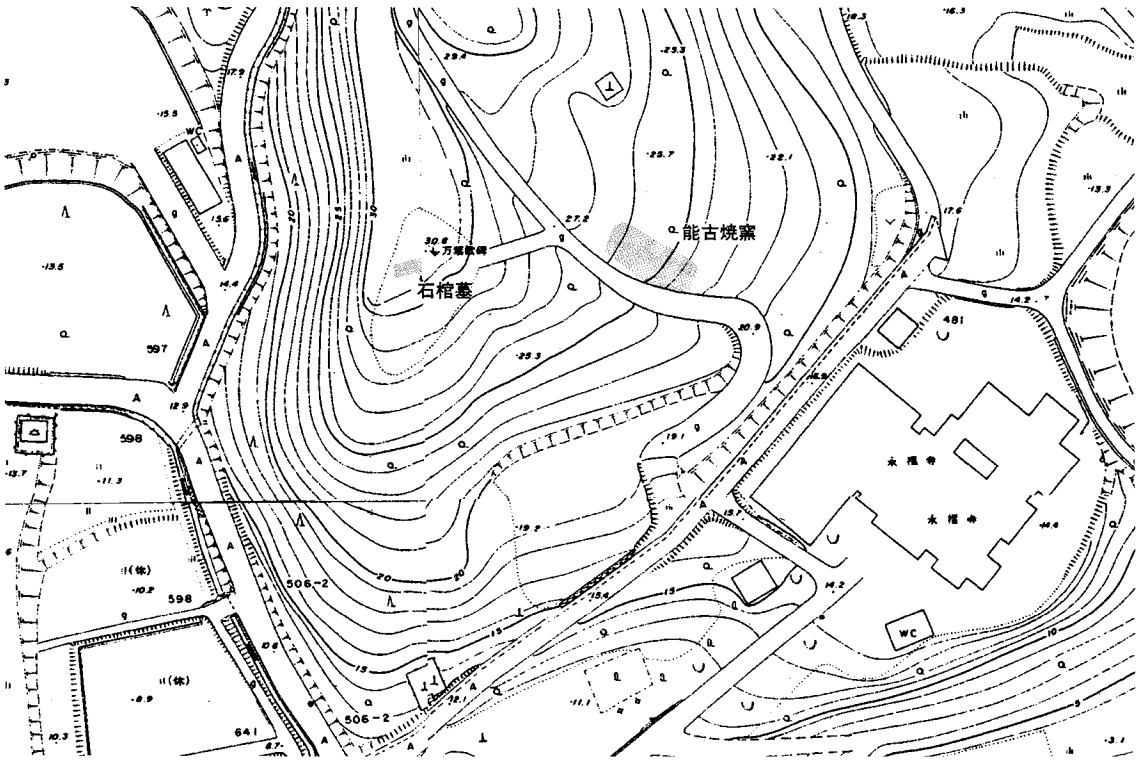


Fig.56　N－29区調査地点位置図（1/1000）

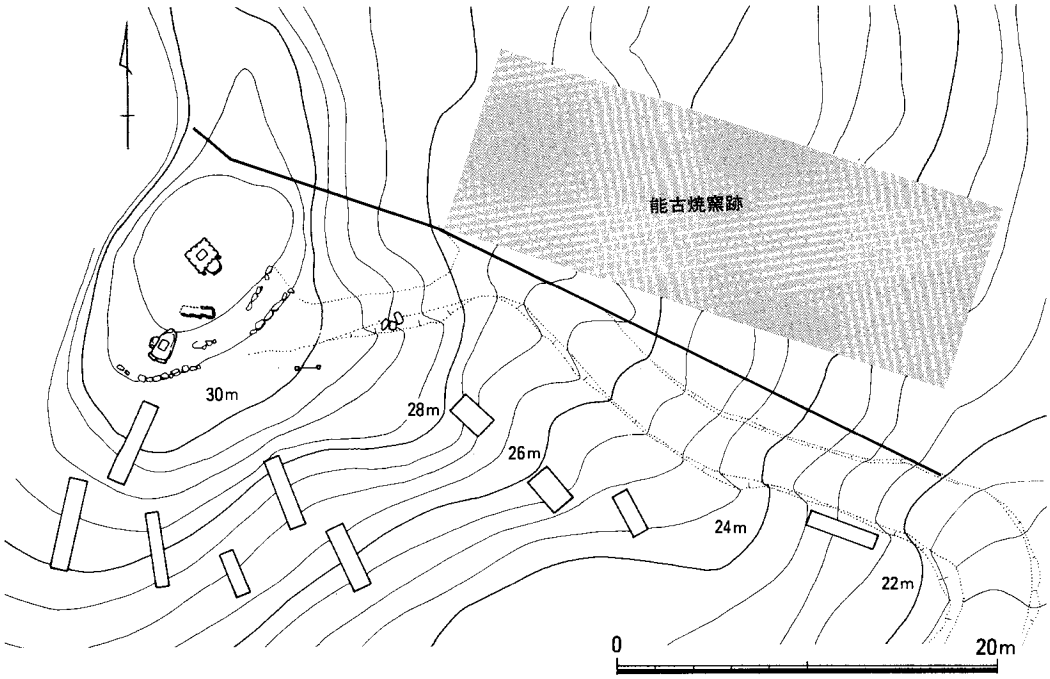


Fig.57　N－29区周辺測量図（1/400）

底には敷石等は認められなかった。内法長さ1.62m、幅は東側小口で0.4m、西側小口で0.32mで、東側はやや幅広である。深さ0.3mを測る。遺物は棺内、掘り方いずれからも出土しなかった。石棺墓の周辺にもトレンチを設定したが、これに伴う溝、盛土等は確認できなかった。また、石棺墓はこれ１基のみで、他の遺構は検出できなかった。

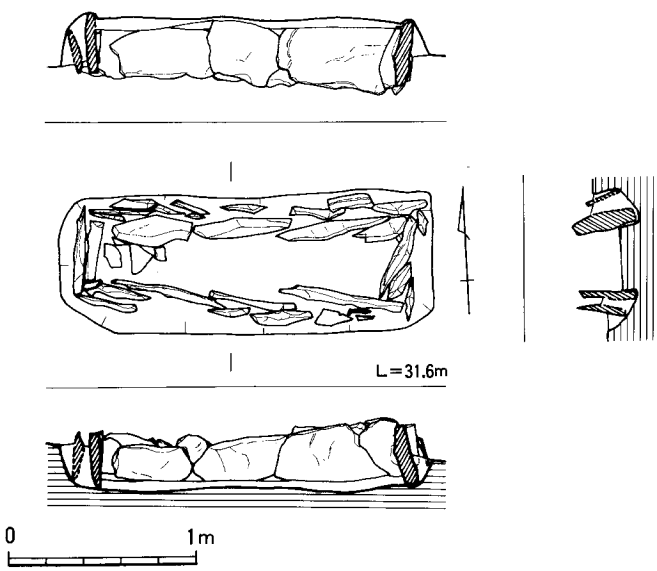


Fig.58　箱式石棺墓実測図（1/40）

3）小結

今回の調査では箱式石棺墓の記録化、周辺の遺構の確認を行った。箱式石棺墓は１基のみで他の遺構は確認できなかった。箱式石棺墓の時期は出土遺物がないため、確定できないが、弥生時代後期～古墳時代に位置づけられるものと考える。今回の分布調査では調査地点の西側の丘陵では弥生土器、土師器、黒曜石等を比較的多く採取しており、該期の集落の存在が予想される。それらとの関連を含めて今後の調査が期待される。

Fig.59　作業風景（西から）

Fig.60　箱式石棺墓完掘（南から）

Fig.61　箱式石棺墓完掘（東から）

7．L－30区（古宮）の調査

1）位置と現況

調査地点は島の東南側の丘陵上にあたる。分布調査では島の南側は弥生時代～中世の遺物が数多く採取できた。調査はその成果に基き、遺構の有無を確認するために試掘を行った。試掘を行った「古宮」は現在江の口にある白鬚神社の故地とされる。「古宮」の地名は『慶長検地帳』に既に見られ、その時期には白鬚神社は現在の場所に移ったものと考えられる。調査地点の現況は畑で、標高約24mを測る。調査は白鬚神社に関連する遺構の確認を目的に行った。

2）調査の概要

調査はトレンチを２ヶ所設定し、遺構の有無を確認した。

Ａトレンチでは23～30cmの耕作土を除去すると、明褐色粘質土の地山を検出した。遺構は溝状遺構、柱穴等を検出した。調査区西側では地山の傾斜が見られ、暗褐色粘質土の包含層を検出した。遺物は弥生土器、黒曜石剥片、須恵器、土師器、同安窯系青磁等が出土した。

ＢトレンチではＡトレンチ同様、明褐色粘質土の地山で柱穴、焼壁土杭等を検出した。地山の傾斜はこのトレンチでも見られた。遺物は弥生土器、黒曜石剥片、須恵器、土師器、同安窯系青磁等が出土した。

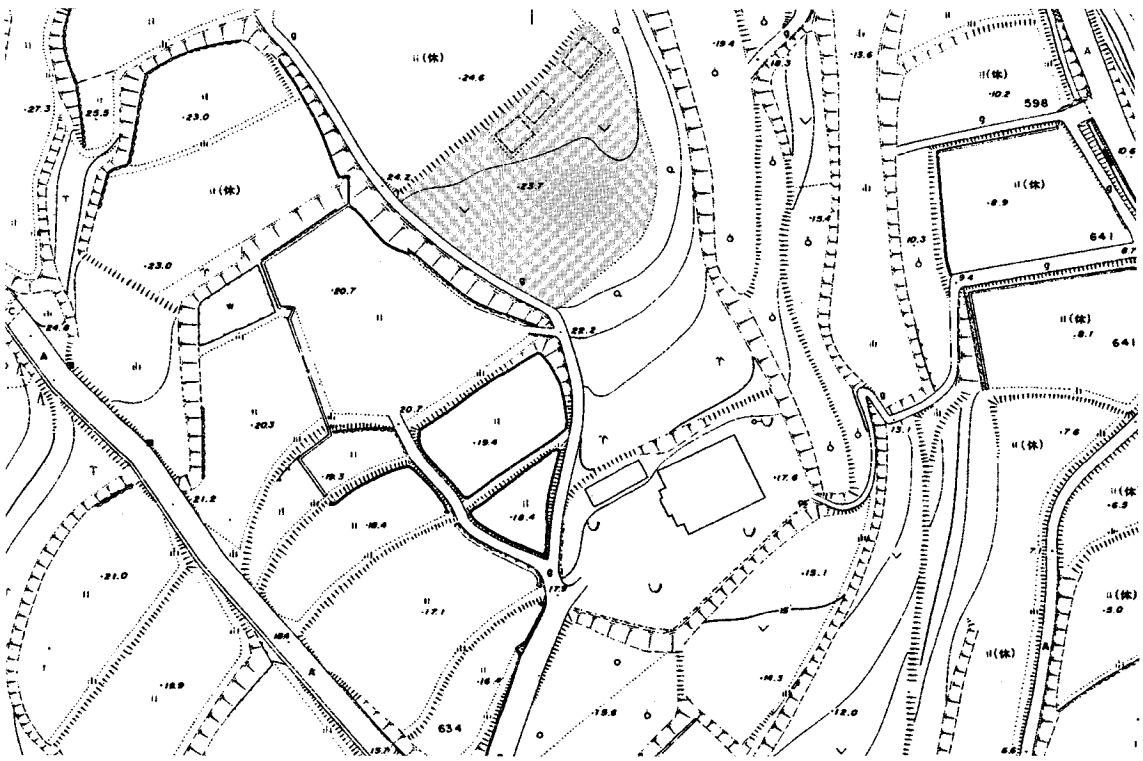


Fig.62　Ｌ－30区調査地点位置図（1/1000）

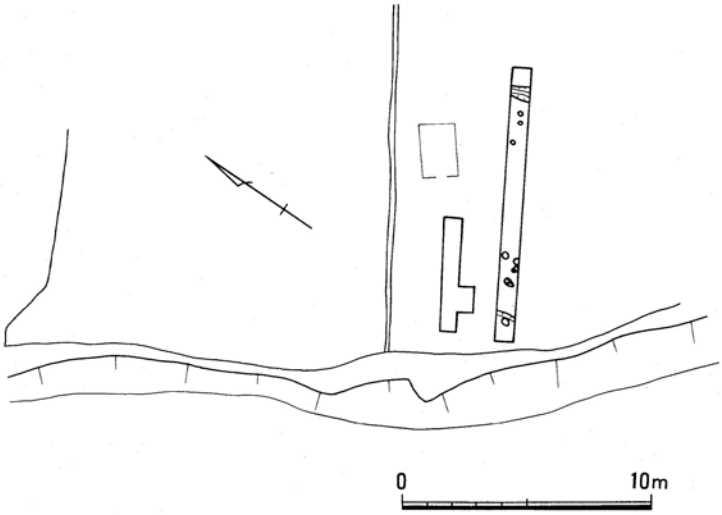


Fig.63　L－30区調査トレンチ配置図（1/300）

Fig.64　L－30区遠景（北から）

焼壁土杭は平面形は不整楕円形を呈し、長さ1.65m、幅0.9mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で、壁は強く焼けて赤変している。遺構は掘り下げていないため、深さは不明である。遺構検出時に土師器、青磁等が出土した。

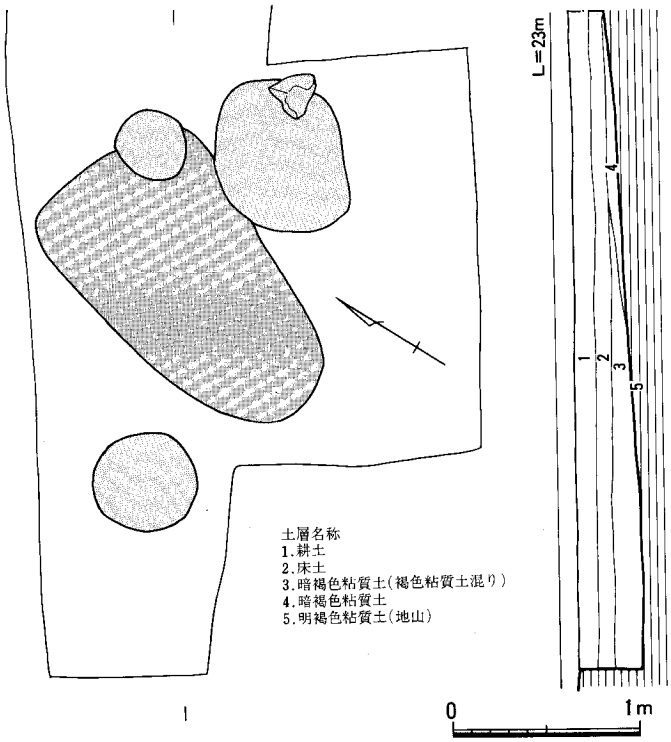


Fig.65　L－30区Ｂトレンチ遺構実測図（1/40）

3）小結

今回の調査では溝状遺構、焼壁土杭、柱穴等を検出した。遺物は弥生土器、土師器、青磁等が出土した。遺構の時期は出土遺物等から中世期に位置づけられるものと考える。調査では神社に関連する遺構は確認できなかったが、調査地点周辺は弥生～中世の遺物の散布が認められ、該期の遺構の遺存が予想される。

Fig.66　L－30区Aトレンチ（西から）

Fig.67　L－30区Bトレンチ（西から）

8．H－26区（早田古墳１号、２号墳）の調査

1）位置と現況

調査地点は島の中央南側の丘陵部に位置する。古墳は南東に傾斜していく丘陵の斜面に立地する。調査地点は玄武岩地質で、玄武岩の巨石が至るところに露頭している。現在、調査地点は雑木林であるが、周辺地形は開墾による改変のため、階段状を呈している。標高は約107～110mを測る。古墳は１号、２号墳の２基が現在確認されている。２基とも斜面に並行して立地する。周囲には玄武岩の巨石が露頭しており、古墳の石室を思われるものもあるが、今回の調査では新たな古墳は発見できなかった。西側の１号墳はほとんど削平されて、石室は露出している。天井石は中央から割れて陥没している。石室内の土砂の流入は少なく、破壊はそう古くない時期に行われたものと考えられる。２号墳の墳丘は削平されているものの、石室の遺存状態は比較的良好である。石室東側には盗掘穴が１ヶ所開いている。羨道部分は天井石がずれ落ちているため、土砂が流入し、閉塞石は原位置を保っていない。

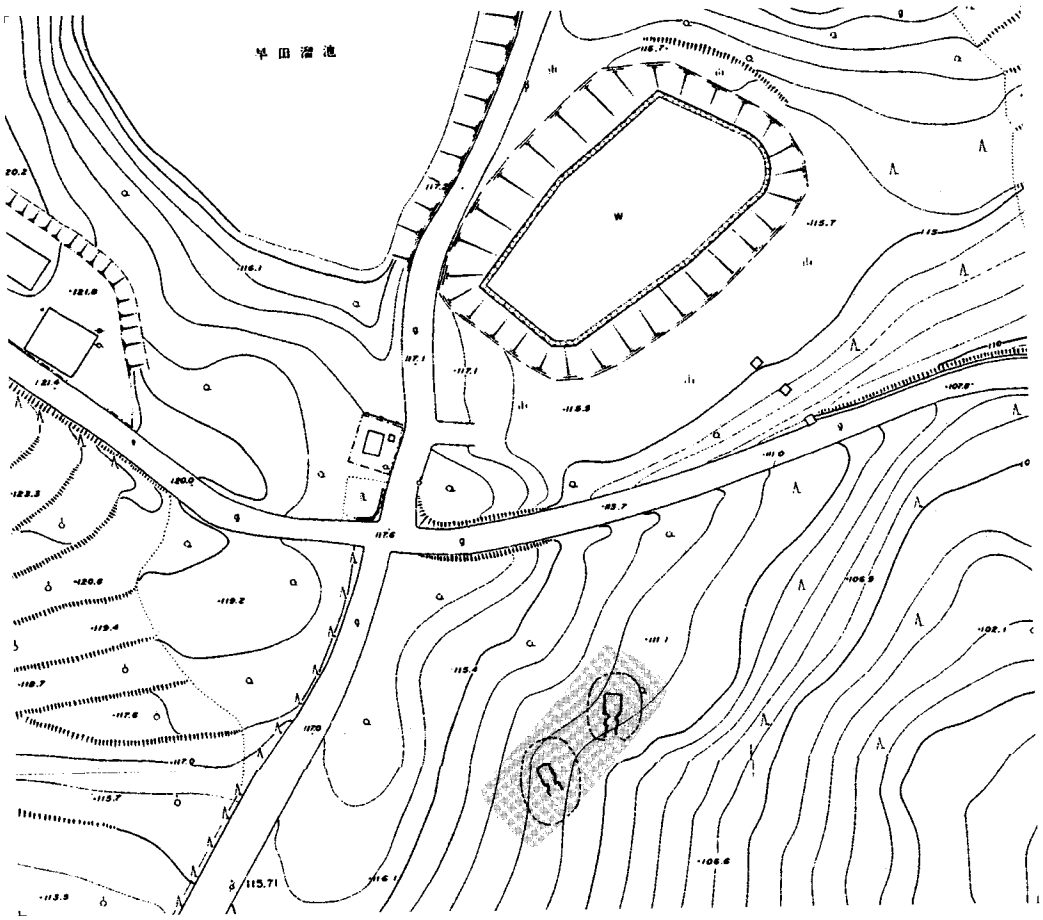


Fig.68　H－26区調査地点位置図（1/1000）

Fig.69　H－26区周辺測量図（1/200）

調査は現況の測量と石室の図化を主な目的として、併せて古墳の規模、時期を確認するために、石室内の清掃と墳丘の立ち割りを行った。古墳は調査後も保存されるので、トレンチ等は最小限のものに留めた。

2）調査の概要

調査は周辺の現況測量、石室内の清掃・写真撮影、実測を行った。

1号墳　天井石が陥没しており、内部の調査は天井石を除去しないと困難なため、今回は現況と写真と石室の平面形の略測に留めた。墳丘は削平のためほとんど残っていない。また、墳丘形も不明瞭である。盛土は地山から約50cmが残存する。墳丘規模は約8～9mで、円墳と考えられる。盛土は暗褐色粘質土で、あまり締まりがない。

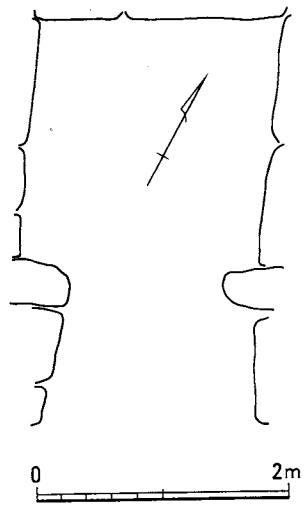


Fig.70　早田古墳1号墳石室平面図（1/60）

埋葬主体は単室両袖型の横穴式石室で、南東側に開口する。石室は地形の傾斜に対して直行して造られる。石室の天井部は崩落し、天井石の一部は欠失している。また、羨道部前面の側壁も欠失している。玄室は奥壁幅約1.9m、右壁長約2.0m、左壁長約1.9m、玄門幅1.2mを測る。玄室には敷石があるが、原位置を保っているものがほとんどない。遺物は検出できなかった。

2号墳　1号墳の東側約5mの位置にある。墳丘の遺存状態は悪く、削平のためほとんど残っていない。また、墳丘の東側は大きく削られて、段が付いており、天井石も露出している。天井部東側には盗掘穴があり、石室内はかなり荒らされている。

墳丘は削平のため、判然としないが、墳丘形は円形を呈し、径7～8mを測る。盛土はほとんど残っておらず、現存高約0.4～0.5mを測る。盛土は暗褐色粘質土で、大きく2つの工程に分けられる。第1工程は石室構築に伴う裏込め的なもので、天井部直下までなされる。盛土は石積みに応じて、叩き締められている。石材の間には小石や粘土が詰められる。第2工程は天井石を架構した後の墳丘の整形のための盛土である。前者と比べ、あまり締まりがない。

2号墳では羨道に連続して外護列石が残る。外護列石は羨道の左壁先端から連続して構築され、現存長約1.7mが残存する。列石は約0.3～0.7mの玄武岩の転石を使用し、羨道に対してほぼ直角に積まれる。現在、2段分約0.5mが残存する。右壁についても存在したと考えられるが、削平のため、残存していない。

埋葬施設は主軸をN－6°－Eにとり、南側に開口する単室両袖型の横穴式石室である。石室は羨道部分の天井石がずり落ちているが、遺存状態は比較的良好である。しかし、墳丘の削平によって、石室全体が東側に傾いている。石室内は天井部東側にある穴から盗掘を受けてかな

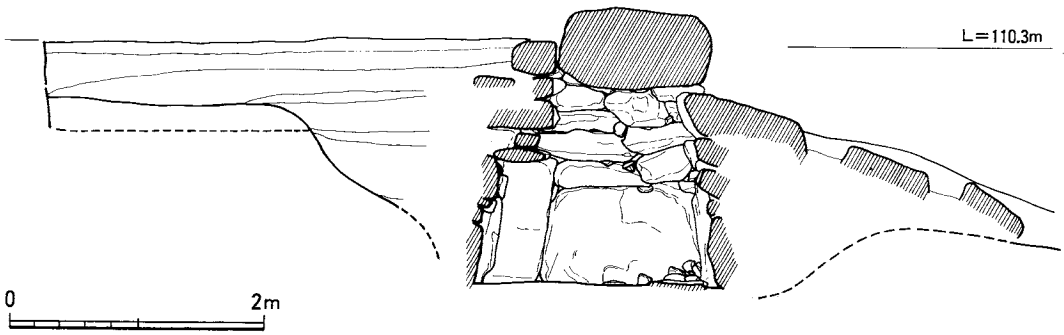


Fig.71　早田古墳２号墳丘土層断面図（1/60）

り荒らされている。石室はやや歪んだ方形プランを呈し、やや開き気味の羨道が連接する。石室の全長は左壁約6.15m、右壁6.2mを測る。石材はすべて玄武岩の転石もしくは割石を使用する。

玄室は奥壁幅1.9m、左壁長2.0m、右壁長1.9mを測る。奥壁は側壁に対して斜行して交わる。壁体の構築は各壁共通しており、奥壁、側壁とも各２石の腰石を使用する。腰石は幅0.4～1.2m、高さ0.6～1.0mの割石を面を揃えて立てる。腰石より上は30～50cmの転石を目路が通るように持ち送りながら、横積みしていく。奥壁と側壁の隅角は腰石から上は互いに重なるように積まれる。玄室の天井部は幅約1.4mの石を１個架構する。床面からの高さは約1.6mを測る。床面は10～30cmの転石で敷石がなされていたと考えられるが、荒らされてほとんど原位置を保っていない。

玄門部は素型の両袖で、特別の施設はない。袖幅は左袖約0.2m、右袖約0.25m、玄門幅約1.4mを測る。袖石には方形の割石を立てて使用する。玄門の天井は幅約0.9mの石を使用し、左袖石ではその上に３石横積みした後に、右袖石では直接その上に天井石を架構する。床面からの高さは約1.1mを測る。

羨道は最前面の天井石はずり落ちており、現在は１石のみに架構している。羨道の玄室側は崩れ落ちた閉塞石や流れ込んだ土砂で埋没している。今回の調査では羨道側壁が土圧で南側に傾斜しているため、埋土の除去は危険と判断し、現状での実測に留めた。壁体の構成は玄室と同様で、幅1.0～1.5m、高さ0.6～0.9mの割石を立てて腰石としている。腰石より上は幅30～60cmの転石を横積みする。羨道は玄門から第1梱石までは直線的に延び、それより前面は開き気味に延びる。羨道長では左壁で約4.2m、右壁で約4.3m、入口部分の幅で約1.6mを測る。

床面には２ヶ所梱石が配置される。第１梱石は前後に割石３個を組み合わせて閉塞石の根石としている。羨道入口から約1.3mを測る。第２梱石は細長い割石と偏平な石２個を組合せ、袖石との隙間に拳大の石１個を詰めて梱石としている。第１梱石からの距離約1.9mを測る。床面には敷石が部分的に残る。

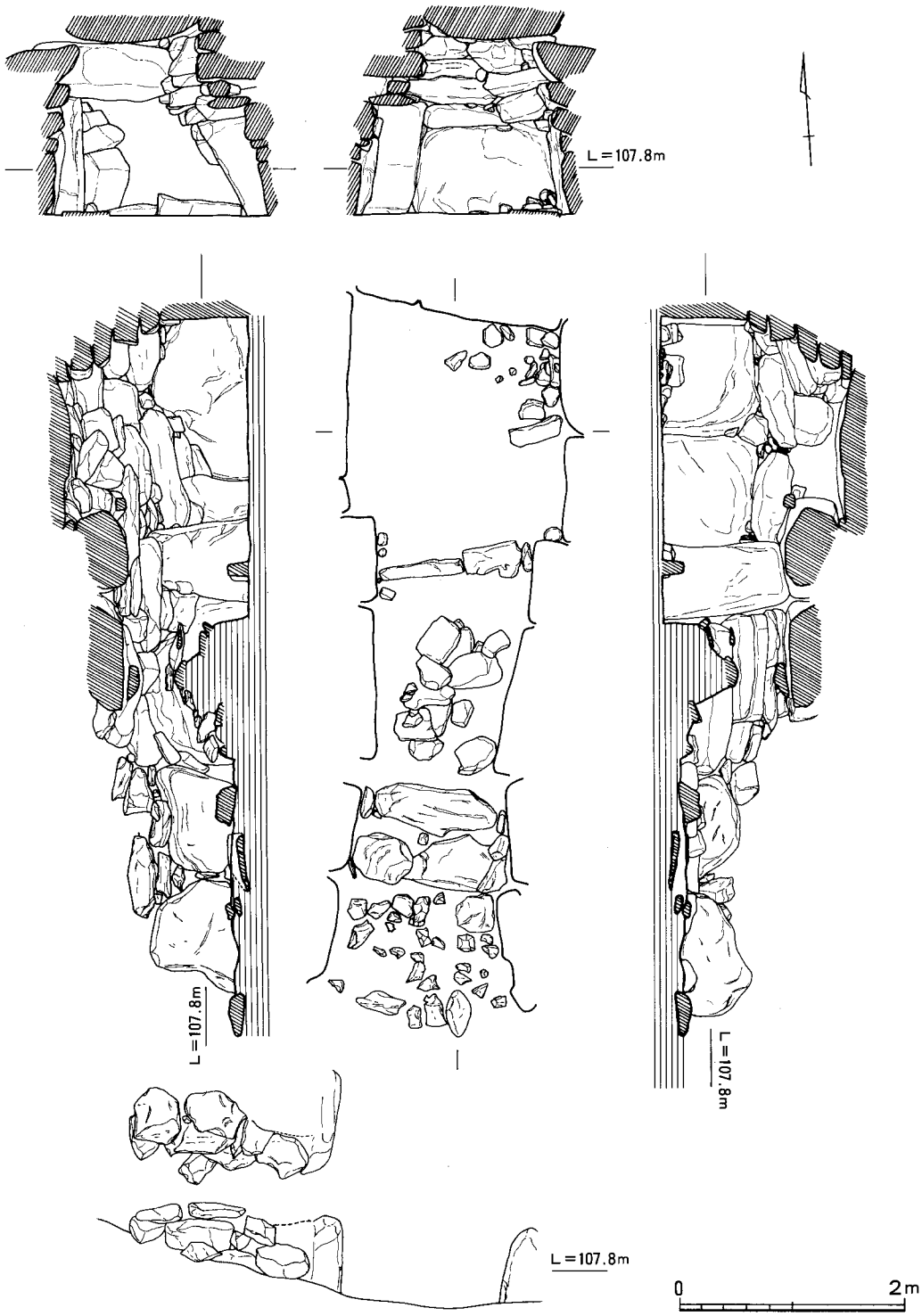


Fig.72　早田古墳２号墳石室及び外護列石実測図（1/60）

閉塞施設は第１梱石を根石として設置されていたと考えられるが、閉塞石は既に内外に崩れ落ちている。閉塞石に使用された石は10～30cmの転石である。

石室の掘り方はトレンチ調査のため、一部検出したのみである。掘り方は地形の傾斜に並行して、地山に掘り込まれる。深さ約1.4～1.6mを測り、石室の半分以上が収まる。

遺物は石室、墳丘から須恵器、土師器、黒色土器、黒曜石、鉄片等が出土した。石室内の遺物は攪乱のため、ほとんど破損しており、副葬時の状態を保つものはない。また、盗掘時のものと考えられる黒色土器、土師器碗が出土している。

１～６は石室から出土した。１は須恵器杯身で、天井に丸みをもつ。調整は回転ナデである。口径11.0cmを測る。２～４は須恵器杯蓋で、口縁内に短いかえりが付く。２、３は天井部はヘラ切り未調整である。口径11.6cm、11.2cmを測る。５は土師器杯で、調整はヨコナデである。色調は黄橙色を呈する。器高3.0cm、口径12.8cmを測る。６は黒色土器Ｂ類で、底部にはハの字形に開く高い高台が付く。内外面に細かな磨きが施される。７～９は墳丘から出土した。７は土師器碗で、低い高台が付く。８、９は黒曜石製の石鏃である。８は未製品で、裏面に主要剥離面が残る。長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。９は凹基無茎式で、両脚部を欠いている。現存長1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。

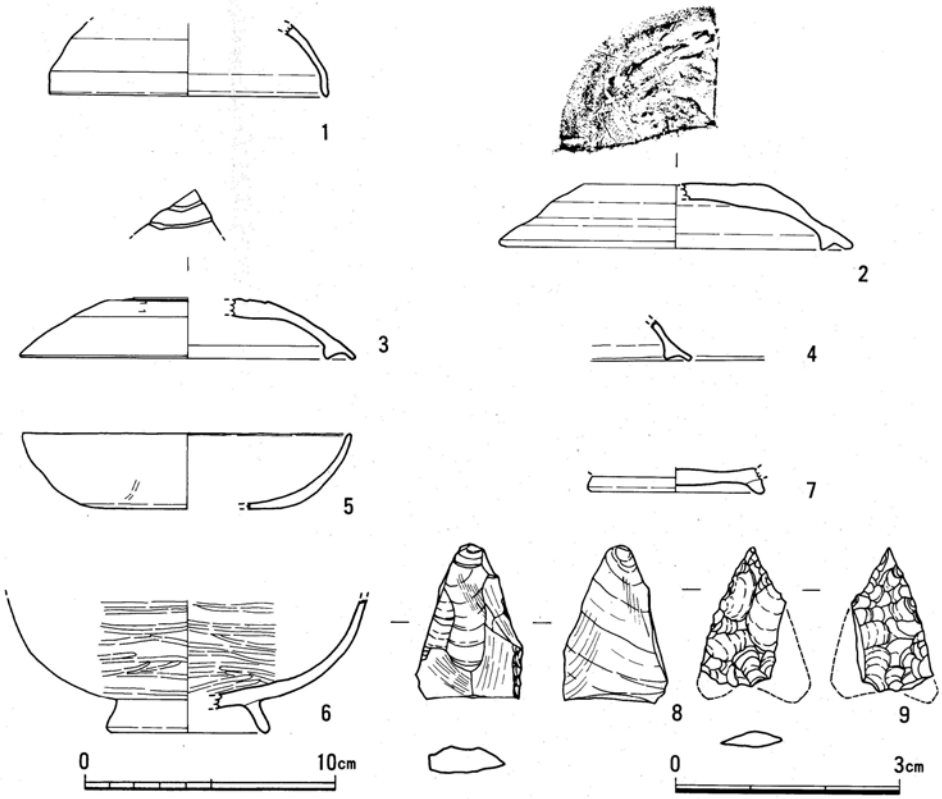
３）小結

今回の調査では１、２号墳の墳丘測量、石室の実測を行った。

１号墳は主体部に横穴式石室をもつ円墳で、径約８～９ｍを測る。墳丘はほとんど残っておらず、石室は天井が崩落している。石室では単室の両袖型横穴式石室で、南東に開口する。羨道前面は削平されている。玄室は歪んだ方形プランを呈し、幅約1.9m、長さ2.0mを測る。出土遺物はない。

２号墳は主体部に横穴式石室をもつ円墳で、径約７～８ｍを測る。墳丘はほとんど残っていないが、石室はほぼ完全に残っている。石室は単室の両袖型横穴式石室で、南東に開口する。天井部東側には盗掘穴がある。石室の全長約6.2mを測る。玄室は歪んだ方形プランを呈し、幅約1.9m、長さ2.0mを測る。出土遺物は須恵器、土師器が出土したが、副葬時の状態を保つものではない。石室内、墳丘内から黒色土器、土師器碗等が出土しており、平安時代には既に盗掘されたものと考えられる。２号墳の築造は出土遺物から７世紀を前後する時期に位置づけられる。１号墳も石室の類似性からほぼ同時期に位置づけられると考えられる。

今回の調査では新たな古墳は発見できなかったが、古墳の立地する南東向きの斜面には玄武岩の巨石が露頭しており、これらとは別に古墳が存在する可能性はある。また、墳丘盛土中から黒曜石剥片、石鏃が出土しており、縄文～弥生時代の遺構の存在も予想される。



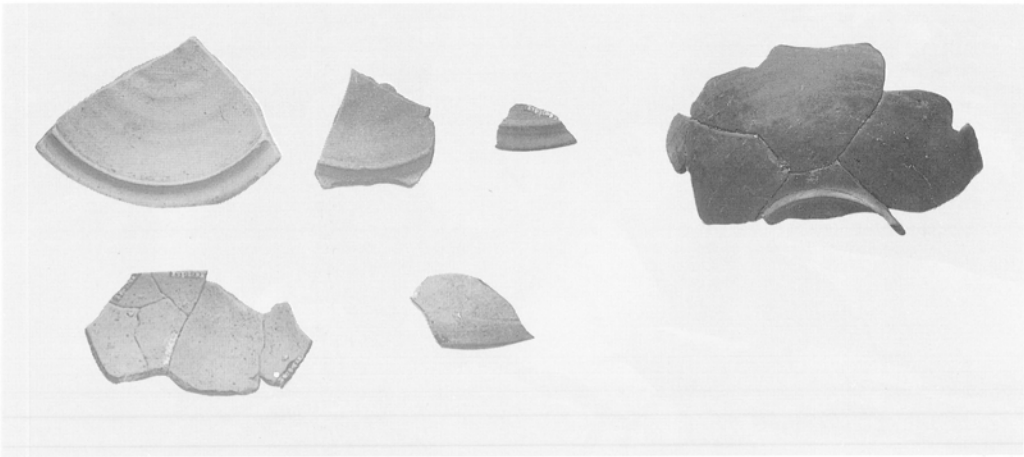


Fig.73　2号墳出土遺物実測図（1/3、1/1）、及び遺物写真

Fig.74　1号墳現況（北から）

Fig.75　1号墳石室現況（南から）

Fig.76　2号墳現況（南から）

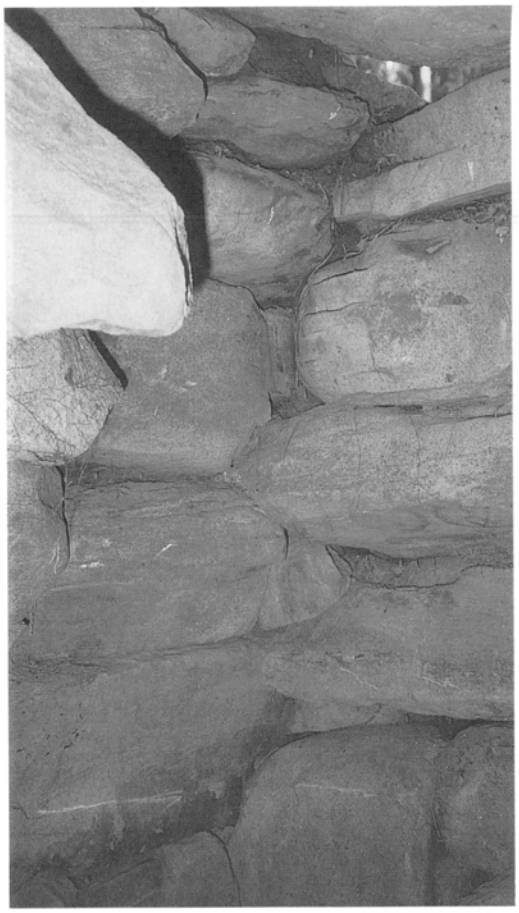
Fig.77　2号墳石室現況（南から）

Fig.78　2号墳羨道現況（南から）

Fig.79　2号墳羨道（北から）

Fig.80　2号墳石室（南から）

Fig.81　2号墳玄室（南から）



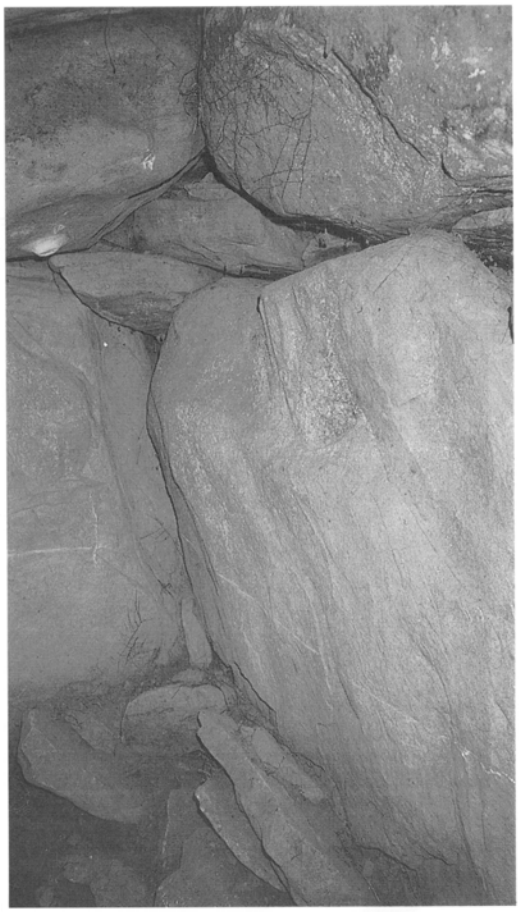


Fig.82　2号墳玄室隅（左壁、右壁）（南から）

Fig.83　2号墳棚石（北から）

9．Ⅰ－25区（通称鹿垣）の調査

1）位置と現況

「鹿垣」は島の南半部を東西に延びる石垣で、東は北浦から西は白鳥にかけて全長約2kmに及ぶ。能古島には江戸時代、黒田藩の鹿の狩猟場があったが、鹿による田畑の作物への被害が多かった。そのため、藩は鹿による被害を防ぐために島民を動員して島を南北に分断するように石垣を築いた。これが現在残る鹿垣で、完成は天保七（1836）年といわれる。能古島では現在は鹿は全く見られない。昭和20年頃を境に全滅したという。調査は鹿垣の構造、規模を把握することを目的とした。

2）調査の概要

鹿垣は現在ほとんど山林の中にあり、調査が困難な場所が多い。今回の調査では比較的良く残っているⅠ－25区で、鹿垣の構造等を調査した。

鹿垣は高さ1.8～2.0mの土盛りの片方に幅30～50cmの割石、転石を積んだものである。石積みは北側のみに行われており、ほぼ垂直に積まれている。石積みの北側には幅約３mの溝が掘られ

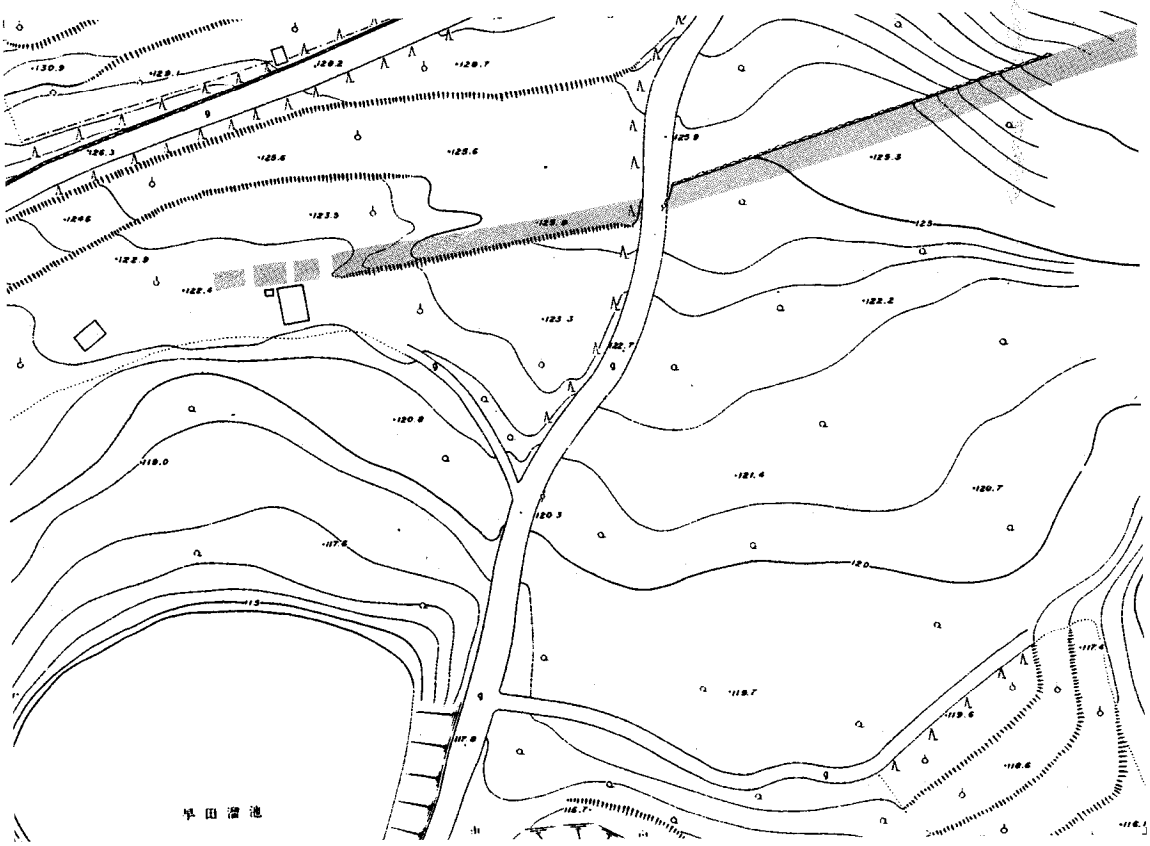


Fig.84　Ⅰ－25区調査地点位置図（1/1000）

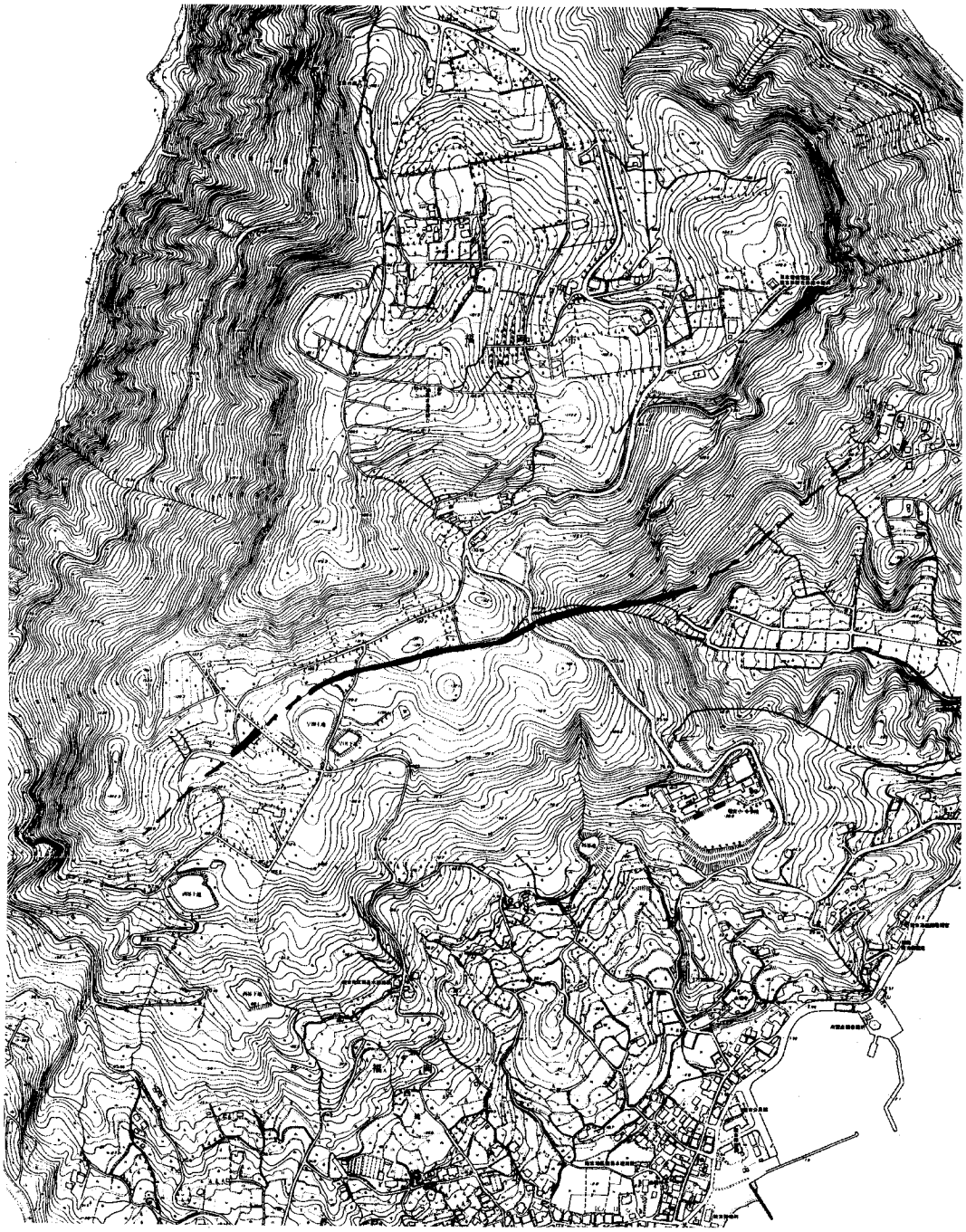


Fig.85　鹿垣平面分布図（1/10000）

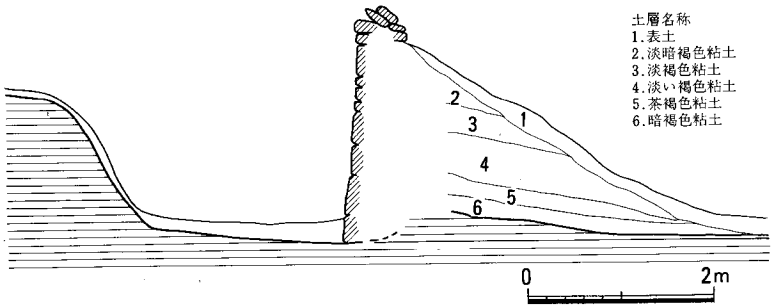


Fig.86　鹿垣土層断面図（1/80）

る。したがって、鹿垣の土盛りはこの溝の掘削時の土を利用して行われたものである。土盛りは北側に急で、南側は緩やかに傾斜していく。盛り方は非常に簡単で、版築等は見られない。溝を掘った土を順次積み上げていったものと観察される。基底面の幅約４ｍを測る。石積みは土盛りは北側に地山からほぼ垂直に積まれる。背後は裏込め等ほとんど見られない。石は基底付近は比較的大きめの石を使用するが、腰石と言えるほどのものではない。したがって、不安定で、上部の石が崩落しているところが多い。石はほとんど玄武岩を使用する。鹿垣の位置する場所は玄武岩地質であり、石材の入手は比較的容易であったと考えられる。石積みを見ていくと、石の積み方が変わる所が見られ、幾つもの工区に分けて作業を行ったことが伺える。

３）小結

鹿垣は鹿が島の南側に逃げていくのを防ぐために、江戸時代末に造られた石垣である。全長は約２㎞に及び、島を東西に横断している。遺構は現在でも比較的良好に遺存している部分が多く、全国的に見ても是だけの規模の遺構は稀である。今後、鹿垣の全容の把握と保護、保全が望まれる。

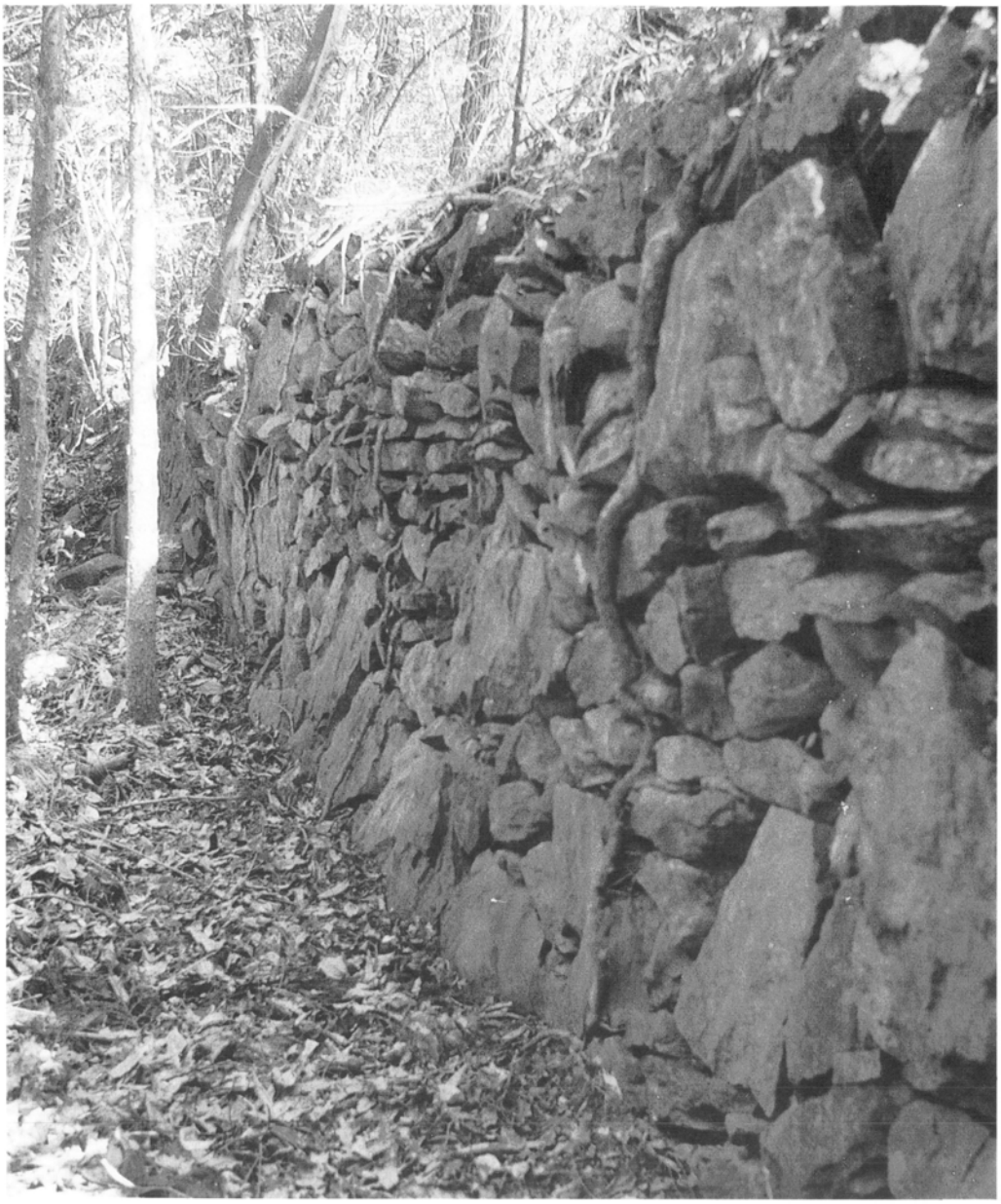


Fig.87　鹿垣（西から）

Fig.88　鹿垣（北から）

Fig.89　鹿垣（西から）

Fig.90　鹿垣（西から）

Fig.91　鹿垣（西から）

10. N－23区（浦谷宝篋印塔）の調査

1）位置と現状

調査地点は島の東側、北浦の集落の背後の丘陵部に位置する。調査を行った宝篋印塔はこれまでの分布調査や踏査等で既に知られていたものである。宝篋印塔が残る周辺は近世初期まであった「立泉寺」が存在したと考えられている場所である。今回の調査はこの石塔の実測等の記録化を目的に行った。

2）調査の概要

宝篋印塔は現在石積みの上に載せられている。石積は本来この石塔に伴うものかは不明である。宝篋印塔は基礎、塔身、笠部、相輪の4部分からなる。石材は凝灰岩である。現存高62.4cmを測る。

相輪は九輪の上半分が欠損している。九輪の段は沈線で表される。残存長17.0cmを測る。笠部は軒上6段、軒下2段で隅飾りはやや外向きに傾斜する。最上部は露盤となり、相輪を請けている。高さ13.8cmを測る。

塔身は立方体の四方に、左から「ウーン　阿閦如来（東）」「アク　不空成就如来（北）」「キリーク　阿弥陀如来（西）」「タラーク　宝生如来（南）」の金剛界四如来が彫り込まれる。石塔は現在、「キリーク」が彫り込まれている面が東に向いている。幅14.4cm、高さ14.2cmを測る。

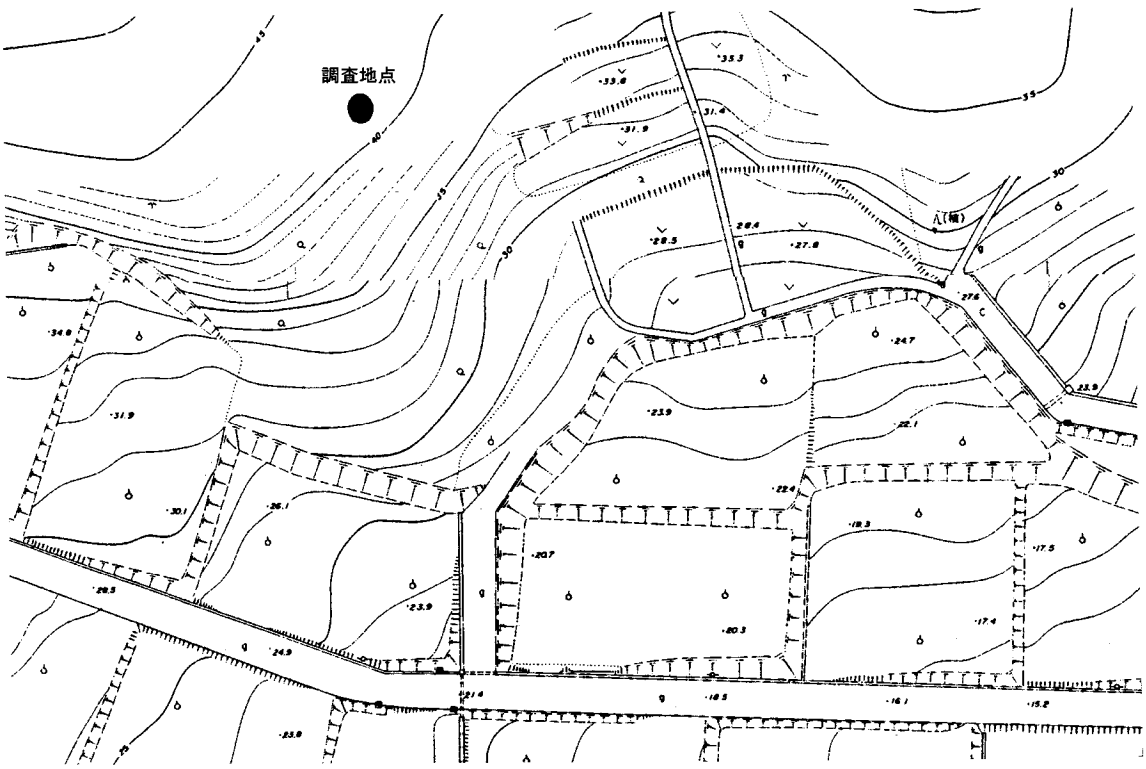


Fig.92　N－23区調査地点位置図（1/1000）

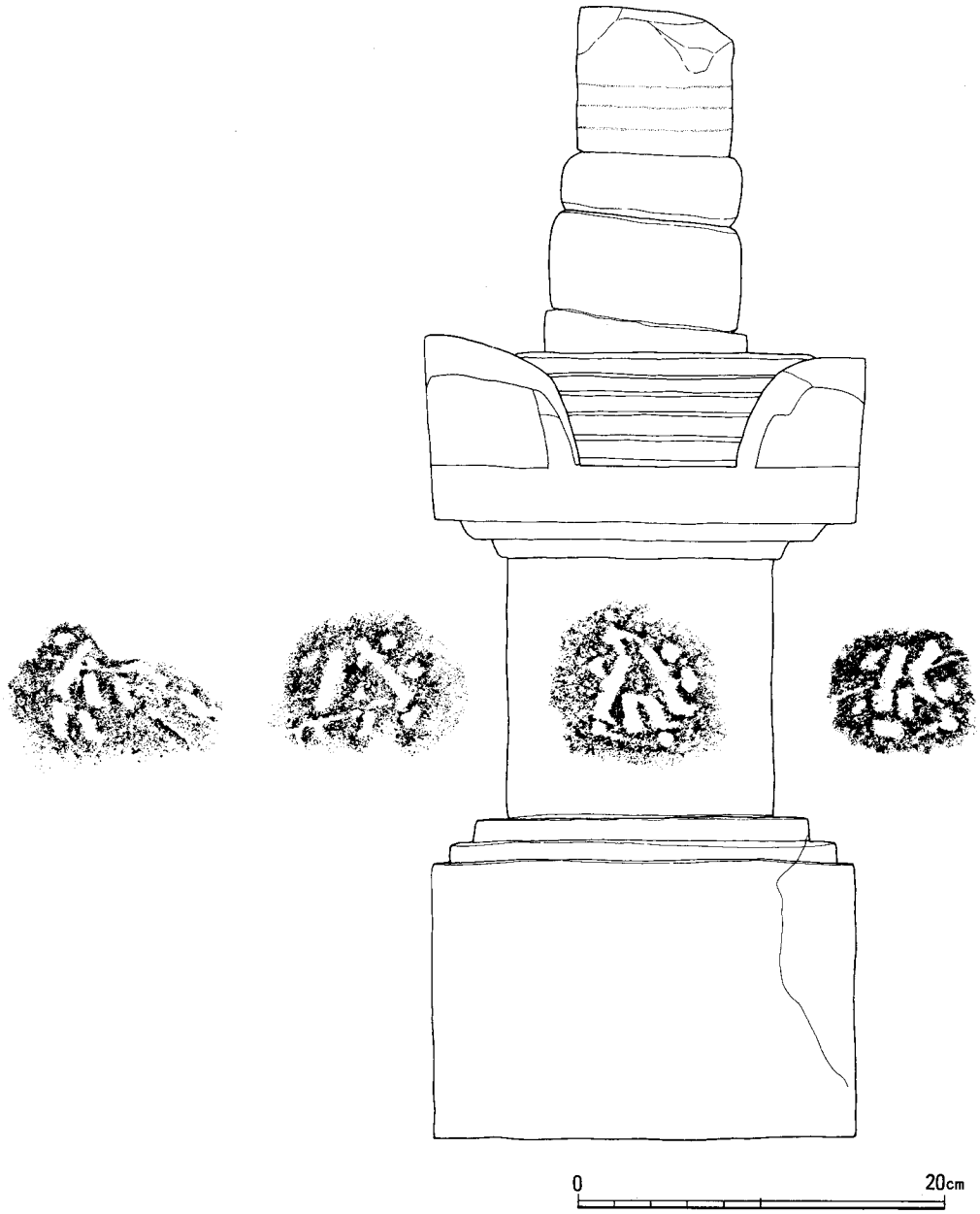


Fig.93　宝篋印塔実測図（1/4）

基礎は２段掘り出して塔身を載せている。幅23.0cm、高さ18.0cmを測る。

３）小結

石塔の時期は鎌倉～室町時代と考えられる。周辺にはこの石塔以外のものは見られなかった。この石塔が「立泉寺」と関連するものかは今後の調査に期待される。

Fig.94　宝篋印塔（南から）

Fig.95　宝篋印塔（南から）

Fig.96　宝篋印塔（西から）

第5章　まとめ

ここでは前章までに述べた分布調査、試掘調査の成果を総括してまとめとしたい。

能古島は島の北側から西側にかけて海岸部は急な崖で、現在も集落は見られない。居住、生産地で利用されているのは島の南側から東側にかけての海岸に面した緩斜面と島の頂上部の台地である。

島の北側では頂上部分、特に也良岬周辺で縄文時代～古代の遺物を採取した。島の北側にある也良岬は万葉集に登場する地名で防人の存在が推定される地域である。今回の調査では防人や烽跡に関連する遺構は確認することはできなかった。しかし、也良岬は博多湾が一望でき、平垣地や湧水地もあり、防人、烽の設置は大いに考えられる。今後の調査が期待される。

平安時代の牧に関連する遺構として「牛の水」と呼ばれる池を調査した。池は谷をせき止めて造ったもので、頂上部にある数少ない水源である。出土遺物が少ないため、不明確だが、平安時代まで遡る可能性は高い。この池を牧の施設の一つとするならば、周辺には牧の役人の居住地、繋飼場等の施設が予想される。

島の中央にある古土手は平安時代の牧との関連が考えられていたが、今回の調査で土塁の盛土から肥前系の陶磁器が検出され、構築の時期が近世まで下ることが分かった。能古島は近世期にも牧の経営が行われており、それらとの関連を考えたい。

島の中央から南側にかけての斜面では遺物の採取は少ない。遺物には黒曜石剝片等があるが、古代、中世の遺物は採取できなかった。この地域には平坦地が少なく、居住には適してない。ただ、斜面には古墳がいくつか見られる。早田古墳群は6～7世紀に築造されたもので現在2基残っている。周辺にはこれら以外の古墳も予想される。

島の東側から南側の海岸部の緩斜面では縄文時代～近世の遺物を多数採取した。特に島の南側の緩斜面は現在の集落の中心でもあり、遺物の分布も集中している。遺物には古くは縄文土器、弥生土器、黒曜石剝片等がある。しかし、量的には中世期の遺物が多く、中国製輸入陶磁器、国産陶磁器、土師器、瓦器等が採取できる。丘陵先端を中心にして当該期の生活遺構、墓、生産遺物の存在が予想される。

今回の調査は能古島の遺跡の範囲、性格を把握することを目的に行ったが、まだ不十分な点が多い。今回の調査で実感したことであるが、自然が多く残る能古島でも戦前、戦後の開発がかなり及んでいることである。それによって破壊された遺跡の多々ある。島の人達から聞く戦前、戦後の厳しい開墾はそれ自体、開発の歴史として意味深いものである。しかし、将来、都市化の波がこの島に及んだ時はその歴史さえも失うことになりかねない。そのようなことにならないよう歴史を守る努力をしていきたい。最後になったが、調査を支えてくれた塩屋勝利、高田茂廣、中山昭則、林田憲三諸氏に心からお礼申し上げます。

能古島採集の「神子柴型石斧」について

吉　留　秀　敏

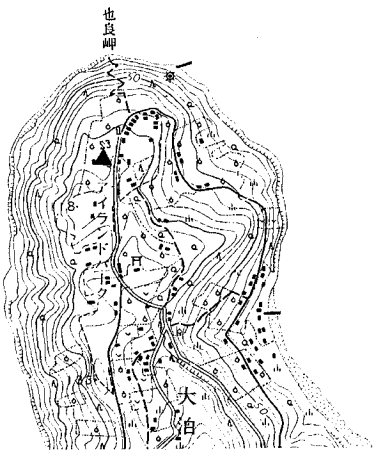
1．資料発見の経緯

本資料は1977、78年頃、原俊一氏（現在宗像市教育委員会勤務）が、本島を訪れた際、能古A遺跡群において表面採集したものである。その後、福岡市教育委員会の山崎純男氏が依託保管することとなり、さらに今回の調査を契機に吉留秀敏が実測し、紹介することになったものである。

2．資料報告

石斧は完形品であり、一部にひっかき傷がある。石材は割れ面がなく判断が困難であるが、安山岩等の緻密な火成岩と推定される。背面は自然面を大きく残す。腹面は主要剥離面が残り、縦長の剥片素材を打点を基部側に使用していることがわかる。

石斧の調整は縁辺部分のみに施され、素材の形状を大きく変形していない。全体に緩く湾曲し、中央付近の断面は略三角形に近い。背面の調整のうち、基部方向からの剥離は素材作出に先行する可能性がある。両側縁の調整は階段状剥離となっているものが多く、さらに側縁には入念に敲打を施し、稜線を失っている部分がある。腹面も階段状剥離が多いが部分的に解放剥離も見られる。



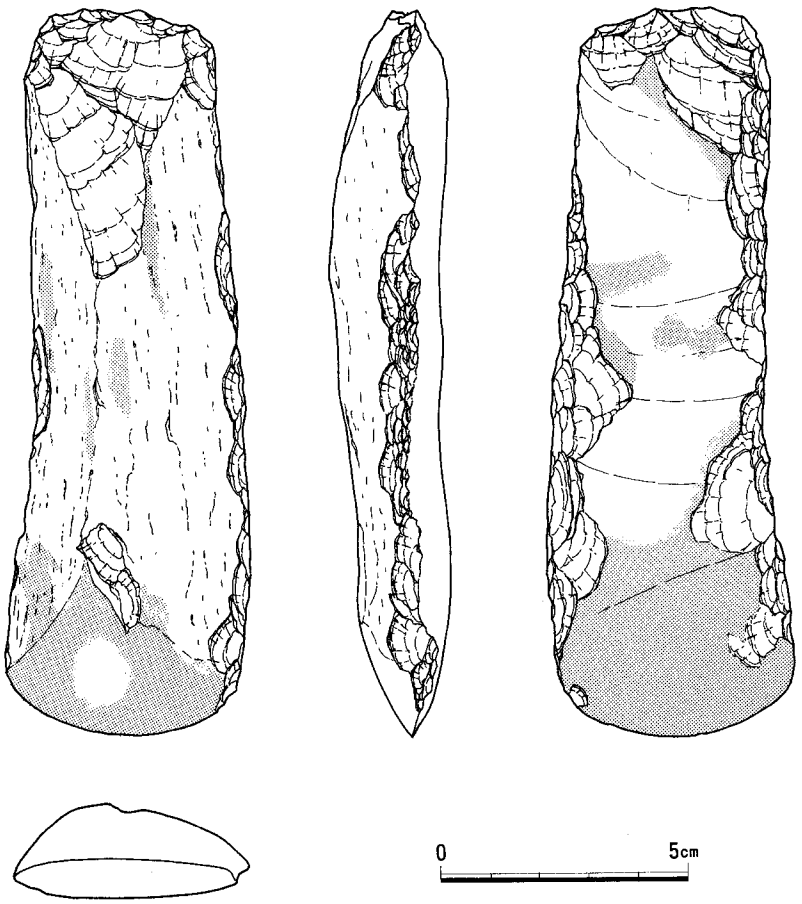
石斧採集地点（▲印の位置）

刃部は両側から研磨し、緩い「丸のみ」状の刃先を作り出している。研磨方向は不明である。また背面、腹面の一部にも部分的な研磨があるが、明瞭なものではない。

石斧の法量は長さ14.7cm、幅4.8cm、厚さ2.4cmを測る。

3．まとめ

「神子柴石斧」は、中部地方を中心に北海道から九州までの分布が知られている。旧石器時代終末期～縄文時代草創期に位置付けられている。横田義章氏によると、九州においてこの種石斧は細石刃石器文化に伴い、福岡県9遺跡12例、佐賀県3遺跡4例、大分県2遺跡4例、長



能古島採集の神子柴型石斧実測図（2/3）

崎県１遺跡１例など北部九州に多く知られている。本例はこれに追加される資料となろう。最近、錦貫俊一氏は「神子柴型石斧」を介して九州の細石器文化の位置付けを検討している。当該期研究の一層の活発化を期待したい。

本資料紹介にあたって、原俊一氏、山崎純男氏、山口譲治氏には多くのご教示、ご指導を頂いた記して感謝したい。

（参考文献）

横田義章「いわゆる神子柴型石斧の資料」「九州歴史資料館研究論集７」1981、九州歴史資料館

横田義章「いわゆる神子柴型石斧の資料（二）」「九州歴史資料館研究論集15」1990、九州歴史資料館

錦貫俊一「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」「古文化談叢28」1992、九州古文化研究会

能古島採集の神子柴型石斧

能古の歴史

高　田　茂　廣

1　はじめに

能古島は古く小さく美しい島である。しかも、かつて対外交渉の基地であり、朝鮮半島を前面にした港湾都市博多の沖にあって、約２千年間にわたる対外交渉の歴史的事実を見続けてきた島でもある。したがって日本史の縮図ともいえる事績を数多く有する島でもある。

しかし、島外の人から見れば悠久の自然と歴史を保存しているかのように見えるのであろう能古島にも、ここ数十年間にわたって近代化の波が押し寄せ、多くの有形無形の歴史的遺産及び地質学的遺産を消し去ったことも事実である。

今回、福岡市教育委員会によって島の考古学的調査がなされ、そのこと自体は島の住民にとっては有り難いことなのだが、もし、今回のような調査が50年ほど以前に行われていたならば数倍する成果があったであろうと多少とも残念である。

以下、能古島の歴史についての概略を述べるが、今までに能古の歴史について大きく言及した資料は次の通りであり、今回の執筆もそれらを参考とした部分が多い。

『筑前国続風土記』	貝原益軒著	元禄期
『筑前国続風土記付録』	加藤一純他著	寛政期
『筑前国続風土記拾遺』	青柳種信他著	文政期
『太宰管内誌』	伊藤常足著	天保12年
『福岡県地理全史』	福岡県	明治13年
『早良郡志』	早良郡役所	大正12年
『残島村史』	残島尋常高等小学校	大正11年（未発表）
『残島村史稿』	伊東尾四郎著	昭和16年（未発表）
『筑豊沿海誌』	筑豊水産組合	大正６年
『能古島物語』	高田茂廣著	昭和46年
『筑前五ヶ浦廻船』	高田茂廣著	昭和51年
『能古小学校百年誌』	能古小学校百周年記念誌委員会	昭和60年

2　能古の地名について

現在の島名である「ノコ」或いは「ノコノシマ」に「能古」或いは「能古島」の漢字が当て

られるようになったのは昭和16年に福岡市に合併したとき以来のことであるが、それ以前には色々の漢字が当てられてきた。その最も古いものは天平3年（731）の頃、「ノコ」が那珂郡住吉神社の所領であったことを示す『平安遺文』の中の次の文章における能護嶋である。

筑前国那珂郡住吉荒魂社三前

右社者撃熊龍二国新羅国時　遣唐使将御社祭太宰府例供也、并能護嶋為御厨所領（以下略）

ついで『万葉集巻十五』の遣新羅使の歌（天平8年）における「能許」がある。以後承和8年（847）における慈覚大師の『入唐求法巡礼行記』における「能挙」、『延喜式』（903－928）における「能巨」、『小右記』（982－1032）における「能古」、『八幡大菩薩愚童訓』（鎌倉後期）や鐵庵道生の『鈍鐵集』（1359）・絶海中津の『蕉堅稿』（室町初期）等における「野古」があるが、近世になると「残島」が一般的に使われるようになる。

ところで、この「ノコ」という語の意味が不明である。玄界灘一帯には「シカノシマ」・「アイノシマ」・「オロノシマ」・「カジメノオオシマ」・「ジノシマ」等と意味不明の島名を持つ島が多いが能古島同様古い地名なのであろう。なお、これらの島名には総て助詞の「ノ」が使われているが、太平洋岸の多くの島に城ケ島や鬼界が島などと「ガ」が使われているのときわめて対照的である。

能古の島名の由来について『筑前国続風土記』は次のように述べている。

能古島　能古浦名所也。或能解浦とかけり。今は残島と書。

朝野群載には那珂群とし、藻塩草には志摩郡とす。共にたがえり。此島は早良郡の正北にあり。那珂郡、志摩郡にはへたゝりぬれば、早良郡に属すべし。故にいまは早良郡とす。福岡より海上二里あり。島のめぐり二里二町十三間あり。東西十五町、南北三十町、高さ一町廿四間、満山芒を生す。村人是を刈販て家産とす。是を買者は屋のふきかやとし、薪とす。村中に白髭大明神の社あり。是住吉の明神也。村翁の説に神功皇后、異国より御帰朝の時此島に住吉の神霊を残し留めて異国降伏をいのり給ふ。よって残島と云といへり。（後略）

以上であるが、能古島が那珂郡、或は志摩郡に属していたことについて、貝原益軒が間違いであると断定していることには、多少の疑問を感じる。

3　古代の能古島

能古の田畑を歩くと多くの黒曜石の破片を拾うことが出来る。また現在のアイランドパークの「牛の水」付近からは、かつて大量の石斧類が出土したことがある。さらに山中では幾つかの古墳に出会うこともある。それらの詳しいことについては今回の調査の報告として述べられるであろうから省くが、素人の目から見ても古代も現代も人の住みやすい場所は同じであるこ

とを実感する。

これら考古学的なことは別として、文献や伝承における能古の古代史は大いにドラマチックである。

白鬚神社

考古学的遺物は能古における弥生以降の集落の存在を決定的にするのだが、古代日本の集落の精神的支柱として神の存在があったことは確かなことであろう。その神の宿る社として白鬚神社がある。

先年、白鬚神社の改築の際、関係者の了解を得て御神体を奉納した箱の裏側の文字を読ませてもらったが、深夜の懐中電灯に照らしだされた其の箱には、「白鬚の神が本の辻より古宮の地に移されしは白鳳元年なり」とあった。勿論後年になって書かれたものであろうが、「白鳳」とは九州年号であり大化元年（645）とされており、次に述べる防人の存在などからすると不可能な年代ではない。

伝承によると、白鬚神社のご神体はもともと能古山頂に近い本の辻に現存する巨岩であったということだが、これも古代信仰の根源的な姿であろう。白鬚神社が檀一雄邸のすぐ上にある古宮から現在地へいつ移転したかは不明であるが、『慶長検地帳』に既に古宮の地名の記載があり、中世のいずれかの段階で移転が行われたであろうことを示唆する。

先に述べた『筑前国続風土記』の記載にあるように、白鬚神社が住吉神であり、博多の住吉神社と深い関係を持っていたことからすると、能古の近世末までの在り方であった海運が、古代からの伝統であっただろうことを示唆するするものである。

也良の防人

『万葉集巻十六』に「筑前国の志賀の白水郎の歌十首」と題する歌があるが、その中に次の二首がある。

沖つ鳥鴨といふ舟の帰り来ば也良の防人早く告げこそ（3866）
沖津鳥鴨といふ舟は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞こえ来ぬかも（3867）

也良の崎とは能古島北端の地名であり、現在アイランドパークとなっている場所のことである。防人とは、何回となく朝鮮半島に出兵していた日本が、天智２年（663）に白村江の戦いに破れた結果、太宰府防備のために水城をはじめ玄界灘一体に置いた兵士のことであるが、その場所を特定できるのは『万葉集』による也良の崎だけである。防人は一ヶ所に約30人が置かれたが、同時に連絡のために大量の火を燃やし、煙で遠隔地に事を知らせる「烽」も置かれた。

先年、也良崎の玄界島から博多・太宰府まで見晴らせる場所から大量の消し炭が出土したことがあった。筆者はこれが烽の跡ではないかと思ったのだが、近世になって朝鮮通信使が玄界

沖を通過するとき、能古島で火を炊いたという記事が福岡藩の『朝鮮人来聘之記録』（福岡県立図書館蔵）のなかにあり、同じ場所であった可能性もある。

能巨嶋牛牧

約千年前に書かれた『延喜式』（延長５年－927年編）に「能巨嶋牛牧」の記述がある。時代的に云えば中世の頃に入れるべきなのであろうが、筆者としては、牛牧そのものの存在が防人と重なり、或いは防人と共に極端に云えば弥生時代まで遡るのではないかとさえ思えるのである。

牛牧の遺蹟である「牛の水」は也良崎の中に存在する。しかもそこからは大量の石斧が出土した。付近からは黒曜石の破片も収集することが出来る。現代の常識からすると人が日常生活をするには適さなかったであろう場所からの出土であってみれば、何らかの施設の存在を考えなければならないからである。

防人や牛牧の牧童たちの生活の場所は勤務の地から300mも離れた小川の付近ではなかったかと考えている。現在も４、５軒の集落があり、昭和になって大泊地区が開拓されたとき、最初に人家が出来た場所でもある。２軒目の永田氏の家が建てられたとき、数十個の礎石が出土したということであるが、残念ながら60数年前のことであり、確認することが出来ない。

牛牧の守護神である牧の神神社が也良崎のすぐ近くにある。これも初元は古代に遡るのではないかと思うのだが、現在の石祠は近世になって寛政11年（1799）猫岩窪に再建され、文化12年（1815）鉢ヶ窪に移転し、さらに大正には白鬚神社境内、昭和になって現在地と移転を繰り返しており、最初どこに建てられたかは不明である。

なお、牛牧はその後馬牧や鹿の狩り場などへと姿を変えながら近世末まで続くが、島内における牛馬数は圧倒的に牛が多く、昭和20年代まで続いた。

北浦城

能古の桟橋を降りて北浦へ向うその入り口の所に、小さな丘の岬があり「城」と呼ばれている。城というよりも砦といった方が正しいのではないかと思うのだが、堀切も残っている。おそらく伝承によるものであろうが、『筑前国続風土記拾遺』や『早良郡志』には是を築城した者として山上憶良と藤原純友の家臣伊賀寿太郎という者の２説を挙げている。

山上憶良の場合には防人や牛牧との関連が考えられ、伊賀寿太郎の場合には後世の海運との関連が考えられる。博多や太宰府を攻めた純友の乱は天慶２年（939）であるから両者の間には数百年の開きがあるが、ともあれ城跡は存在しているのである。

20年ほど前、城跡の畑の耕作をしていた人から「半鐘のような物が出土したので、小屋のなかにほおり込んでいる」という話を開き、「もしかしたら大変な物かもしれませんよ」といったら、その人は慌てて家に帰られたが、残念ながら既に無かったとのことであった。

4　中世の能古島

中世に関する能古の資料は残念ながら極めて少ない。しかし、わずかに残っている資料を総合すると、能古は港であり対外交渉の地でもある。特に刀伊の乱と元寇は、極めて短い期間ではあったが太平洋戦争以前において外国から占領されたという、日本でも数少ない悲惨な歴史を有するのである。

刀伊の乱

「刀伊」とは、朝鮮語で「ジョルチン族－女真族」を指す言葉である。『朝野群載』や『小右記』によれば、この刀伊が総勢3000人、50艘の船で北部九州を襲ったのは寛仁３年（1019）のことであった。対馬や壱岐で大虐殺を行い、能古に上陸したのは４月８日のことであったが、彼らが能古を去るのは４月11日だから３日間の被害ということになる。この内２日は海が荒れており、島内での掠奪を恣にしたであろうことが考えられる。『小右記』による能古の被害は次の通りであった。

能古島　人９人　女６人　童３人　駄44匹　牛21頭

人の被害の少なさは前もっての避難があったのだろうが、牛馬の被害ともなると早良郡全体の被害よりもはるかに多く、志摩郡の被害に匹敵する。

元寇

博多湾を中心に展開された文永・弘安の役は日本史最大の危機に直面した事件であり、鎌倉幕府を崩壊に至らしめた戦いでもあった。能古はその戦役の場の中心に位置した島である。博多湾沿岸に広がる元寇防塁は今にその歴史の跡を物語っているが、能古に関する関連の資料ともなると、防塁の一部に能古産の石が使用されているといったことだけである。元寇に関する地元の文書資料が皆無の状態であってみれば仕方の無いことであろうが、京都で書かれたという『八幡大菩薩愚童訓』によれば、弘安４年（1281）の襲来について、「蒙古大唐の舟は対馬には寄らず、壱岐の島に着。それより筥崎の前なる野古・志賀二の島にそ付にける。」

とあり、わずかに能古島上陸の史実を伝えるのだが、文永11年（1274）の場合も状況判断からすれば元軍の能古島上陸は当然考えられる。

明治の終わり頃、西の一角で散乱した状態での人骨が大量に出土したが、当時の人々はそれを元寇に関わるものとして丁重に葬り現在に至っている。

湊と寺

古代から防人や牛牧が置かれ、刀伊の入寇があったりしたのであれば、当然のことながら港としての機能も持っていたと考えるべきであり、能古の地名の項であげた慈覚大師の「博太の西南能挙嶋下に泊船す」もその例の一つであろうが、明確な資料として「戊子入明記」（大日本資料８巻）がある。それによると、文正元年（1466）の明への朝貢品の一つとして硫黄があり、

その保管場所は箱崎・志賀・野古であった。能古に保管された硫黄は１万斤であったという。この硫黄が保管された所、つまり港は能古の何処であったのであろうか。考えられるのは北浦と江の口のどちらかである。

確たる年代ははっきりしないが、おそらく元寇の直前くらいに博多聖福寺の16代住職であった鐵安道生（1262－1331）の詩集『鈍鐵集』の中に「博多八景」があり、その最後に「野古帰帆」と題した詩がある。訳すれば次の通りである。

野古帰帆

晩楼に目を極むれば水と天と寛く
雲影の収る辺に山影寒し
杳々と遙かに泛べる鳧雁かと疑いたるは
李花の一曲にて漁灘を過ぎぬ

詩の内容はともかくとして、題は能古に帆船と湊があった事が示すものである。

室町時代の五山文学を代表する絶海中津（1336－1405）の詩集『蕉堅稿』の中にも能古で詠じた詩がある。おそらく彼が中国へ渡る途中の詩ではないかと思われるが、次の通りである。

題野古島僧房壁

絶島一螺の砦　扁舟を数夜維ぐ
偶来る幽隠の地　老僧と共に期するに似たり
衲を脱いで松樹に掛け　茶を煎るに竹枝を焼く
重遊を定むは何時の日ぞ　別れに臨み嘆きて詩を題す

この詩も能古が港であったことを示すが、同時に寺が存在していたことも照明する。「慶長検地帳」によれば、近世初頭に能古には寺が三ヶ所在ったようである。この検地帳は現存しないが、『残島村史稿』（昭和16年）の中で伊東尾四郎氏は次のように述べている。

「検地帳に載せたる寺三あり。即ち、養油軒・立泉寺・神宮寺にして、其の居屋敷、即ち宅地面積、養油軒は三畝拾坪、立泉寺は二畝拾七坪、神宮寺は拾七坪なり。而して三寺共に田畠を多く所有せり。立泉寺のありし事は今の人は全く知らず。神宮寺は白髭神社の宮寺なり。（以下略）」

この三寺の内、神宮寺は永福寺と寺号を変えて現存し、養油軒は寛政四年（1792）の火事によって焼失し、江の口から西へと場所を変えて現在では観音堂となっている。立泉寺の場合は『筑前国続風土記付録』にも載せられておらず、何処が所在地であったか不明であるが、北浦

の山中に少しの湿地を含む屋敷跡らしい場所があり、その側には鎌倉末期まで遡れる宝篋印塔があることから、ここが立泉寺跡ではないかと考えており、絶海中津が立ち寄った寺もここではないかと考えられる。なお、能古には松の巨木が昭和30年代までは島内各地に数多くあり見事であったが、その後の松食虫や海岸の急激な浸食の被害で姿を消してしまった。

4　近世の能古島

近世の能古は「残島浦」として浦奉行の支配下にあった。浦とは主として海に生活の場を求める集落のことであり、軍事力としての水夫役22名を負担する場所でもあった。能古の場合は「漁業一切仕らず候」の浦であり、後で述べる五ヶ浦廻船の基地として海運業を専らとする浦であったが、島の南岸に点在する北浦・東・江の口・西の四集落の後背地には多少の田畠もあり、石高も400石と小さな村の石高よりは大きな生産高を持っていた。島を東西に分断するように築かれた「鹿垣」から北は古代から続いたであろう牧場であり、それも牛から馬へと変化し、近世末期には藩の鹿の狩り場として600頭ほどの鹿が生息し、藩主をはじめ秋月藩主や時には長崎のグラバーなども訪れるという社交の場でもあった。また、一時的に磁器の生産も行われ、幕末期には台場が置かれるなど、多種多様の生き方をした島であった。

五ヶ浦廻船

近世初頭から明治初頭までの間、能古・今津・浜崎・宮浦・唐泊の五つの浦に当時としては極めて大規模な廻船集団があり、「五ヶ浦廻船」と呼ばれた。

『五ヶ浦廻船方記録』によれば、最盛期の正保から享保年間にかけては最大艘数50余艘であり、一艘平均の石数も1300石を越えていた。この石数は当時の筑前の五ヶ浦以外の商船石数全部を合わせた石数をはるかに凌ぐ石数であり、全国的に見ても江戸・大坂に次ぐ数字である。この内、能古の船数は20艘を越えていたと考えられるが、衰退期に入っていた明和９年でも確認できる能古の廻船の総数は12艘であり、総石数16351石、１艘平均にしても1362石であった。当時、筑前の他の浦の商船の平均石数は50石－70石であった。

五ヶ浦廻船の活動範囲は全国に及び、北は北海道の石狩川河口や浦河から、太平洋岸の各地など、高知県・鹿児島県・宮崎県・沖縄県を除く海に隣接する府県の総てに及ぶ。

その積み荷の多くは筑前をはじめ東北・北陸諸藩、それに幕府の米や北海道・東北・北陸の材木であり、それらを江戸・大坂に運ぶのが主たるものであったが、このような仕事をするようになったのは、宮浦出身の筑前屋作右衛門が河村瑞軒のあとを継いで全国の廻船差配に就任したことによる。なお、筑前では廻船とは500石以上の船のことであり、五ヶ浦だけに許可された船であったのに対し、商船とは500以下の買積み船であった。

しかしながら、２百数十年の間には確認できただけでも２百艘を越える遭難があった。能古の村丸のルソン島への遭難をはじめ、ミンダナオへの漂着など４艘の外国への漂流の結果、浜

崎・今津の廻船は帰国の機会がありながら帰国しなかったという宗教的理由で壊滅し、能古の５艘をはじめとする12艘が鹿島灘沖で同時に遭難するなどのこともあり、福岡藩の低運賃や人的損失も原因して宝暦以降衰退への道をたどり、幕藩体制と密着していたこともあって、明治維新と共に完全に姿を消すのである。

これだけの海運集団が何時どのようにして発生したのかということになると不明であるが、五ヶ浦は中世末において既に松浦党的な性格を持つ集団であったと考えられ、黒田長政の筑前入国とともに其の支配下に入ったと考えるのが最も妥当のようである。黒田長政は福岡城の他、江戸城・名古屋城・大阪城の築城に関わり数百艘の石船を建造するが、福岡城築城のための石は能古・今津・唐泊から採取しており、築城が終了した元和以降の石船の平和利用として五ヶ浦に払い下げたのはではないかと考える。

鹿垣

能古に現存する遺蹟のなかで最も壮大なものは鹿垣である。猪垣や猪鹿垣とも書くが正式には猪鹿防土手と書く。通常「古土手」と呼ばれているものと「鹿垣」の二つが在る。古土手の方は小平谷付近を東西に数百メートル流れる石塁であるが、その成立等の記録は全く残っていない。鹿垣の方は早田付近を北浦の大瀬海岸から西の白鳥まで２キロ近くの距離を東西に渡って築かれた石塁である。記録によると完成は天保７年（1836）であるが、寛政10年（1798）に秋月藩主が鹿狩に訪れ、二日間で鹿170－180頭の鹿を捕った記録があることからすると鹿垣の工事そのものの始まりはそれ以前からであると考えるべきであろう。

能古焼

永福寺の裏山、能古博物館の敷地内に大きな窯跡がある。我々は勝手に能古焼窯跡と称しているが付近から出土する欠片の大半は磁器片である。『筑前国続風土記付録』によれば「明和の頃より此島にて陶器を製す」とあり、『同拾遺』には「いく程なく其事止みたり」とあるから、明和から寛政年間まで30年内外の間生産が続けられたと考えられる。なお、伝承によれば陶土としては同所の土を使い、釉薬は天草から運ばれたという。

近世において筑前で磁器が生産されたのは須恵と能古くらいのものであり、其の意味では貴重な遺蹟であるが、残念ながら現存する製品は１点しかない。

御台場跡

幕末の頃、福岡藩は博多湾を中心に幾つかの台場を築いたが其一つが能古島であった。『残島村史稿』には次のように書かれているが、伊東尾四郎氏は其の前半部分について何に依ったかを明記しておられない。

「文久元年（1861）福岡藩は海岸地方に砲台を築き、残島に於いては松尾（能古灯台の東側）にこれを築けり。総積三百三十六坪、砲台地二百五十六坪、火薬庫十一坪、番衛地二十九坪。

『福岡県地理全誌』に

砲台跡、北浦人家の北十町許り、巡田と云う所にあり。南北六間、東西四間許あり。文久元年酉新築、明治三年に廃す。」

以上であるが、能古の歴史の最初である防人と、近世最後の史実である台場が国防に関することであることは運命的でもある。この後、文久3年にはこの台場と志賀島の台場の間に、外国船の侵入を防ぐための筏が作られたが一度も使用されず、慶応2年には英国船による軍事訓練が行われ、能古の台場付近が標的となった。(『見聞略記』による)

5　能古の戸数と人口

現在、能古の集落は、西・江の口・東・北浦・大泊の5町内から成っているが、この内、大泊は昭和になって開拓が始まり成立した集落である。したがって近世までは前記の内の4集落で構成されていた。もっとも、中世の段階では北浦と江の口の2集落であったのが江の口の膨張により東と西に分離していったと考えられるのだが、これは推論にすぎない。

戸数についての正確な数字の記録として『筑前国続風土記』の次の文言がある。

「残島、民家七十九戸、神社、寺院あり」

ところが、この記録とほぼ同時期と考えられる宝永4年（1707）の『福岡藩町郡浦御用帳』によると、北浦が火事になり、25戸が焼けている。この25戸が北浦の全戸数であったとすると、西・江の口・東の戸数は54戸であったということになる。

寛政4年（1792）になると、今度は西・江の口・東が火事になり106戸が焼ける。このとき、東の3戸が焼け残ったというから、西・江の口・東の戸数は109戸であったということになるのだが、北浦の戸数が30戸内外であったとして、140戸程度が寛政年間の戸数であったと推定できる。先の数字と比較するとほぼ倍増の数字であるが、北浦の場合は地形の制約もあり、現在でも約30戸である。この倍増の数字は、他の村浦が享保の大飢饉によって人口と戸数を大きく減少させたのと対照的な数字でもある。能古は海運の島として飢饉の被害を免れた数少ない場所であった。

天保12年（1841）になると戸数に加えて人口もはじめて記録として登場する。「書上」によると次の通りである。

残島

一　家数　百拾六軒　枝浦共

　　内　七拾弐軒　農人

　　四拾七軒　廻船乗

　　三軒　　商人

一　人数　四百三拾三人

　　内　男弐百拾六人

女弐百拾七人

戸数の場合、寛政の数字と比べて20数戸の減少であるが、これは海運業の衰退と大きくかかわっていると考えられ、この時点で既に廻船業の農業と逆転がみられる。人口も１戸平均で3.73と少ないが、これは当時の筑前における浦の平均的数字であり、多くの農村の場合でも４人を少し越えた数が普通であった。

6　終わりに

以上、能古島の歴史についての近世までを述べてきたが、枚数の制限もあり、残念ながら詳しい記述をすることが出来なかった。したがって、島に残る遺蹟と関連する事項を中心として話を進めたが、能古の歴史の概略は書いたつもりである。

明治以降、能古は農業と漁業の島へと変貌を遂げる。かつての廻船業の時代と比べて遭難による多数の死者を出すなどの悲惨は無くなり、平和な時代をむかえたが、同時に大きな産業を持たない貧乏な島へと転落の時代でもあった。現職の村長が移民としてブラジルへ渡るといったこともあった。昭和16年には福岡市に合併し、太平洋戦争時代の末期には北浦に特攻隊の基地としての工事が始まろうとしたが、これは終戦と同時に頓挫した。

戦後は大泊の急激な開墾が始まり、昭和27年にはランプの生活に別れをつげて電灯がともった。数年後には永年悩まされ続けた水不足から開放される水道も海底ケーブルによって設置された。そして、ここ10数年は観光化の波が押し寄せた。このようなことは島に住む者の生活を便利にはしたが、其の結果多くの遺蹟も破壊された。

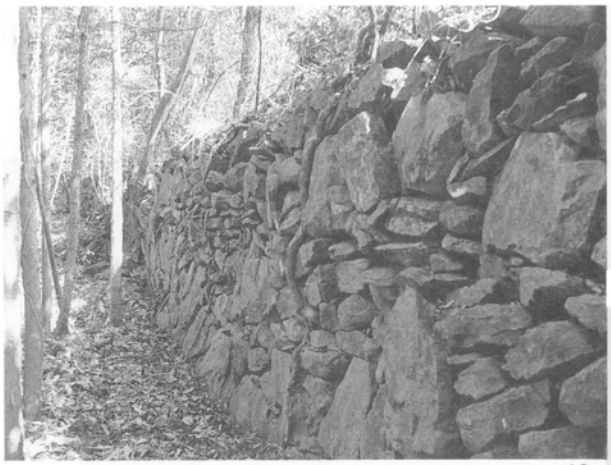
現在、能古は観光の島として年間数十万の観光客が訪れる島である。しかし、昭和30年代には1500人もあった人口が1000人に減少し、過疎化への道を進めている島でもある。能古に住む者の多くはどう対応したらよいか真剣な模索の最中であるが、少なくともこれ以上の歴史と自然の破壊だけはしたくないというのが大半の意見である。

そういう意味で、今回の調査の結果を、島民の多くが見つめ、期待し、感謝していることを付記して拙稿を終える。

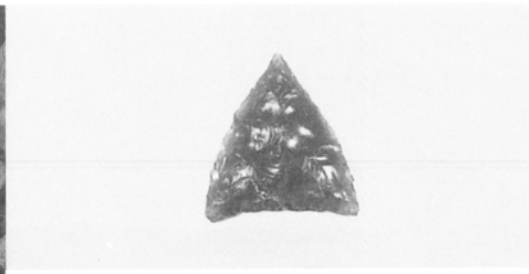
也良岬（南から、奥は志賀島）

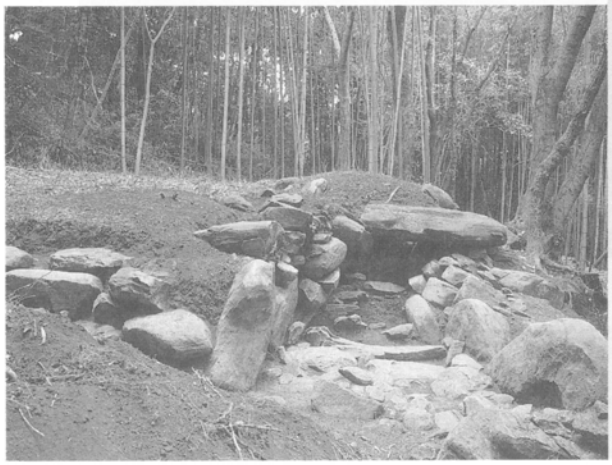
万葉歌碑

沖つ鳥
鴨とふ船の
還り来ば
也良の崎守
早く告げこそ
（万葉集巻十六、三八六六）

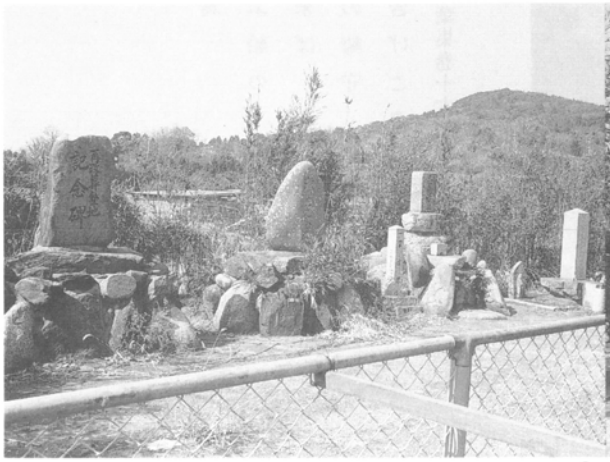


10





9



8

7

2

3

1．也良岬出土の石鏃

2．牛の水の土塁

3．牧の神神社

4．北浦城跡（北西から）

5．能古焼窯跡

6．永福寺箱式石棺墓

7．白鬚神社

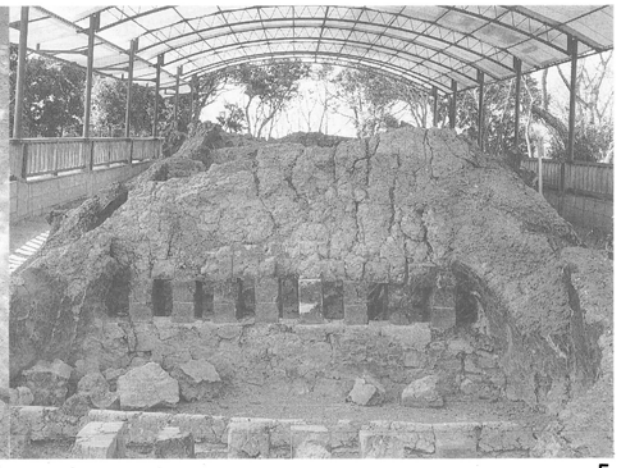
8．蒙 古 塚

9．早田古墳２号墳

10．鹿　垣

4

6



5

博多湾海底出土遺物とその意義

林　田　憲　三

はじめに

本稿は、これ迄に確認されている博多湾海底出土遺物を整理し、考古学的資料として遺構から遊離して、引き揚げられた遺物を再び人類の海へ諸活動の足跡として考古学的再評価を与え、その意義を再構築することである。歴史の進歩のなかで博多湾が人間による陸地化政策で犠牲となっても、人類の海の諸活動を証明する海底出土遺物の歴史的復元を怠ることはできない。人間の歴史の証明は陸だけにあるのではなく、海底にも存在している事を試みるものである。

1．博多湾の地理的環境

博多湾は玄海灘に面し、東西17km、南北５kmの天然の良港となっている。この博多湾には玄界島、能古島と陸繋島の志賀島といった島々がある。この博多湾の島々の地理的環境をさらに詳しく観ていくと、博多湾は西北に開き、湾の入り口には玄界島が浮かぶ。この島は東西0.6km、南北１km、周囲４kmで、海抜218mの最高頂点からの摺鉢状した島の急傾斜面を耕地として利用するには不適当な所である。能古島は北緯33°37′03″３、東経130°18′21″０に位置し、更に博多湾内のほぼ中央に位置している島であることがわかる。北には約2.4km隔てて、「漢委奴国王」金印が出土した志賀島の叶の崎を望むことができる。南は約1.4kmの最短距離で陸地に達する。東西２km、南北3.5km、周囲10km、面積3.96km²、最高頂点は標高195mになり、島のほぼ中央部にあたる。島の南半分の地域は北に比べて、東西にやや広がりをもつ地形をなし、比較的なだらかな斜面には畑や水田が開墾されている。一方北半分は東西が約１kmと狭まり、そのため地形は険しく、急角度の傾斜面が南側を除いて東西両方向と北側にある。志賀島は外海の玄界灘と内海の博多湾を隔てる海の中道海岸砂丘が西方に延びた先端部にあって、東西２km、南北3.14km、周囲８kmあり、最高頂点の標高が175mで、島のほぼ中央より東の弥五郎山にある。これらの島々に囲まれるように博多湾を形成する。この博多湾を舞台にして古代から人間の歴史が繰り広げられてきた。

2．博多湾海底出土遺物について

博多湾海底から出土した遺物の正確な位置は水中考古学の調査例が数少ないために、僅かな例（塩屋、1988(a)）を除いて、ほとんどの場合考古学過程を踏まずに引き上げられた偶然の発

見である。そのような理由から海底遺物の出土地点や考古学的出土状況を正確に把握することは殆どの場合不可能である。これ迄博多湾で出土した遺物（Fig. 6）の多くは博多港に集中している。とくにFigs.1～5に見られる海底遺物は昭和7年（1932）に中央埠頭西方200m、水深5mの海底から内務省の修築浚渫工事にともなって出土したものである。これらの遺物は現在九州大学考古学研究室所蔵である。Fig. 1：1は土師器の杯で外底部は回転糸切りと板状圧痕をのこす。器面は海底環境に長い間、全く影響されていなかったかのように思えるほど、明るい灰黄褐色の色調を残している。口径15cm、器高2.9cm。2・3は龍泉窯系青磁の皿である。4は天目碗である。胎土は灰色で、暗オリーブ色の釉を施す。またこの他に黒褐釉を施した天目碗で、外底に「張綱」の墨書をもつものがある。5は龍泉窯系青磁碗で外面に片切り彫の蓮弁文を施す。6は褐釉陶器の短頸の壷で、体部下位にはヘラ削りが行なわれている。7～9は四耳壷である。Fig. 2は銅銭である。浚渫時に600枚が出土したが、現在は僅か28枚が残る。Fig. 3は近世陶器である。1～4は把手付の瓶。5は水差し。6は碗。7～9は花瓶である。博多湾で出土した海底遺物はその出土地点あるいは海域から、地域的な出土傾向を窺うことができる。博多湾の入り口に位置する玄界島周辺海域での海底遺物の幾つかの出土例がみられる。この島の周辺海底質は岩礁であるため海士による潜水漁が以前から行なわれ、その結果海士達により海底遺物の存在が明らかとなり、引き揚げられた遺物が注目されるに至った。このような経緯を踏まえて、遺物の分布調査が旧福岡市歴史資料館により島の南西部のタケノシリ、ミズノシタ海岸の沖合100m以内の水深3～8mの海底で行なわれ、その結果龍泉窯系青磁碗、皿、杯、摺鉢、壷、鉢、近世染付壷や土錘を含め197点が出土した（塩屋、1988(a)）。更に同じ沖合500m、水深15mの貝殻混じり砂質の海底で姪の浜の漁師の底引き網漁により龍泉窯系青磁碗が出土している。また島の東南沖合600m、水深15～16mの貝殻混じりの砂質の海底からは白磁碗が同じく引き揚げられている。玄界島の南西には大机島、小机島があり、これらの島々の周辺は岩礁底質であり、干潮時には岩礁の露出する浅い海域がある。この海域と相対する糸島半島の間は狭まり、潮流もあり、水深も浅い。この狭い海域の海底は概ね貝殻混じりの砂質であるが、一部の海底には礫の底質がみられる。この地点を熟知すれば底引き網漁が可能であるため、ここでは口縁部に玉縁をもつ白磁碗が網により引き揚げられている。

糸島半島の海域では福岡市西区唐泊の岬を北へ回り込だ唐泊小フケ後浜海岸、あるいは後浜田代の落水の海岸から沖合100m、水深3～5mの海底で砂利採集中に出土した全長85.2cm、最大幅13cmの広形銅矛（渡辺、1963）がある。弥生土器片と須恵器甕の破片が同砂利採集時に出土したことも報告されている。更に碇石1点（全長224cm、重量227kg、石英班岩。福岡市埋蔵文化財センター所蔵）が沖合200m、水深6mの海底から砂利採集時に引き揚げられている。

博多湾入り口のほぼ中央に位置する玄界島、この島と約5km東に離れた志賀島との間の海域は水深が20m以下の貝殻混じりの砂あるいは粗砂の底質であり、底引き網漁には適した地域であ

るために、これ迄にも海底遺物が偶然に引き揚げられた可能性がある。その海底遺物の１点が姪の浜の漁師によって砂岩製の片口の摺鉢（Fig. 6）が出土している。摺鉢の口縁部には対称的に小さな把手が二ケ所に付く。

志賀島は島の北端から北西へ沖合2.2kmにわたる海域は岩礁や浅瀬が続き、干潮時には露頭する岩が多く見られる地域である。このためこの海域では難破船が絶えなかった。近世において

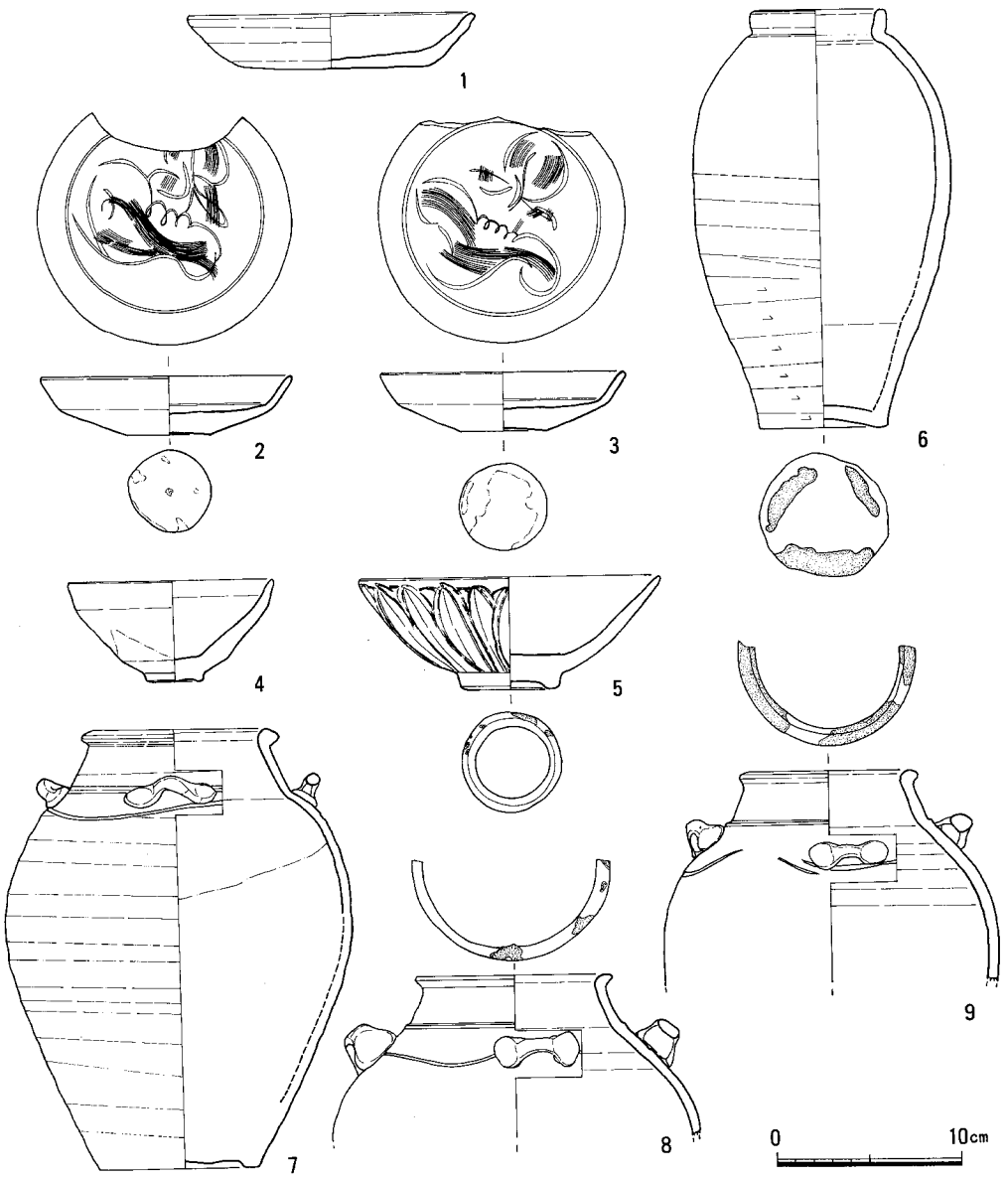


Fig. 1　博多港海底出土遺物実測図（1/4）

出土銅銭一覧

No.	貨銭名	時代	初	鋳	No.	貨銭名	時代	初	鋳
1	開元通寶	唐	武 徳 四 年	621年	15	皇宋通寶	北宋	寶 元 二 年	1039年
2・3	軋重元寶	唐	乾 元 元 年	758年	16	至和元寶	北宋	至 和 元 年	1054年
4	宋通元寶	北宋	興 国 二 年	968年	17	至和通寶	北宋	至 和 元 年	1054年
5	太平通寶	北宋	太平興国元年	976年	18	嘉祐元寶	北宋	嘉 祐 元 年	1056年
6	淳化元寶	北宋	淳 化 元 年	990年	19	治平元寶	北宋	治 平 元 年	1064年
7・8	至道元寶	北宋	至 道 元 年	995年	20	元豊通寶	北宋	元 豊 元 年	1078年
9	祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008年	21	元祐通寶	北宋	元 祐 元 年	1086年
10	天禧通寶	北宋	天 禧 年 間	1017～1021年	22・23	紹聖元寶	北宋	紹 聖 元 年	1094年
11	天聖元寶	北宋	天 聖 元 年	1023年	24	聖宋元寶	北宋	建中靖国元年	1101年
12・13	明道元寶	北宋	明 道 元 年	1032年	25・26	政和通寶	北宋	政 和 元 年	1111年
14	景祐元寶	北宋	景 祐 元 年	1034年	27・28	宣和通寶	北宋	宣 和 元 年	1119年

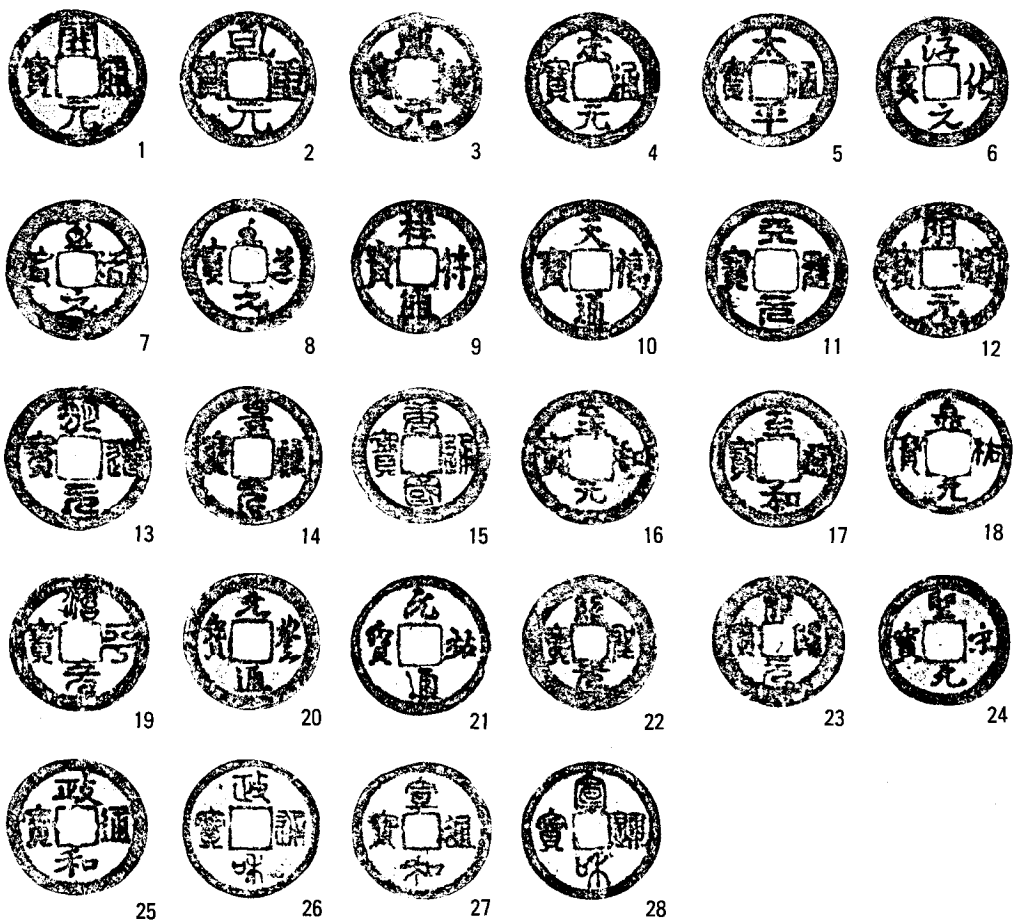


Fig. 2　博多港海底出土銅銭拓本（3/4）

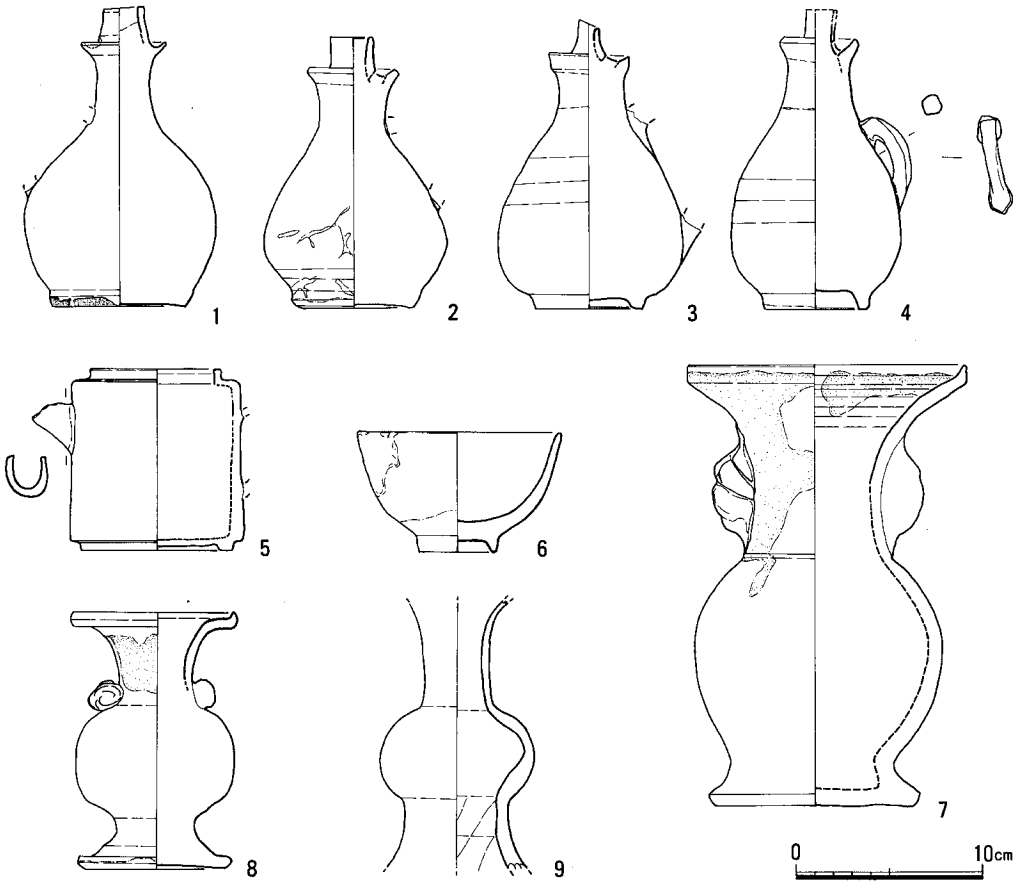


Fig. 3　博多港海底出土遺物実測図（1/4）

も「築前五ケ浦廻船」の船が遭難している（高田、1991）。志賀島西岸の蒙古塚のある岬から南西の沖合100mの岩礁から細砂質の海底に変わる地点で引き揚げられた小型碇石２点（陸上自衛隊福岡駐屯地資料館所蔵）がある。全長が共に90cmを僅かにしたまわり、重量も30kg以下である。凝灰質砂岩で造られた完形の碇石である。

海の中道の博多湾に面して西戸崎がある。ここから東沖合1000m付近、水深４mの貝殻混じりの泥質の海底で赤貝を採るため、漁に用いた爪の付いた底引き網に石炭と一緒に架かり、引き上げられたのが海獣葡萄鏡（Fig. 6）である。表面の磨滅が著しく、海底で原位置を止めることなく潮流の影響を受けながら移動していたと考えられる。この鏡は中国唐時代のものであり、鏡による当時の日本国内の社会的、宗教的側面からの役割を考慮する必要がある海底出土遺物である。この鏡は全体の１／３が欠損しているが、漁師から当時の引き揚げる迄の状況を聞いて判断すると、完形であった可能性が高い。

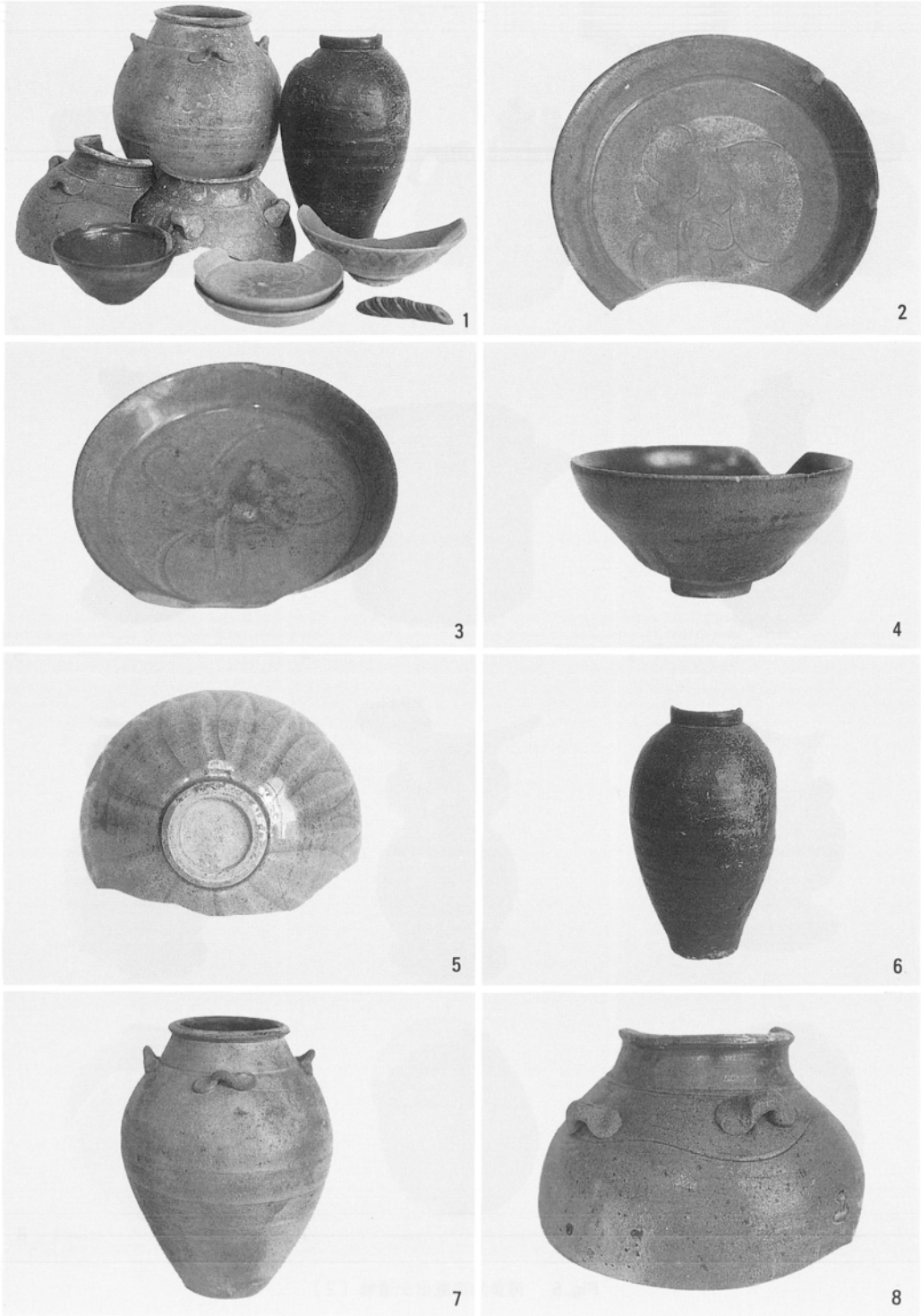


Fig. 4　博多港海底出土遺物（1）

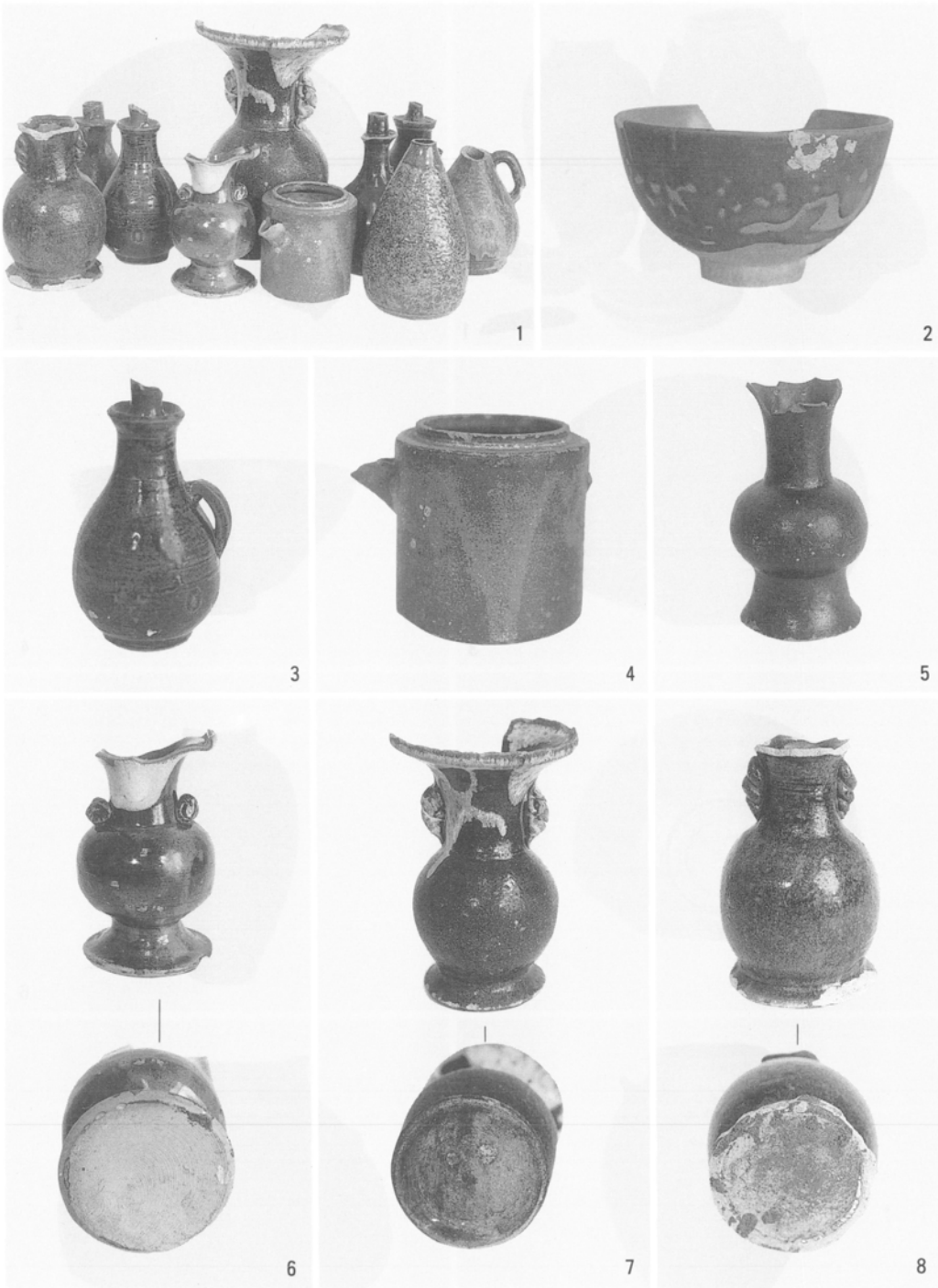


Fig. 5　博多港海底出土遺物（2）

能古島の東沖合1.7㎞、水深12～13mの泥質の海底で底引き網に架かり、引き揚げられたものが銀製の水注(Fig. 6)である。注ぎ口と把手が付き、更にリングが肩部に注ぎ口を挟んで二ケ所にある。恐らく宋時代のものと考える。

3．碇石出土と海上交通

博多湾から出土する碇石については資料の検討及び比較研究（柳田、1987、1988）がある。それによると博多港中央埠頭西方200m、水深5mの海底から5点の碇石が昭和7年（1932）に浚渫工事に伴い引き揚げられた。その内の1点は（Fig. 6)で他の中国陶磁器と共にみられる。更に第二次世界大戦前迄に多くの碇石が発見され、博多港海底から出土した碇石は既に17点にも達している。これらが中央埠頭周辺海底で発見されている事実は、博多湾全海域で出土した碇石の分布を見ると、いかに博多港付近に碇石が集中しているかがわかる。これは中世博多の港がこの付近に存在したことと一致する。更に「博多遺跡群」での緊急調査や開発工事に伴って出土した碇石を含めれば、更にその点数は増加する。呉服町のビル工事、都市高速道路橋脚工事で発見された碇石(Fig. 6)は標高－1～0.5m付近で出土している。満潮時には海面下になる場所である。また冷泉小学校出土の碇石などは旧海岸線を復元する資料を提供すると共に、「博多古図」にある“袖之湊”や“冷泉津”を考えるうえで興味深い資料である。博多港以外では、碇石の存在が西区の唐泊と志賀島の西側海岸沖にある。特に型式的に博多港出土のものに類似している唐泊の碇石は広形銅矛、弥生土器や須恵器といった時期の異なる遺物と共に出土している。この碇石は沈船と関係なく、停泊のため碇を下ろしたか、あるいはしけの為に船を安全に制御する必要から海底に碇をうって船が漂流するのを防ぐ。そのために使用された後に、海底に置き去りにされた碇石と考えることもできる。船には複数の碇石を積んで航海することはごく当たり前のことである。地中海で発見された沈船の発掘調査からも知られている。

船の大きさは碇石の規模によって求められる。コランシーによって採用された方程式をここで用いるならば、それにより排水トンとして船の大きさが決定する。それは次のような方程式により求めることができる。

$$G = 9\,D^{\frac{2}{3}} \qquad G = \text{碇石の重量kg} \qquad D = \text{排水}^{\text{ト}\nu}$$

Kolunshi, L., 1954, Principle and Structure of Marine Transport

博多湾出土の碇石の多くは250～350kgにおさまる。例外は呉服町ビルや都市高速橋脚から出土した碇石で約600kgにもなると考えられる。規模の小さなものは中央埠頭の水深5mの海底から中国陶磁器類を伴って出土した碇石（Fig. 6）で190kgである。250～350kgの碇石を使った船は約150～250$^{\text{ト}\nu}$になる。また600kgにもなる碇石は500$^{\text{ト}\nu}$クラスの大型の船である。190kgの碇石では100$^{\text{ト}\nu}$以下の小型の船に相当するであろう。

博多湾出土の碇石と最近中国福建省泉州湾で出土した碇石3点を比較すると、これらの形は

概ね博多湾出土の碇石と類以する。しかし大きな違いは泉州湾出土の碇石はすべて四面の角が面取りされている。また碇石の中央部から両先端部にいくにしたがって、幅に比べて、著しく厚みが減少する。泉州湾出土の碇石のNo.1.は重量が237.5kgである。この碇石を使用できる船は約140ﾄﾝの排水量をもつ船である。またNo.2.の碇石は重量が385kgである。これは約280ﾄﾝクラスの排水量をもつ船である。No.3.は約150ﾄﾝクラスの船である。

中国福建省泉州湾出土の碇石一覧

No.	出土地	全長m	重量kg	碇軸着装部幅cm	固定溝幅x深cm	中央部幅x厚cm	先端部幅x厚cm	石　材	遺存状態	出土年月
1	法石村	2.32	237.5	16	6x1	29x17	21x9.6	花崗岩	完形	1975
2	浔吴村	2.88	385	13.5	6x1	34x21.5	……	花崗岩	完形	1988
3	浔吴村	2.26	250	21	5.5x1.5	34x20	……	花崗岩	完形	1988

4．海底出土遺物とその意義

博多湾海底からの出土遺物を水中考古学として捉えるなら、先ず出土遺物のcontextを分類する必要がある。水中遺跡の分類は（石原、1982）により既に行なわれている。この分類の定義に従って博多湾海底遺物の出土状況をながめると、(b)あるいは(c)に属するものとなる。もし(b)であるならば当然船が大きく関わっていることになる。そのことから船とその積載品としての博多港の海底遺物を検討することにする。昭和7年の博多港浚渫工事による出土遺物から船体とその積載品として海底遺物の出土状況を評価するならば、まず積載品については遺物とその年代で以下の2グループに分類できる。(1)土師器を含む中国陶磁器類と銅銭、(2)高取焼を含む近世陶器類である。更にこの時に出土した碇石5点は、決して(2)の近世陶磁器類を積載品とした船に伴うものではなく、(1)の中国陶磁器類と銅銭を積載した船に属したものである。碇石5点が全てこの一隻の船のものである必要はない。何故ならばこの付近には“袖之湊”があり、船の出入りが頻繁にあるからである。良好な港湾施設が発達していなかった当時であれば繋留や沖合に停泊中には碇をおろすのは当然である。海底からの碇の出土は決して不思議なことではない。但し積載品を伴っている事が問題なのである。出土遺物の状況を「常識」に把握するならば沈没船が海底にあると判断できる。船が港内で事故や自然災害で沈没することは現代でも頻繁にある。地中海、カリブ海や中国では古代、中世或いは近世の港の海底で沈没船の船体や積載品が毎年のように調査報告されていることからも、船にとって港がいちばん安全な場所でないことも理解できる。

玄界島周辺から海底遺物の出土例が増加している。この付近の海域の航行には危険が伴う。糸島半島との間は狭まり、中央に位置する大机島・小机島海域の浅瀬や潮の流れが安全な航行を妨げる。この海域の出土遺物はそれ故に、航海安全のための人間の知恵や活動。あるいは不運にも自然に翻弄された結果を反映している。糸島半島の唐泊海底出土の遺物では碇石が広形

銅矛、弥生土器や須恵器といった時期の異なる遺物と共に出土している。ここは海底における所謂複合遺跡といえる。注目すべきことは出土遺物の数量が少ないのに比べて時期幅があることである。この地が古代から遣唐使時代、さらに日宋時代と長い間、博多から玄界灘の壱岐・対馬、あるいは五島列島、さらに朝鮮半島や中国大陸への航路の東端に位置し、風や潮待ちのために停泊したり、あるいはしけを避けるために利用された港であったとみることができる。これらの海底出土遺物の中には自然現象への恐れや敬意のために祭祀的性格をもったシンボルとして利用されたものもあるであろう。唐泊海底出土の広形銅矛は壱岐・対馬と奴国との交易関係を示すものとして見做すべきであろう。

5．博多湾と水中考古学

今日まで我々の目に留まる博多湾海底から出土した文化財は「玄界島の海底陶磁」(塩屋、1988(a)) の一例を除いて、科学的な調査、所謂考古学的方法・過程にもとずいて出土したものではない。出土した遺物の殆どは海底の砂利採集、人工島あるいは埋め立てによる工事、海底浚渫作業、底引き網漁等によって偶然に発見された遺物である。しかし博多湾海底からこれ迄発見された遺物の銅矛、鏡、碇石、中国陶磁器、近世陶磁器等が過去の出来事を知る手掛かりとしての考古資料を提供している。これらの海底遺物に対しての紹介や研究、更に歴史的意義などについて、これ迄の研究は数例を除いて決して多くない。(柳田、1987、1988；塩屋、1991；石原、1993) また中山平次郎による博多湾沿岸を考古学領域からの総合的な研究（中山、1984）は博多湾の水中考古学の必要性を提起しているように思える。更に国内でも水中考古学の必要性がこれ迄にも言われてきている（荒木、1980、1983、1985；小江、1975、1982；石原、1982、1993；高野、1992；)。博多湾海底出土遺物は“海から陸、陸から海”と人類の動きを証明する考古資料である。しかるに考古資料としての遺物はつまり“水中”から遊離した考古学的出土状況では理解できないであろう。海底出土遺物の全てがしかし海上活動をつよく反映しているものではない。何故なら海底に沈んだ陸上遺跡も数多く存在するからである。しかし最も良く海上活動を示すのが“船”であると考える。この“船”を考古学的に陸上の遺跡或いは、遺構として捉える必要がある。この場合、遺跡或いは遺構とは要素（element）の集合構成である。要素とは例えば船体、碇石、容器(壷＝アンフォラ)などであり、その要素は組織(composition)の集合体である。この場合の組織とは、船体では船の設計、構造、材料などであり、それぞれの組織を形にするのはその時代を反映する工人の技術（technique）である。これらを総合的に検討することによってテーマである“船”が水中考古学の専門的学問の領域で扱われる必然性が存在するのではないだろうか。

おわりに

博多湾海底を含む日本近海や湖沼には水底遺跡が数多く残されている(西谷、1992)。これら遺跡に科学的調査が行なわれ、さらに水中の文化遺産保護（田中、1989）が早急に実現しなければならない。同時に文化遺産を破壊から守る使命のあることを忘れてはならない。

今回、本稿を草するにあたり多くの諸先生、諸氏及び研究機関から貴重な御教示並びに御協力を賜わった。また、資料収拾及び調査に際しては多くの便宜を以下の方々にお計らい頂いた。文末ではあるが厚く感謝の意を表します。西谷正教授、中園聡助手、池崎譲二、石原渉、塩屋勝利、菅波正人、高野晋司、英豪之、松田好喜、柳田純孝、九州大学文学部考古学研究室、福岡市博物館、福岡市立埋蔵文化財センター

最後に、ここに載せたあらゆる内容に関しての誤りは全て私しに帰するものである。

参考文献

荒木伸介　1980　「こうして沈船を探る－水中考古学の方法と実際」ラメール、第25号　日本海事広報協会
1983　「元寇と考古学」考古学ジャーナル、№226
1985　「水中考古学」ニュー・サイエンス社
石原　渉　1982　「日本における水底遺跡研究と水中考古学」駿台史学、第57号
1993　「博多湾の水中考古学」ふるさとの自然と歴史、第237号
小江慶雄　1975　「琵琶湖水底の謎」講談社現代新書
1982　「水中考古学入門」NHKブックス
亀井明徳　1986　「日本貿易陶磁史の研究」同朋舎
塩屋勝利　1988(a)「玄界島の海底陶磁」福岡市歴史資料館研究報告、第12集
1988(b)「船で運ばれた品々」古代の船－今甦る海へのメッセージ－　市制100周年記念特設展図録、福岡市歴史資料館
1991　「博多湾の水中考古学」NEWSLETTER、第１巻、第２号
下村　智　1991　「博多18」福岡市埋蔵文化財調査報告書、第246集
高田茂廣　1989　「築前五ケ浦廻船の諸記録」福岡市歴史資料館研究報告、第13集
1991　「五ケ浦廻船とその遭難」NEWSLETTER、第１巻、第３／４号
高野晋司編1992　「鷹島海底遺跡」長崎県鷹島町教育委員会
田中　琢　1989　「水底の文化遺産と文化財保護法」世界水中連盟総会名古屋大会
中山平次郎1984　「古代乃博多」岡崎敬校訂　九州大学出版会
西谷　正編1992　「鷹島海底における元寇関係遺跡の調査・研究・保存方法に関する基礎的研究」平成元年～三年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書
柳田純孝　1987　「福岡市の文化財」－考古資料－　福岡市教育委員会
1988　「海から出土した碇石」よみがえる中世１　平凡社
渡辺正気　1963　「福岡市唐泊海底新発見の銅矛」九州考古学、第17巻
Qin Zhang Yang, 1990 “South-Song stone anchors in China, Korea and Japan,” IJNA 19.2

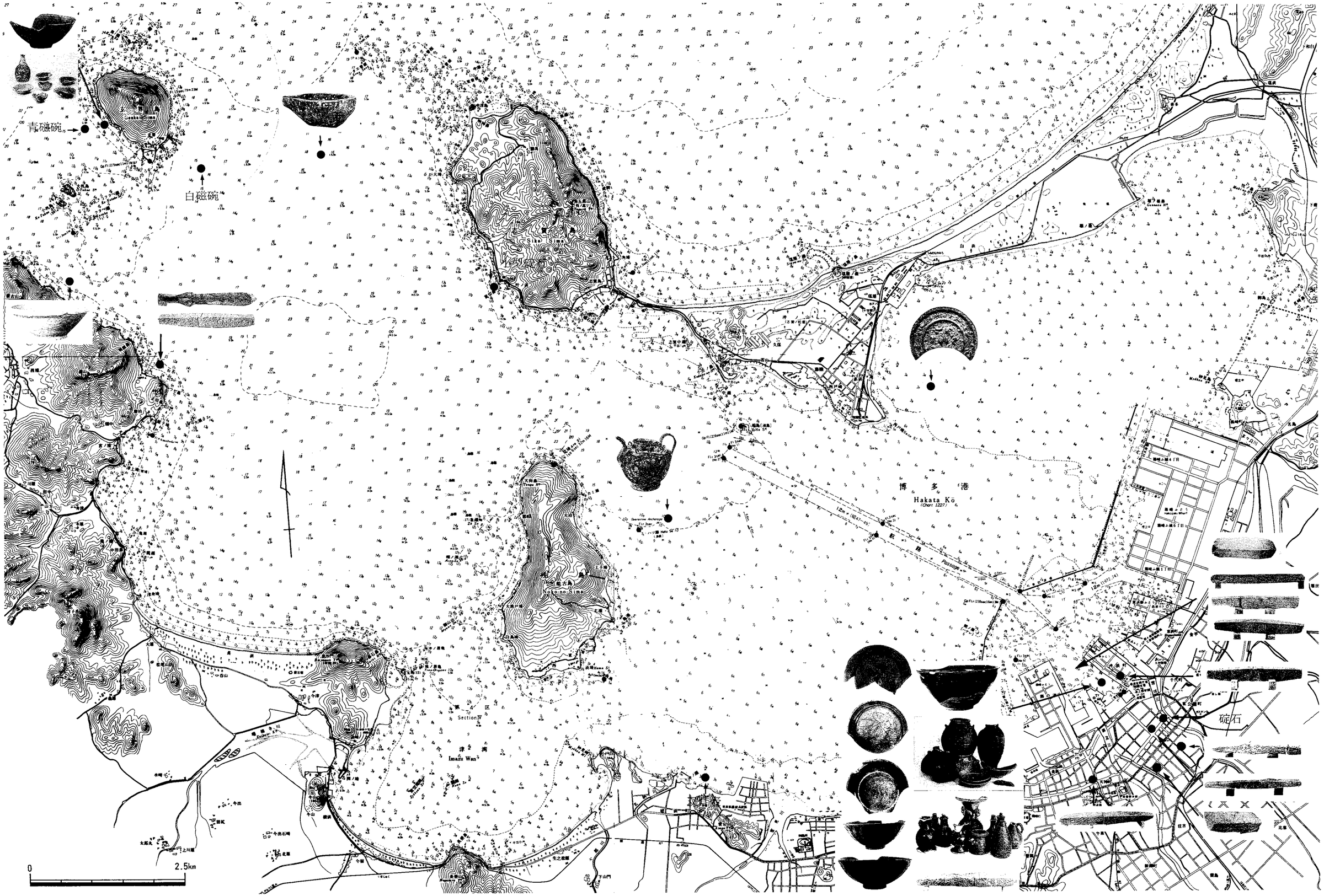


Fig. 6　博多湾海底遺物出土位置図（1/50000）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集
能　古　島

1993年3月15日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号